静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第236集

西　向　遺　跡

平成21年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第236集

西　向　遺　跡

平成21年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

２０１１

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

西向遺跡は、袋井市の南部（旧磐田郡浅羽町）に位置し、東側に太田川が流れる自然堤防上の遺跡です。太田川では平成６年から河川改修工事が行われ、今回の調査も改修工事に伴って行われました。

西向遺跡は最近まで周知されていませんでしたが、平成６年に二瀬東橋の付け替え工事によって、土器類が出土したことを契機に、その存在が知られることとなりました。今回の調査では、まず遺跡の広がりを確認するために、試掘調査及び確認調査を行い、その結果、以前は未周知であった太田川左岸にあらたな遺跡を確認し、大きな成果を上げることができました。この遺跡は富里遺跡として、登録され周知されることとなりました。また、右岸に位置する西向遺跡の範囲がさらに広がることが確認でき、本発掘調査では古墳時代から鎌倉時代の遺跡を確認し、集落が広がっていたことが判明しました。太田川下流域における遺跡のあり方を考える上で、貴重な資料を提供することになりました。今回の発掘調査の成果が、今後各方面で活用され、文化財に対する理解を深め、郷土の歴史を見直す一助になれば幸いです。

最後に試掘、確認調査から本書刊行まで約１年６カ月をかけて実施しました。その過程では、静岡県袋井土木事務所、静岡県教育委員会、磐田市教育委員会、袋井市教育委員会をはじめ多くの関係機関各位、地元住民の方々に御援助と御理解を頂きました。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

2011年２月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所　長　石　田　　彰

例　言

1　本書は、静岡県袋井市（旧磐田郡浅羽町）中地先に所在する西向遺跡の試掘・確認調査及び発掘調査報告書である。

2　調査は、平成21年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の委託を受け、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が静岡県教育委員会の指導のもと実施した。

3　調査期間は、以下のとおりである。

試掘・確認調査　平成21年７月23日から平成22年２月２日
本発掘調査　平成21年11月20日から平成22年７月16日
資料整理　平成22年７月６日から平成23年２月25日

4　調査体制は、以下のとおりである。

【平成21年度】

所長	天野　忍	次長兼総務課長	松村　亨	次長兼調査課長	及川　司
次長兼事業係長	稲葉保幸	総務係長	山内小百合	会計係長	杉山和枝
調査課西部調査係長	富樫孝志	調査研究員	大石祐治	常勤嘱託員	三原翔吾

【平成22年度】

所長	石田　彰	次長兼総務課長	松村　亨	次長兼調査課長	中鉢賢治
専門監兼事業係長	稲葉保幸	総務係長	瀧みやこ	会計係長	杉山和枝
調査課第４係長	富樫孝志	常勤嘱託員	三原翔吾		

5　本書の執筆は、三原が担当した。

6　写真撮影は現地調査では三原が、遺物写真を整理技術員杉山すず代が行った。

7　遺構図の作成の一部を株式会社フジヤマに委託した。

8　本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

9　本調査に関する資料は、静岡県教育委員会が保管・管理している。

凡　例

1　座標は、世界測地系を用い、方位は、世界測地系による方位（座標北）を基準として表示した。

2　調査区は一辺10mのグリッドを設定し、東西列をアルファベットで、南北列をアラビア数字で表記し、北西隅の交点をグリッド名称とした。

3　土色及び遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編1998『新版標準土色帖』に基づいて判別した。

4　遺構の略号は以下の通りである。

SB（掘立柱建物跡）・SK（土坑）・SD（溝状遺構）・SP（柱穴・小穴）・SX（性格不明遺構）

5　遺物実測図中の●は、糸切り痕を示す。

6　図版の縮尺については、第１章第３節を参照されたい。

7　本文中で記載されている土器編年については、第３章第３節を参照されたい。

目　次

序　文
例　言
凡　例

第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の方法と経過 …… 1
　　(1)　試掘・確認調査の方法 …… 1
　　(2)　試掘・確認調査の経過 …… 2
　　(3)　試掘・確認調査の成果 …… 2
　　(4)　本発掘調査の方法 …… 3
　　(5)　本発掘調査の経過 …… 8
　第３節　調査報告書作成の経過 …… 8

第２章　位置と環境 …… 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 9

第３章　調査の成果 …… 14
　第１節　遺跡の概要 …… 14
　第２節　基本層序 …… 14
　第３節　遺構と遺物 …… 15
　　(1)　第１遺構面の遺構と遺物 …… 15
　　(2)　第２遺構面の遺構と遺物 …… 24
　第４節　包含層・遺構外出土遺物 …… 37
　　(1)　古墳時代の遺物 …… 37
　　(2)　奈良時代の遺物 …… 37
　　(3)　平安時代の遺物 …… 40
　　(4)　中世の遺物 …… 40
　　(5)　その他の遺物 …… 44

第４章　まとめ …… 48

写真図版

報告書抄録

写 真 図 版 目 次

写真図版１
１．遺跡遠景（北から）

写真図版２
１．遺跡全景（北から）
２．出土遺物集合

写真図版３
１．基本土層（北壁）
２．基本土層（東壁）
３．基本土層（南壁）

写真図版４
１．第１遺構面調査区全景（南から）
２．１号掘立柱建物跡完掘状況（南から）
３．１号土坑完掘状況（東から）
４．１号土坑遺物出土状況（東から）
５．２号溝状遺構完掘状況（南から）

写真図版５
１．１号溝状遺構完掘状況（南から）
２．１号溝状遺構遺物出土状況（北から）
３．３号溝状遺構完掘状況（南から）

写真図版６
１．３号溝状遺構遺物出土状況(1)（南から）
２．３号溝状遺構遺物出土状況(2)（南から）
３．土器集中１検出状況（南から）

写真図版７
１．第２遺構面調査区全景（北から）
２．２・３号掘立柱建物跡完掘状況（西から）

写真図版８
１．４号掘立柱建物跡完掘状況（北から）
２．ピット14・16～19完掘状況（南東から）
３．ピット21～25完掘状況（南東から）
４．ピット28完掘状況（南から）
５．ピット20完掘状況（東から）

写真図版９
１．４号土坑完掘状況（南から）
２．５号土坑完掘状況（南から）
３．６号土坑完掘状況（南から）
４．６号土坑遺物出土状況（南から）
５．６号土坑炭化物検出状況（南から）
６．７号土坑完掘状況（東から）
７．８号土坑完掘状況（東から）

写真図版10
１．12号溝状遺構完掘状況（南から）
２．12号溝状遺構遺物出土状況（東から）
３．20・21号溝状遺構完掘状況（北から）
４．22号溝状遺構完掘状況（東から）
５．１号性格不明遺構遺物出土状況（南から）

写真図版11
１．出土遺物(1)　土器

写真図版12
１．出土遺物(2)　土器

写真図版13
１．出土遺物(3)　土器

写真図版14
１．出土遺物(4)　土器・埴輪

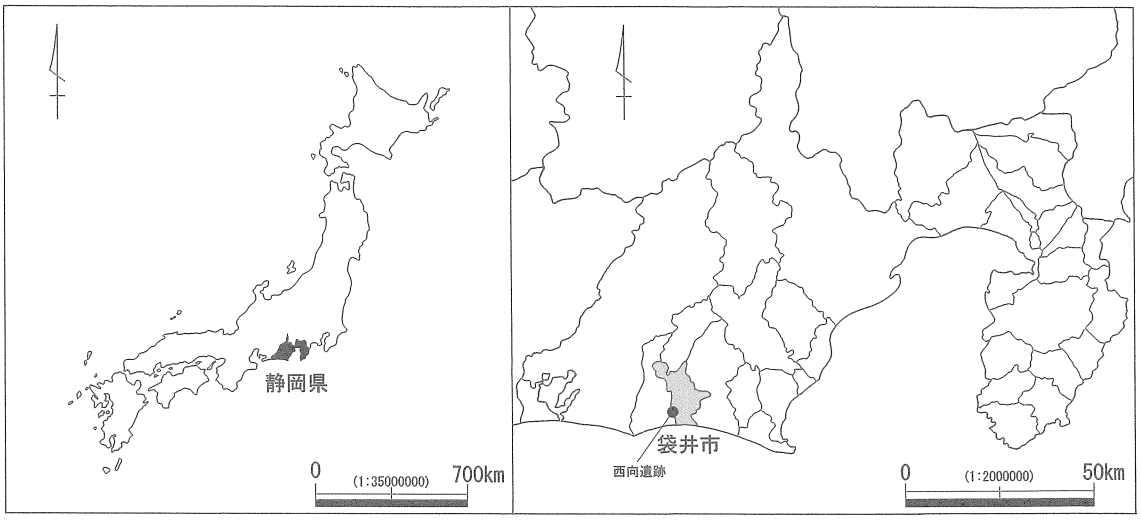
写真図版15
１．出土遺物(5)　土器
２．出土遺物(6)　青磁・白磁
３．出土遺物(7)　砥石・鉄滓・羽口
４．出土遺物(8)　SD3出土貝類

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　１区試掘坑出土遺物 …… 2
第３図　調査区グリッド配置図 …… 3
第４図　１・３区試掘坑配置図 …… 4
第５図　１区土層柱状図(1) …… 5
第６図　１区土層柱状図(2) …… 6
第７図　３区土層柱状図 …… 7
第８図　西向遺跡１次調査 …… 10
第９図　周辺遺跡位置図 …… 11
第10図　基本土層図 …… 15
第11図　第１遺構面調査区全体図 …… 16
第12図　SB1・SK1・SD2実測図 …… 18
第13図　SD1実測図 …… 19
第14図　SD3実測図 …… 20
第15図　土器集中１実測図 …… 21
第16図　SP1・SD1・３・SK1
　　出土遺物実測図 …… 22
第17図　SD3・土器集中１
　　出土遺物実測図 …… 23
第18図　第２遺構面調査区全体図 …… 25
第19図　SB2・３実測図 …… 26
第20図　SB4・ピット実測図 …… 27
第21図　SK3・４・６～８実測図 …… 29
第22図　SD12実測図 …… 31
第23図　SD13・17実測図 …… 32
第24図　第２遺構面検出遺構の切り合い関係
　　…… 32
第25図　SD16・19・20・21・SX3実測図 … 33
第26図　SD22・SX1実測図 …… 34
第27図　SK6・８・SD12・20・22・SX1
　　出土遺物実測図 …… 36
第28図　包含層出土遺物(1) …… 38
第29図　包含層出土遺物(2) …… 39
第30図　包含層出土遺物(3) …… 41
第31図　包含層出土遺物(4) …… 43
第32図　包含層出土遺物(5) …… 45
第33図　包含層出土遺物(6) …… 46
第34図　包含層出土遺物(7) …… 47

挿　表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 12
第２表　出土遺物一覧表 …… 49～51



第１図　遺跡位置図

第１章　調査の概要

第１節　発掘調査に至る経緯

近年、太田川上流域での大規模な開発が保水量の減少をうみ、増水時の下流域住民の安全確保が困難となっている。この問題を解決するために、本遺跡の東側を貫流する太田川では、静岡県袋井土木事務所（以下、袋井土木事務所と略称）によって河川改修工事が実施されている。改修工事に伴い、元島遺跡、西向遺跡１次調査の本調査がすでに実施され、低湿地での遺跡の存在やその調査成果等が明らかになっている。

上記の事業に引き続き平成21年度に実施される予定であった工事範囲は、二瀬西橋から南方400ｍまでと和口橋を中心に南北700ｍを範囲としていた。袋井土木事務所は、工事に先立ち埋蔵文化財の所在の有無を静岡県教育委員会（以下、県教育委員会と略称）に照会された。県教育委員会は、工事範囲が西向遺跡の埋蔵文化財包蔵地に含まれ、和口橋付近もその周辺に位置していることを回答した。

この回答により袋井土木事務所は県教育委員会と埋蔵文化財の取り扱いについて協議に入り、本発掘調査が必要と判断された。その後、県教育委員会から本研究所に調査依頼の打診があり、袋井土木事務所と県教育委員会、本研究所が期間と調査範囲等について協議を行い、三者の合意により調査を実施することとなった。

はじめに遺跡の範囲を確定するため、平成21年７月23日から平成22年２月２日にかけて、太田川両岸にわたる調査対象面積55,000㎡に試掘・確認調査を行った。試掘・確認調査を受けて、平成21年11月20日から平成22年７月16日まで、調査面積2,550㎡を対象に本発掘調査を行った。

第２節　調査の方法と経過

(1)　試掘・確認調査の方法

確認調査対象地は、太田川両岸に渡っていたため右岸を１区、左岸を３区と呼称することとした。１区はさらに、ローマ数字Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを付し便宜上調査区を分割した。また、試掘坑（TPと略称）の番号は、１区については北西隅から、３区は掘削した順にアラビア数字を付しその名称とし、例えば１区TPⅡ－１のように呼称することとした。なお、確認調査前に太田川・原野谷川間の中州を２区と呼称し調査予定であったが、今年度は試掘・確認調査を行わないことが決定されたため、欠番とした。

調査は、５ｍ四方の試掘坑を設定し、重機に平爪を装着し慎重に掘削した。遺構または遺物を検出した場合は、精査、写真撮影、遺物取り上げ作業を順に行い、重機の掘削土中に遺物が含まれていないかも併せて確認した。また、遺構が包含層上面で確認できた場合は、重機で掘削せずに残し、その周辺を重機で掘り下げて、下層の確認作業を行った。なおテストピットは基本的に５ｍ四方に設定したが、調査途中に壁面の崩落防止のために間口を一部７ｍ四方（１区Ⅲ－１～55）へ変更した。

掘削終了時には土層断面図を作成し、土色・含有物を記録し、併せて土層断面の写真撮影を行った。出土遺物は出土層位を把握するに留め、個々に出土地点を記録していない。最後に試掘坑掘削土を埋め戻し、これら上記作業を順に繰り返し行っていった。試掘坑は１区で65カ所、３区で35カ所の計100カ所を調査した。

写真撮影には、35㎜カラーネガフィルム・カラーポジフィルムを使用し、メモ写真用にコンパクトデジタルカメラを用いた。試掘坑の平面図作成には、トータルステーションを用い記録し、株式会社フジヤマに図面作成を委託した。

⑵　試掘・確認調査の経過

７月23日に袋井土木事務所との契約を締結し、同月29日に再度、調査範囲や工程、日程等について協議を行い、調査開始とした。７月29日から11月９日まで基本的に１日２カ所の試掘坑を掘削・調査し、太田川拡幅工事との兼ね合いから、１区と３区を行き来しながらの調査であった。11月９日には、遺跡の範囲や堆積状況の確認ができ、調査を終了することとした。同日に重機を搬出し、翌日10日に倉庫や仮設トイレを撤去し、すべての調査工程を終了した。11月11日から試掘・確認調査結果概要資料を作成し、30日にその成果を県教育委員会へ報告した。２月２日に契約が満了し、事業を終了した。

⑶　試掘・確認調査の成果（第４図）

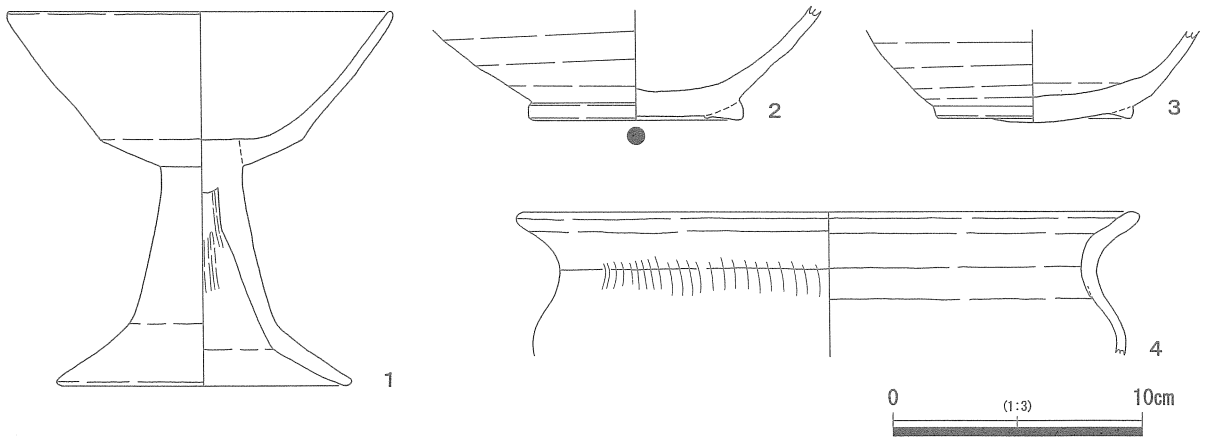
先述したとおり試掘坑は１区で65カ所、３区で35カ所の調査を行った。以下、各地区の土層堆積状況・遺物出土状況について概要を記述していく。

１区（第５・６図）　65カ所のうち43カ所で遺構または遺物を確認した。１区は調査対象地のほぼすべての範囲で遺構ないし遺物が出土しており、南北340mに渡って遺跡が広がることが判明した。遺物の出土量は調査対象地西側で多く、また遺物包含層は西から東へ向かって緩やかに傾斜していた。基盤層となるＸ層も同様な地形がみられた。

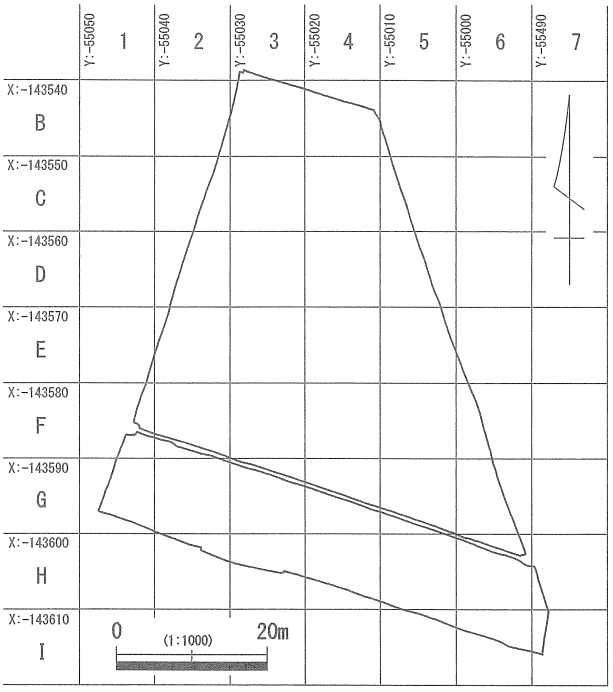
遺物包含層は４層確認でき、Ⅵ・Ⅶ層が古代～中世前半、Ⅷ・Ⅸ層が古墳時代中期～後期・終末期を主とすることが出土遺物から比定できる。Ⅷ層は遺跡全体に広がり、Ⅸ層は東半部に確認できた。また灰白色粘土層が一部の試掘坑で確認でき、地山が流出して堆積したものと考えられる。調査対象地北側や南側では、遺構・遺物の出土量は比較的少なく、中央部で多い。また、中央部では２または３遺構面が確認できた。検出した遺構は土坑、溝状遺構、柱穴・小穴で、古墳時代の住居跡や墳墓は検出していない。

１区出土遺物（第２図）　１は土師器高坏で、器面全面が磨滅している。脚部内面に棒状工具によるナデが認められ、坏部との接合部には粘土を充填している。Ⅲ期に比定でき（松井 1992）、５世紀後半に位置付けられる。２は山茶碗碗である。高台は低く潰れ、底部とほぼ水平となっている。胎土からみて渥美・湖西型山茶碗である。山茶碗Ⅲ期－１に比定できよう。３は山茶碗碗である。高台は低く扁平で底部が高台より下方へ突出し、丸底気味である。胎土からみて湖西・渥美型山茶碗である。山茶碗Ⅲ期－１に比定できよう。４は土師器長胴甕である。頸部にハケ目が認められる。

なお、１・３はTPⅡ－６、２はTPⅢ－２、４はTPⅢ－１から出土した。



第２図　１区試掘坑出土遺物



第３図　調査区グリッド配置図

３区（第７図）　35カ所のうち10カ所で遺構または遺物を検出した。和口橋以北では遺構・遺物は検出できず、山茶碗小片がTP7の上層より１点出土しただけで、上流域から流出したものと考える。また、和口橋以北に設定したTP1では、１ｍ程度の礫層が確認でき、旧原野谷川の支流が和口橋付近を蛇行しながら流れていたことが推定できる。

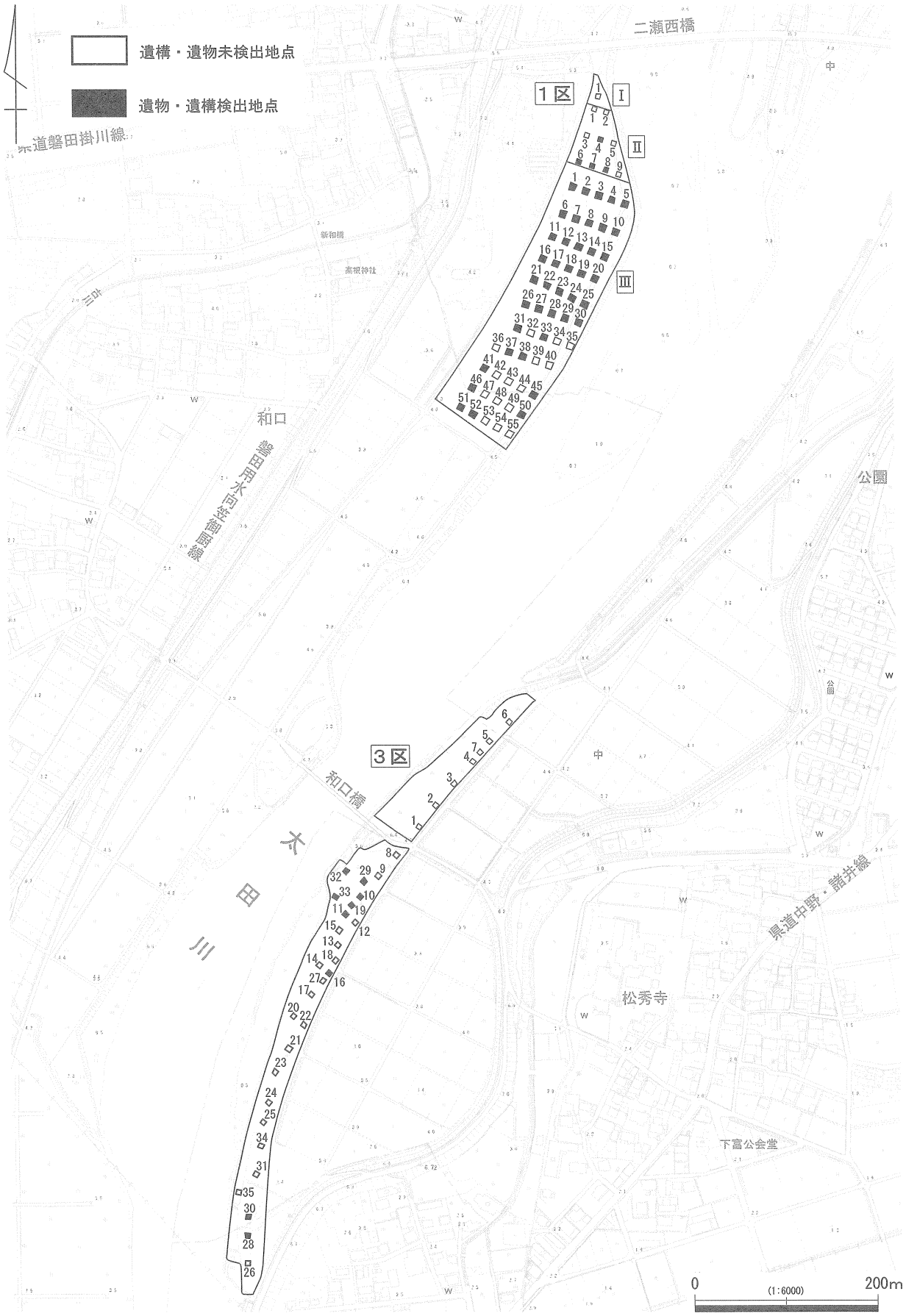
遺物包含層は、調査対象地中央部と南端部で土質が異なるが、いずれも２層を確認した。中央部（TP9・10・32・33）では１区と同様に、古代から中世前半と古墳時代中期を主体とする時期の土層である。南端部（TP28・30）では中世の遺物のみ確認でき、古代以前の遺物は出土しなかった。また、３区TP16は調査対象地中央部に位置し、古代の須恵器壺等が出土したが、その標高は３区中央部の包含層より0.6から１ｍ下がっており、何らかの落ち込みがあった可能性が高い。調査終了後にこの結果を受けて、３区は富里遺跡として遺跡登録された。

⑷　本発掘調査の方法（第３図）

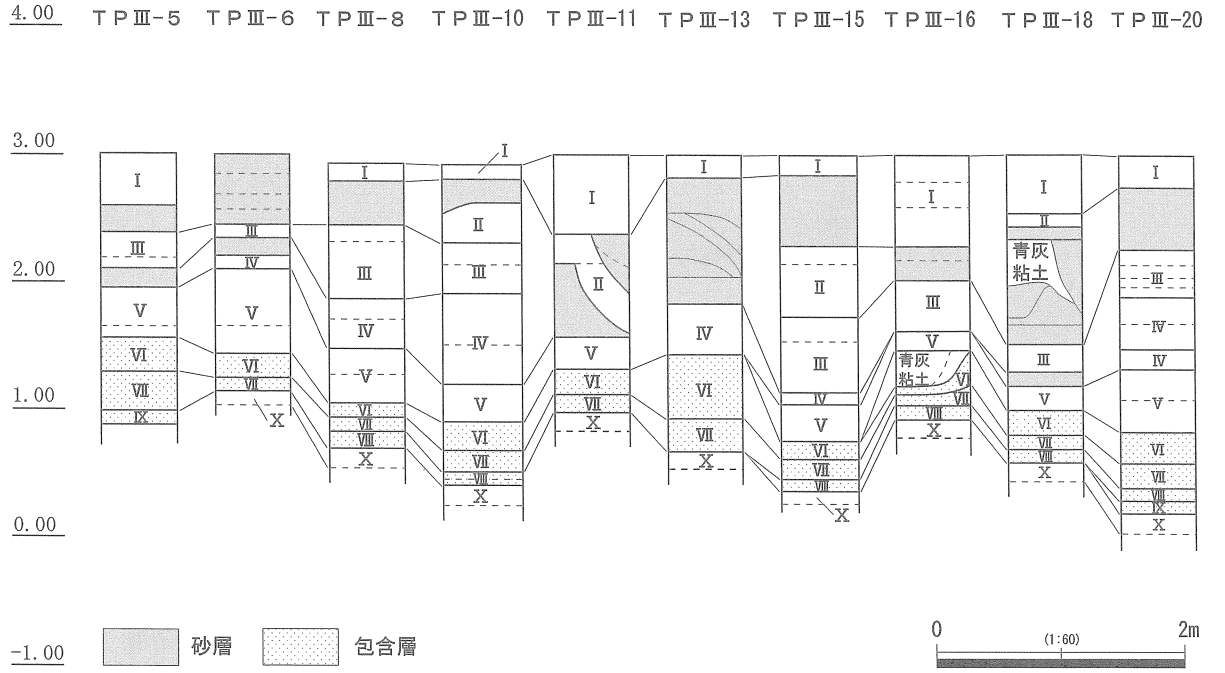
確認調査の結果を受け、西向遺跡の調査対象面積は約30,000㎡となった。袋井土木事務所より１区北端部から調査を進めて欲しいとの依頼があったため、１区で遺物包含層を確認した１区TPⅡ－３を北西端部とし、そこから1,800㎡の調査区を設定した。調査が進行した段階で、さらに調査区を南側へ拡張し、調査面積を2,550㎡とした。表土除去は重機で行い、平爪を装着し包含層上面まで掘削した。排土はクローラーダンプにより調査区外へ搬出し、仮置きした。

表土除去後は、調査区に世界測地系に基づいて一辺10ｍのグリッドを設定し、これらを使用して地形や遺構の測量、出土遺物の取り上げ作業を行った。遺構掘削の際には、土層帯を設け、遺構覆土の堆積状況を確認し、縮尺１／20で土層断面図を作成した。また、第１遺構面では１ｍ間隔で標高を測量・記録し、第２遺構面では写真測量により10㎝間隔でコンター図を作成した。

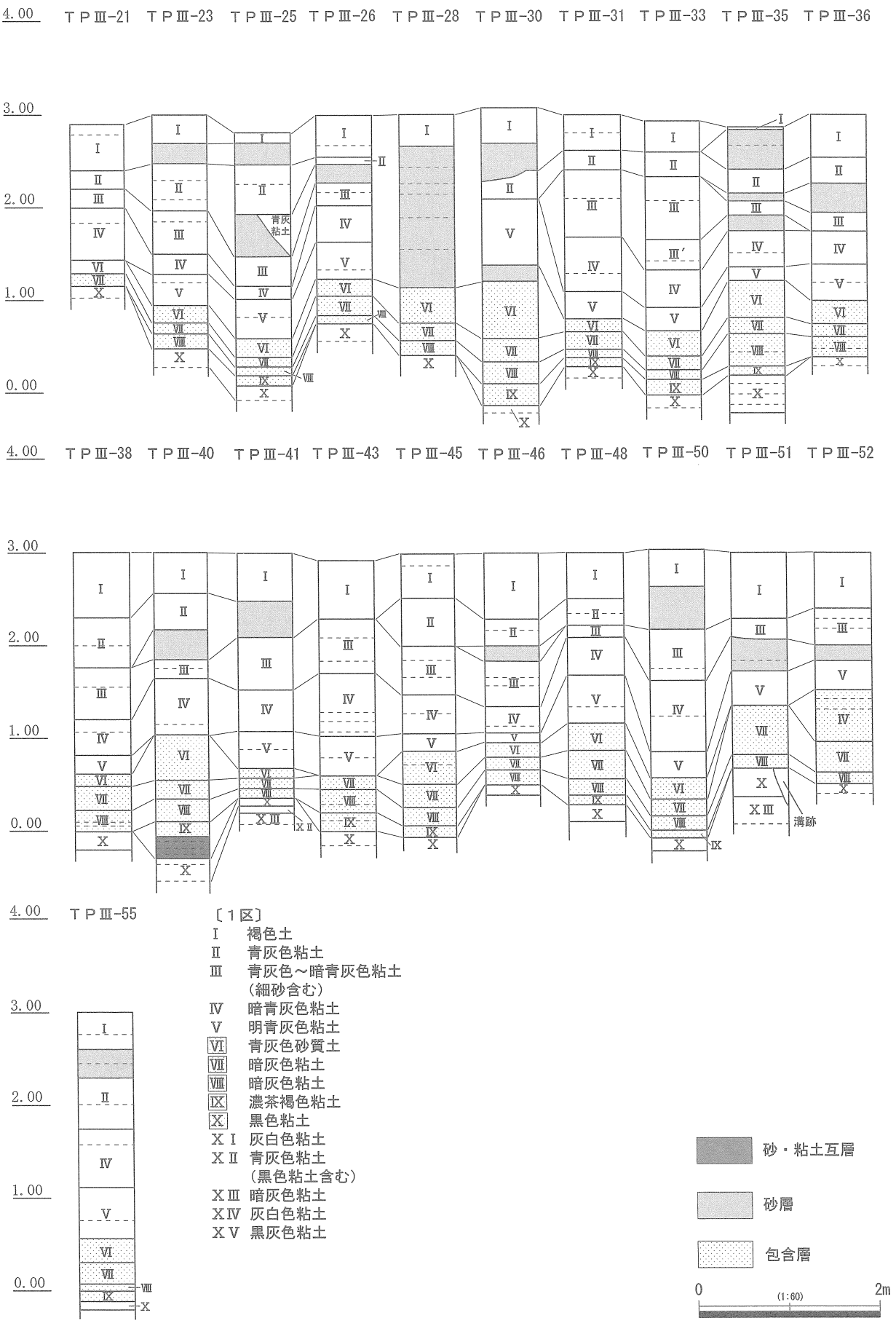
写真撮影には、６×７版モノクロームフィルムを主に使用し、補足として35㎜カラーネガフィルム・カラーポジフィルムを、メモ写真用にコンパクトデジタルカメラを用いた。全景写真には４×５版カ



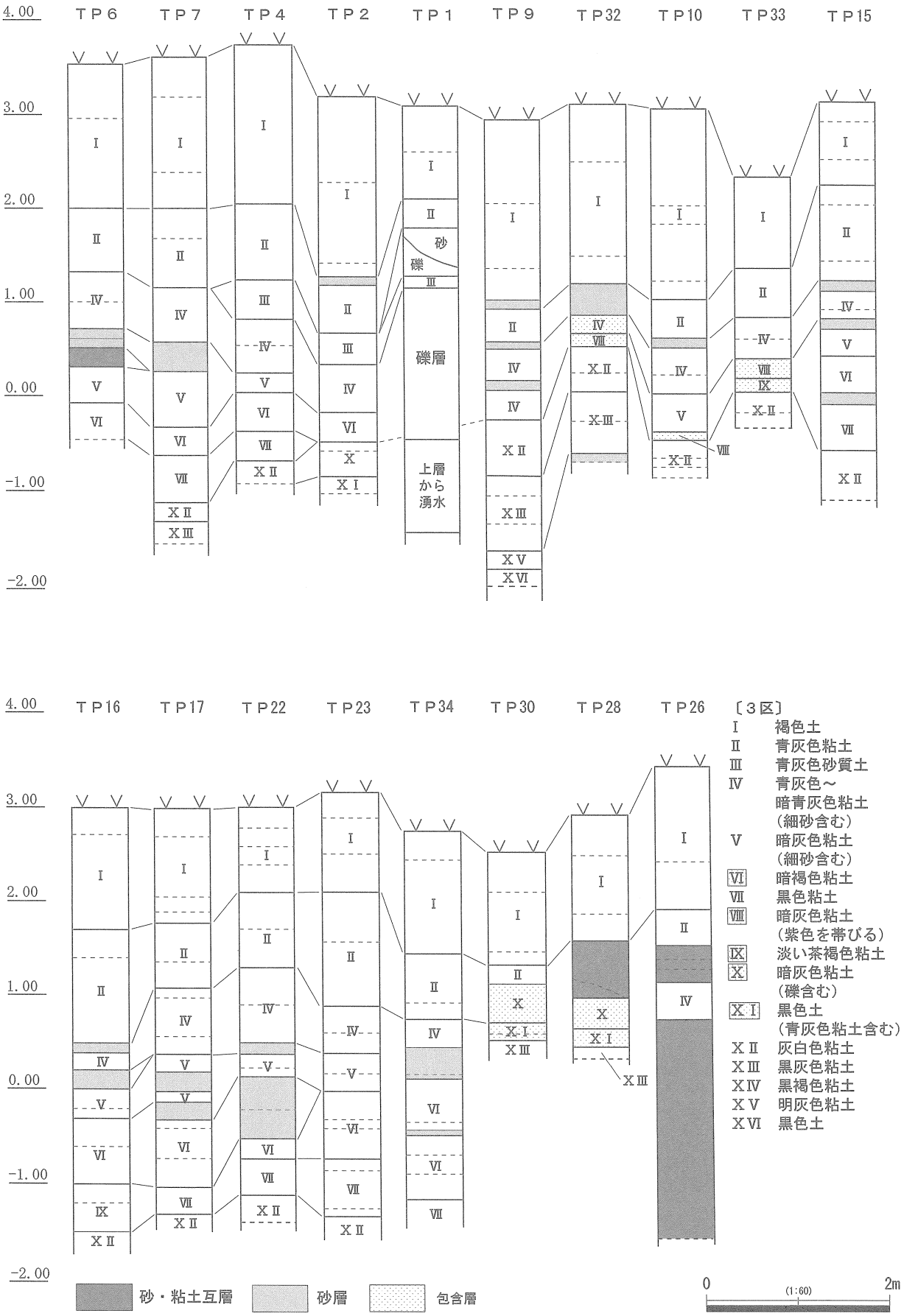
第４図　１・３区試掘坑配置図



第５図　１区土層柱状図(1)



第６図　１区土層柱状図(2)


4.00
3.00
2.00
1.00
0.00
-1.00
-2.00
ＴＰ６
ＴＰ７
ＴＰ４
ＴＰ２
ＴＰ１
ＴＰ９
ＴＰ32
ＴＰ10
ＴＰ33
ＴＰ15
砂
礫
礫層
上層から湧水
ＴＰ16
ＴＰ17
ＴＰ22
ＴＰ23
ＴＰ34
ＴＰ30
ＴＰ28
ＴＰ26
〔３区〕
Ⅰ　褐色土
Ⅱ　青灰色粘土
Ⅲ　青灰色砂質土
Ⅳ　青灰色～暗青灰色粘土（細砂含む）
Ⅴ　暗灰色粘土（細砂含む）
Ⅵ　暗褐色粘土
Ⅶ　黒色粘土
Ⅷ　暗灰色粘土（紫色を帯びる）
Ⅸ　淡い茶褐色粘土
Ⅹ　暗灰色粘土（礫含む）
ⅩⅠ　黒色土（青灰色粘土含む）
ⅩⅡ　灰白色粘土
ⅩⅢ　黒灰色粘土
ⅩⅣ　黒褐色粘土
ⅩⅤ　明灰色粘土
ⅩⅥ　黒色土
砂・粘土互層
砂層
包含層
0
(1:60)
2m

第７図　３区土層柱状図

ラーポジフィルム・モノクロームフィルムを使用した。また、出土遺物の洗浄・注記作業、写真・図面整理は現地作業と並行して実施した。

(5)　本発掘調査の経過

11月20日に袋井土木事務所と本研究所との契約を締結し、同月30日に期間・調査範囲・排土の処置等について協議を行った。12月４日から作業員用コンテナや備品等の搬入などの調査準備にとりかかり、これらと並行して、表土除去作業も開始した。12月16日から人力による作業を開始し、調査区周囲に排水溝を掘削することから始め、順次包含層上層の掘削、第１遺構面検出遺構の調査、包含層下層の掘削と進めていった。３月29日には包含層下層の掘削まで終了していたが、南側へ調査区を拡張することとなり、４月５日から４月14日まで調査区拡張部の表土除去作業を行った。

４月15日から人力での調査を再開し、第２遺構面検出遺構の調査、調査区拡張部の包含層上層掘削作業を行った。包含層上層の掘削と並行して、拡張部第１遺構面の調査を進め、５月28日までに第１遺構面の調査を終了した。引き続いて、拡張部包含層中・下層の掘削、拡張部第２遺構面の調査を６月11日まで行い、調査は全景写真を残すだけとなった。その後、降雨が続き全景写真や写真測量が実施できなかったため、作業を中断し洗浄・注記作業などを進めた。翌月７日から９日にかけて調査区全体の清掃・写真撮影、写真測量を行い、調査を終了した。

第３節　調査報告書作成の経過

７月５日に出土品や図面・写真類を島田整理事務所へ搬入し、同月６日から作業を開始した。はじめに遺物の分類・接合作業等を行い、同月26日から順次、遺物実測作業を進めた。接合作業が終了した７月27日から復元作業を実測作業と並行して進め、実測作業は９月14日まで行った。

８月19日から遺構写真版組、遺構図面版組、観察表作成、遺物・遺構トレース作業を順に行い、これらの作業が10月13日までに終了した。

10月14日から図面編集、割付作業を行い、10月28日までにすべての作業を実施し、見直し・図版の点検等を行い、11月11日に入稿した。整理作業は島田整理事務所で実施し、遺物写真撮影は９月25日から９月27日まで本研究所本部にて行った。

なお本書に掲載した遺構・遺物の実測図面は、以下のように縮尺を統一した。

遺物実測図　1/３　　調査区全体図　1/400　　SD1・３・22全体実測図　1/200　または　1/400

遺構実測図　1/40　または　1/60　　出土状況図　1/40　　遺構実測図内の遺物実測図　1/10

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境（写真図版１）

西向遺跡は、袋井市（旧磐田郡浅羽町）中の太田川河川敷内に所在し、袋井駅から約５㎞、磐田駅から約４㎞の位置にある。袋井市は、北に周智郡森町、東に掛川市、西に磐田市と接し、総面積は108.56㎢である。市内には太田川・原野谷川が縦断し遠州灘へ注ぎ、それらに端を発する小河川が貫流している。また、北東に小笠山丘陵、北西に磐田原台地などの中・高位段丘が位置する。遺跡周辺は粘土・泥炭層など有機質を多量に含む土、河川による礫層などが堆積する軟弱な地盤である。

本遺跡は磐田市と袋井市の市境を流れる太田川と春埜山から南流する原野谷川の合流地右岸に所在し、磐南平野の東部にあたる。磐南平野は海面の変動によって形成された砂堤列により、福田・浅羽地域等にあった入江が閉塞し生まれ、潟湖・後背湿地を形成した。そこに旧原野谷川・旧太田川が流れ込み自然堤防が成立した（加藤 1993）。砂堤列は遠州灘の海岸沿いや国道150号線とその北側900ｍの地点にあり、柴田稔氏はこの砂堤列を７～８列に区分できるとしている（柴田 1987）。

本遺跡の周辺に位置する遺跡は、このような居住や生産活動に適した地を占地しており、自然環境とのつながりが注目・特徴づけられる遺跡である。

第２節　歴史的環境（第９図）

本遺跡と関係の深い古墳時代から中世を中心に、西向遺跡周辺で調査されている遺跡を紹介しておきたい。

古墳時代　当該期の集落は、浅羽地域で十二所遺跡（9）・古新田遺跡（11）・新堀遺跡（17）・青木遺跡（18）、福田地域で元島遺跡（39）が調査され、各遺跡は自然堤防や段丘などの微高地に位置する。ただ、北野遺跡（22）のように潟湖の周囲で低地となる場所に遺跡が所在している場合もあり、潟湖との関係が注目されている（山本 2000）。古墳や古墳群も、多くは磐田原台地と小笠山丘陵に立地しているが、法音庵古墳（20）は浅羽地域南部の砂堤列に位置している。

磐田原台地南東部での古墳の初現は、松林山１号墳（30）・経塚古墳（27、連城寺８号墳）である。その後、前期末までに前方後円墳である稲荷山古墳（連城寺６号墳）、大型円墳の秋葉山古墳（連城寺７号墳）・高根山古墳（31）などが築かれ、大首長墓がこの地に濃密に分布している。また、中期中葉から末葉頃には磐田原台地には堂山古墳（37）が、小笠山丘陵には遠江地域最大の方墳五ヶ山B2号墳（13）や前方後円墳である五ヶ山B1号墳、貫名地B2号墳（12）など豊富な副葬品をもつ古墳が相次いで築造されている。五ヶ山B2号墳の被葬者は磐田原台地西縁の堂山古墳の被葬者を支えた人物であると評価されている。

後期には、横穴式石室墳の甑塚古墳（25）や竪穴系横穴式石室をもつ大門大塚古墳（4）が出現し、新たな葬制を伴った墓制が当該地域にも波及する。また、後期古墳で特に注目されるのは、小笠山丘陵に横穴式木室という特異な主体部をもつ団子塚古墳群（8）や北山古墳群（7）が分布することである。これらの古墳の被葬者は須恵器生産や小鍛冶に携わる渡来系氏族との関連も指摘されている。

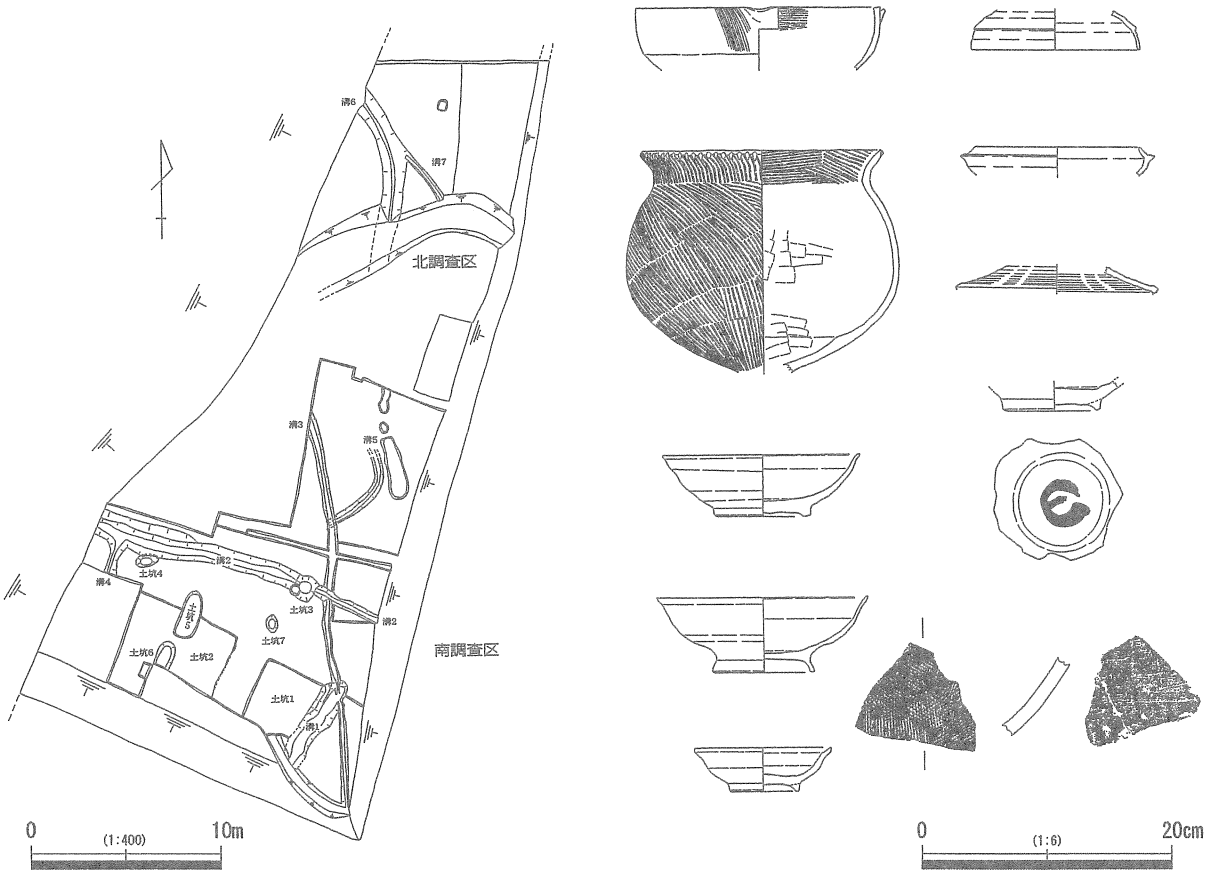
集落遺跡では、新堀遺跡・古新田遺跡が注目できる。新堀遺跡では、住居と土器廃棄土坑が検出され、前期の一括資料が得られている。土坑内には完形の土器、手づくね土器、勾玉、鉄鎌や炭化物が伴出しており、前期の儀礼行為が窺える。また、当遺跡ではＳ字口縁の台付甕や山陰系甕が出土し、他地域との交流を看取できる。

古新田遺跡では「コ」の字状配置の掘立柱建物跡や「ロ」の字状配置の倉庫群など地域首長の主館や居館などが検出され、一般的に出土量の少ない５世紀代の須恵器も多く出土している。また元島遺跡や北野遺跡でも多量の須恵器が出土する。一般的な集落跡は古新田遺跡のように面的に調査されている例に乏しいが、格段の差があることが推測される。古新田遺跡が営まれていた中期中頃以降には、磐田原台地東南部に築かれていた大型古墳が減少し、以前の偏在的な大型古墳分布が看取できなくなる。一方で天竜川流域や原野谷川流域での大型古墳の分布が相対的に多くなる傾向にある。

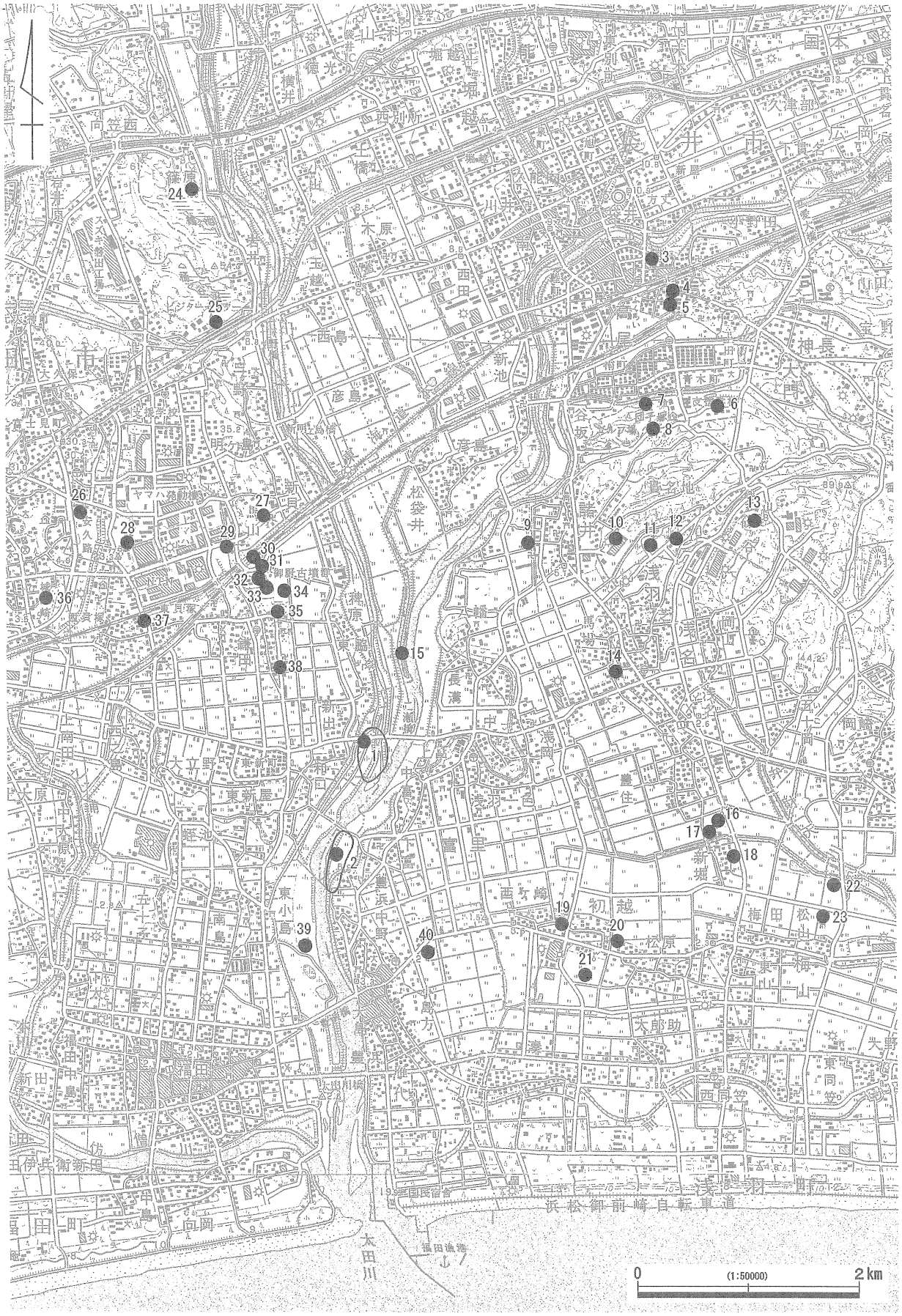
浅羽地域を囲うように位置する磐田原台地と小笠山丘陵には、大首長墓やそれに準ずる古墳が濃密に分布し、これらの被葬者が眼前にみえる潟湖を含む領域やそれに伴う交易などを支配していたと考えられる。

古代　律令制下では静岡県西部は遠江国に属していたが、遺跡が位置する浅羽地域がどの郡に属していたかは、長下郡または山名郡であるという二つの意見があり明確でない。長下郡は長田郡から、山名郡は佐益郡（後に佐野郡へ改称）から分かれて立郡している。『和妙類聚抄』には長下郡に、太田・長野・貫名・伊筑・幡多・大楊・老馬・通隈の８郷が、山名郡に山名・衾田・宇智・信芸・萩戸・久努の６郷が、佐野郡には山口・小松・邑代・幡羅・日根がみえる。現在の地名として残っている所は少なく、郷名からもその比定地は判然としていない。

一方、小笠山丘陵北方の坂尻遺跡から「佐野厨家」・「驛長」・「日根驛家」、新堀遺跡からは「山名厨」などの墨書土器が出土し、掛之上遺跡（3）からは大型の柱穴をもつ総柱建物跡などが検出されている。考古学的調査では、墨書土器・遺構の存在から坂尻遺跡は佐野郡家、掛之上遺跡・新堀遺跡は山名郡家またはその出先機関に比定できる可能性が指摘されている。また、本遺跡の北西に位置する鎌田・鍬影



第８図　西向遺跡１次調査



第９図　周辺遺跡位置図

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	県番号	遺跡名	時期	内容
1	－	**西向遺跡**	古墳～中世	本報告書所収。
2	－	**富里遺跡**	古墳～中世	試掘・確認調査対象地。本報告所収。
3	151	掛之上遺跡	縄文～近世	豪族居館か。山名郡家推定地。
4	159	大門大塚古墳	古墳	竪穴系横穴式石室をもつ古墳。６世紀中頃。
5	157	大門遺跡	縄文～近世	弥生時代中期から後期の方形周溝墓、集落跡。
6	194	高尾向山古墳群	古墳	前方後円墳を含む古墳９基からなる古墳群。
7	4	北山Ａ古墳群	古墳	横穴式木室墳を含む４～７基程度の群集墳。古墳時代後期。
8	6	団子塚Ｃ古墳群	古墳	円墳５基、小石室５基からなる古墳群。横穴式木室墳含む。
9	14	十二所遺跡	弥生・古墳・中世	弥生時代後期から古墳時代中期の集落跡。
10	17	貫名地遺跡	古墳・中世	古墳時代前期の集落跡、方形周溝墓。
11	45	古新田遺跡	古墳	古墳時代後期の豪族居宅。
12	18	貫名地Ｂ古墳群	古墳	前方後円墳を含む５基からなる古墳群。
13	19	五ヶ山Ｂ２号墳	古墳	34m×29mの方墳。甲冑・盾等出土。古墳時代中期。
14	23	若宮遺跡	弥生・中世	散布地。
15	－	長溝中島遺跡	中世	12・13世紀の短期間の集落跡。
16	30	北ハサマ遺跡	弥生・古代～中世	奈良時代～中世の集落跡。
17	－	新堀遺跡	古墳～鎌倉	「山名厨」墨書土器出土。山名郡家推定地。
18	31	青木遺跡	弥生・古墳・中世	弥生時代から継続的に営まれている集落跡。
19	39	相馬遺跡	古代・中世	散布地。
20	40	法音庵古墳	古墳	直径20mの円墳。５世紀末から６世紀初頭。
21	43	権現山遺跡	弥生・中世	弥生時代から中世の集落跡。
22	－	北野遺跡	古墳・近世	古墳時代後期の集落跡、大溝。ＴＫ10型式並行期。
23	－	宮前遺跡	古代・近世	古墳時代前期の集落跡。
24	154	篠原中世墓	古墳・中世・近世	
25	161	甑塚古墳群	古墳	遠江地域最古の横穴式石室墳を含む４基からなる古墳群。
26	192	安久路古窯	古墳	須恵器窯跡。ＭＴ15型式並行期。
27	176	連城寺古墳群	古墳	稲荷山・連城寺経塚古墳を含む８基からなる古墳群。
28	188	安久路古墳群	古墳	安久路丸山古墳（直径47m）を中心に３基からなる古墳群。
29	180	大原墳墓群	中世	中・近世の墳墓群。宝篋印塔・五輪塔出土。
30	178	松林山古墳	古墳	全長約107mの前方後円墳。埴輪・三角縁神獣鏡など出土。
31	181	高根山古墳	古墳	直径35mの円墳。埴輪出土。古墳時代中期初頭。
32	182	神明古墳群	古墳	高根山古墳を含む現存６基からなる古墳群。
33	183	兎山古墳群	古墳	円墳３基からなる古墳群。
34	184	御厨堂山古墳	古墳	現状は確認できない。古墳時代後期後半。
35	185	八王子古墳群	古墳	円墳７基からなる古墳群。
36	226	城之崎Ａ古墳群	古墳	直径60mの円墳城之崎丸山古墳を含む２基からなる古墳群。
37	189	堂山古墳群	古墳	前方後円墳を含む６基からなる古墳群。
38	186	鎌田・鍬影遺跡	弥生～中世	八葉素弁蓮華文軒丸瓦出土、寺院跡。
39	2	元島遺跡	弥生～近世	弥生時代から近世の集落跡。近世の流通拠点。
40	1	塩口遺跡	古墳	散布地。

ゴシック体は本報告書所収

遺跡（38）では、「大草」・「草寺」墨書土器が出土しており、寺院が付近に所在する可能性が高い。調査の進展とともに古代の様相が明らかになりつつある。

中世　当該期には、本遺跡周辺に国衙領、神宮領の鎌田御厨、観学院領浅羽荘が旧太田川・原野谷川を境に分布し、浅羽荘は諸井以南に広がる広大な荘域を有していた。国衙領の実態については記録がほとんどなく、その詳細は不明であるが、西向遺跡の範囲は国衙領に含まれる。

本遺跡の500m北方に12世紀後半代に比定されている長溝中島遺跡（15）が所在し、国衙領長溝郷に関連する遺跡で、貿易陶磁・瓦器碗などが出土したことから物資の流通拠点であることが指摘され（山本 2001）、本遺跡もその立地から長溝中島遺跡との関連が指摘される。西向遺跡１次調査（山本 2003）では、12世紀代を中心とする集落が検出され、本遺跡と類似する様相である。周辺の遺跡を概観すると、浅羽低地には北ハサマ遺跡（16）が所在し、柵列による区画を伴う掘立柱建物跡が検出され、清ヶ谷窯跡群の興隆と建物跡の整備状況が合致することから、同窯跡群との関連が指摘されている。また、十二所居館では、溝を伴う幅５～６ｍの土塁が検出されている。遺跡の周辺は当時、熊野山領の山名庄諸井郷であり、荘園支配の居館跡ではないかと推定されている。

いずれの時代も多くの遺跡が高乾地を意識しながら生活・居住し、また、河川や潟湖を通して物資の交易・流通や他地域との交流を行っていた姿を想起できよう。

第３章　調査の成果

第１節　遺跡の概要（写真図版２）

本遺跡では、掘立柱建物跡４棟、柱穴・小穴38基、土坑８基、溝状遺構21条、性格不明遺構３基、土器集中１カ所を検出し、２つの遺構面を確認した。

第１遺構面は、８世紀中頃～13世紀後半代に比定でき、12世紀代を主体としている。検出した遺構は少なく、掘立柱建物跡１棟、土坑１基、溝状遺構３条、土器集中１カ所である。遺構面は標高0.8～1.3ｍで、西から東へ傾斜し、西南部は微高地状となっていた。この微高地に遺構が所在した。

第２遺構面は、５～７世紀中頃に比定でき、５世紀後半代を主体としているが、遺構に伴う遺物は少なく、出土したとしても小破片で遺構の年代を直接比定することは困難であった。検出した遺構は、掘立柱建物跡３棟、柱穴・小穴38基、土坑７基、溝状遺構18条、性格不明遺構３基である。遺構面は標高0.3～1.0ｍであるが、検出した土坑などでは遺構底面は海抜０ｍ以下となる部分もある。溝状遺構は概ね真北を意識して掘削されていた。

出土遺物のほぼすべてが土器・陶磁器類であるが、包含層から砥石２点、羽口１点、鉄滓４点も出土している。出土遺物を正確に計量していないが、古墳時代・古代の土師器や中世の土鍋類がテンバコ９箱、須恵器・灰釉陶器・山茶碗が11箱出土した。前者は小破片が多く器種分類が困難だが、器形の分かるもので判断すれば中世の土鍋類は少量で土師器が多く、その中でも高坏が目立つ傾向にある。後者に関しては、山茶碗が須恵器や灰釉陶器の約５倍程度の出土量である。山茶碗の多くは湖西・渥美型山茶碗で、東遠型や尾張型、北部系の山茶碗も確認できる。また常滑古窯群や渥美古窯群などで生産された中世陶器、舶載の貿易陶磁５点も出土している。つまり古墳時代・古代の土師器と山茶碗がほぼ同量、須恵器・灰釉陶器がその約５分の１、土師質土器や貿易陶磁は数える程度である。

なお３号溝状遺構上層からは厚さ約５㎝、長軸0.8ｍの貝層（ヤマトシジミ）を検出している。

第２節　基本層序（第10図、写真図版３）

本遺跡西側に設けられている農道は、現地表面で標高約５ｍを測る。試掘・確認調査着手以前に、河川改修工事に伴い土取り工事があり、現地表面から１～２ｍの堆積土を除去していた。この土取り工事の立会の際には、排水溝が調査区を縦断するように埋設されており、水田や畑地が広がっていたと考えられる。このような水田などの耕作地は、土取り工事によって削平された。

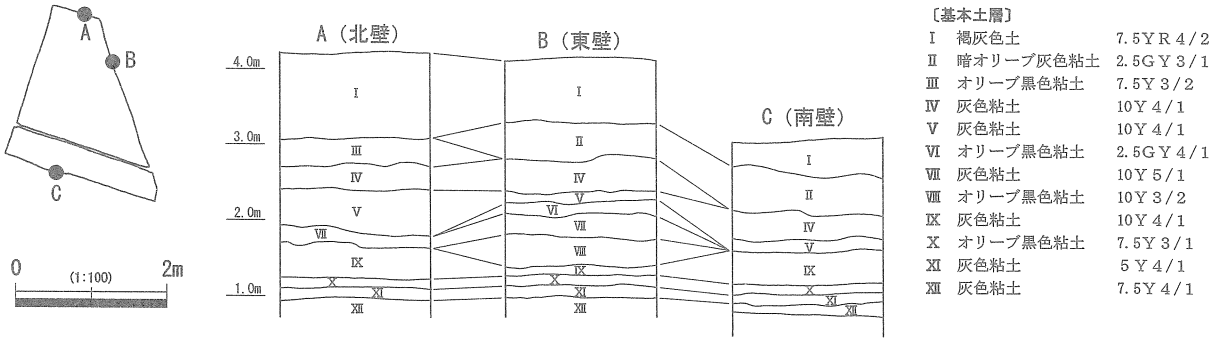
本遺跡での堆積土は、第２章地理的環境で記述したように、河川の堆積物で構成されており、粘土・砂質土を主体として若干の礫や炭化物を含み、Ⅰ層以下は還元土層であった。基本土層は調査区の北・東・南壁に設定し、３ｍ幅で土層断面図を作成した。包含層以上の表土は複雑な堆積を成していたが、基本土層を設定した地点では８層、包含層は南東方向に傾斜するように堆積し、３層（Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層）認められた。ただ、調査区の西半部では包含層が２層（Ⅸ・Ⅹ層）のみ堆積しており、Ⅺ層が認められなった部分もある。

遺構は、Ⅹ層上面とⅫ層上面（基盤層）で確認しており、包含層出土遺物から前者が８世紀中頃～13世紀後半、後者が５～７世紀中頃に比定でき、出土土器から７世紀末葉～８世紀前半は空白期間となる可能性が高い。Ⅹ層は南西部で厚く堆積しており、調査区南西部は微高地状となり、この上に遺構が確認できた。また、基盤となるⅫ層は、北西から南東に向かって傾斜していた。以下、層位毎に堆積状況を概観する。

Ⅰ・Ⅱ層を色調により区分したがどちらも砂質土であり、グライ化の差異によって生じている。Ⅰ層とⅡ層の境はいずれの土層断面でも標高2.5～３ｍにある。

Ⅱ層以下包含層までは、粘土と砂質土がほぼ互層をなす形で堆積しており、土壌の安定と河川の堆積が交互に行われていたことが推測できる。包含層以下には砂質土は含まれていなかったが、北壁ではⅨ層上面が砂質土により浸食されており、河川の氾濫があったことが推測できる。東・南壁では包含層直上ではなく、砂質土との間に粘土層を挟んでいる。

基盤となるⅫ層は灰白色またはやや黄色味を帯びる灰白色粘土で、表土や包含層との土色の差が明瞭である。灰白色粘土は海成粘土だと考えられ、その生成要因は遺跡周辺が入江になっていたことと関係している。



第10図　基本土層図

第３節　遺構と遺物

(1)　第１遺構面の遺構と遺物

第１遺構面の遺構（第11～15図、写真図版４－１）

掘立柱建物跡１棟、土坑１基、溝状遺構３条、土器集中１カ所を検出した。第１遺構面直上に堆積していた包含層（Ⅷ層）からは、古墳時代土師器・須恵器と山茶碗が混在して出土している。第１遺構面の下限は、山茶碗小皿から13世紀後半頃に求められる。以下、各遺構の詳細を記述していく。

なお時期比定は、古墳時代の土師器を松井一明氏の遠江地域須恵器・土師器編年（松井 1992）に、古墳時代の須恵器、古代の須恵器・土師器を鈴木敏則氏の土師器・須恵器編年（鈴木 1998・2004）に基づいている。また、丸杉俊一郎氏の井通遺跡の編年（丸杉 2007）も参考にした。

灰釉陶器・山茶碗は基本的に松井氏の灰釉陶器・山茶碗編年（松井 1989）に準拠するが、産地の同定ができた場合には各窯跡群での編年を使用した（中野 1994、藤沢 2008）。

１号掘立柱建物跡〔SB1〕（第12図、写真図版４－２）

Ｅ－２グリッドに位置し、調査区西縁と接している。柱筋が整わず、遺構全体を把握できないため判然としないが、掘立柱建物跡であると判断した。SP1とSP2の中心線の方向はＮ－29°－Ｗである。柱間寸法は南北に1.88m、東西に1.42mを測る。柱穴は直径0.2～0.28mで、円形を呈す。深さは最深部で0.38mである。

SP1覆土中層から正置の状態で山茶碗１点、下層から山茶碗１点が出土した。山茶碗Ⅲ期－１に比定でき、12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。当該期まで機能していたと考えられる。

第11図　第１遺構面調査区全体図

１号土坑〔SK1〕(第12図、写真図版４－３・４)

Ｅ－２グリッドに位置し、調査区西縁と接している。最大幅は1.24mを測り、不整円形を呈す。最深部までの深さは0.90mである。覆土には、地山となる黄灰白色粘土を含み、また上層には微量の炭化物を含んでいた。覆土下層から正置の状態で山茶碗４点が出土した。覆土は自然堆積であり、山茶碗を埋置した後に自然に埋没したものと考えられ、遺構廃棄時の何らかの儀礼を表わしている可能性が高い。山茶碗Ⅲ期－１に比定でき、12世紀末～13世紀前半に位置付けられる。

１号溝状遺構〔SD1〕(第13図、写真図版５－１・２)

Ｃ～Ｅ－２グリッドに位置し、調査区西縁と接する。全長16.90m、最大幅2.78m、最深部までの深さは0.10mを測る。掘削深度は非常に浅く、窪地に近い。覆土は単一土層である。覆土下位から山茶碗が、他に礫や樹皮が出土した。12世紀後半代に位置付けられよう。

２号溝状遺構〔SD2〕(第12図、写真図版４－５)

Ｅ・Ｆ－２グリッドに位置する。全長5.66m、最大幅0.70m、最深部までの深さは0.08mを測る。出土遺物は土器細片のみで図化できなかったが、周辺の遺構と同時期の12～13世紀の遺構と考えられる。

３号溝状遺構〔SD3〕(第14図、写真図版５－３、６－１・２、15－４)

Ｆ・Ｇ－１グリッドに位置し、調査区西縁、南縁と接している。全長12.86m、最大幅0.86m、最深部までの深さは0.50mを測る。覆土には、地山である灰白色粘土を含んでいた。

覆土上層から須恵器坏身・甕、土師器甕が出土した。須恵器坏身・土師器甕は北部から散在的に、須恵器甕は中央部からまとまって出土した。須恵器甕は肩部が東側・底部が西側に集中的に出土した。覆土は自然堆積であり、これらの遺物は溝状遺構の埋没時最終段階に破棄したものと考えられる。口縁部はなく、故意に欠いてから破棄した可能性が高い。最も新しい出土土器は、Ⅴ期後葉（新段階）に比定できることから８世紀中頃またはややそれを遡る時期の遺構と考えられよう。なお上層から貝類（ヤマトシジミ）が出土した。

土器集中１（第15図、写真図版６－３）

Ｇ－２グリッドに位置する。明確な掘り込みを伴わないが、土師器台付甕４点、甕胴部片がまとまって出土した。これらの土器類は古墳時代前半期Ⅲ～Ⅳ期－１（以下、古墳時代を省略）に比定できる。しかし、これらの土器は周辺の遺構の時期とは齟齬がある。台付甕は調整痕が磨滅しているものの、形状を留めているものがあり、それほど遠隔地ではない調査区外西方から流入したか、第２遺構面の遺物が何らかの要因で浮き上がったものと推定しておきたい。

第１遺構面の遺物（第16・17図、写真図版11・12)

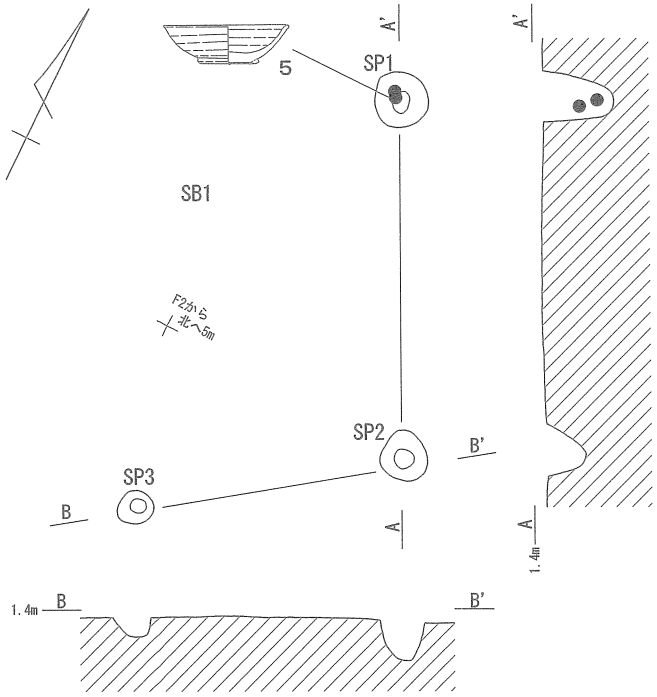
図化した遺物は計24点で、第16・17図に示した。遺構ごとに詳細を記述していく。

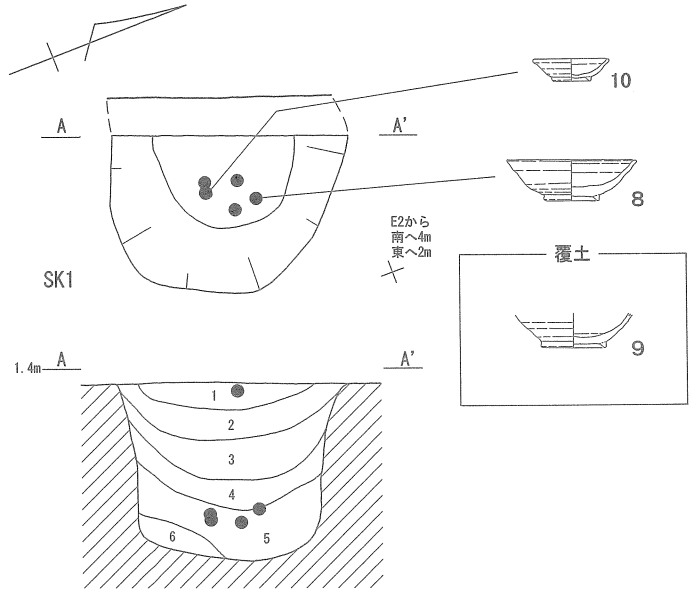
１号掘立柱建物跡出土遺物（第16図５、写真図版11－５）

１号ピットから山茶碗２個体が出土した。５は碗である。高台には籾痕が、底部外面には糸切り痕が認められる。底部内面には使用痕・煤が付着する。山茶碗Ⅲ期－１に比定できよう（松井 1992)。胎土から渥美・湖西型山茶碗と考えられる。

１号土坑出土遺物（第16図８～10、写真図版11－８・10)

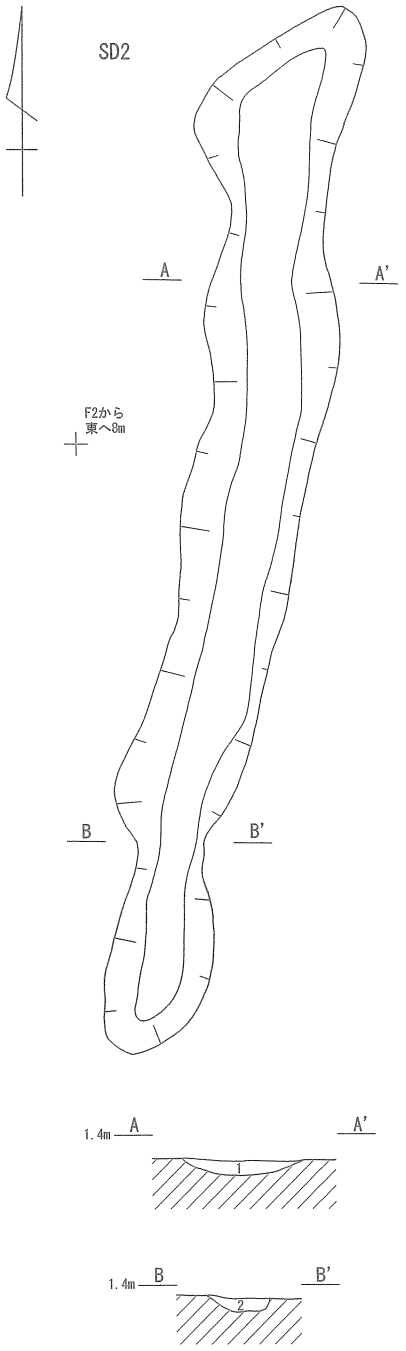
底面付近から山茶碗３個体が、上層から１個体が出土し、その内３点を図示した。いずれも胎土から渥美・湖西型山茶碗であると推定できる。８は碗である。底部内面には、使用痕・煤が認められる。口径がやや大きいが高台の特徴からⅢ期－１に比定でき、12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。９は碗である。底部外面の一部に糸切り痕が残り、底部内面には使用痕が認められる。Ⅲ期－１に位置づけられる。10は小碗である。口唇部は上方へつまみ上げられ玉縁状を呈す。底部外面に糸切り痕が、高台





〔ＳＫ１〕

1	暗灰黄色粘土	2.5Ｙ４／２	褐色粒子を含む。
2	灰色粘土	10Ｙ４／１	炭化物を含む。
3	灰色粘土	7.5Ｙ４／１	地山崩落土・炭化物を含む。
4	灰色粘土	7.5Ｙ４／１	地山崩落土を含む。
5	灰色粘土	10Ｙ４／１	地山崩落土を多量に含む。
6	暗灰粘土	Ｎ３	地山崩落土を含む。

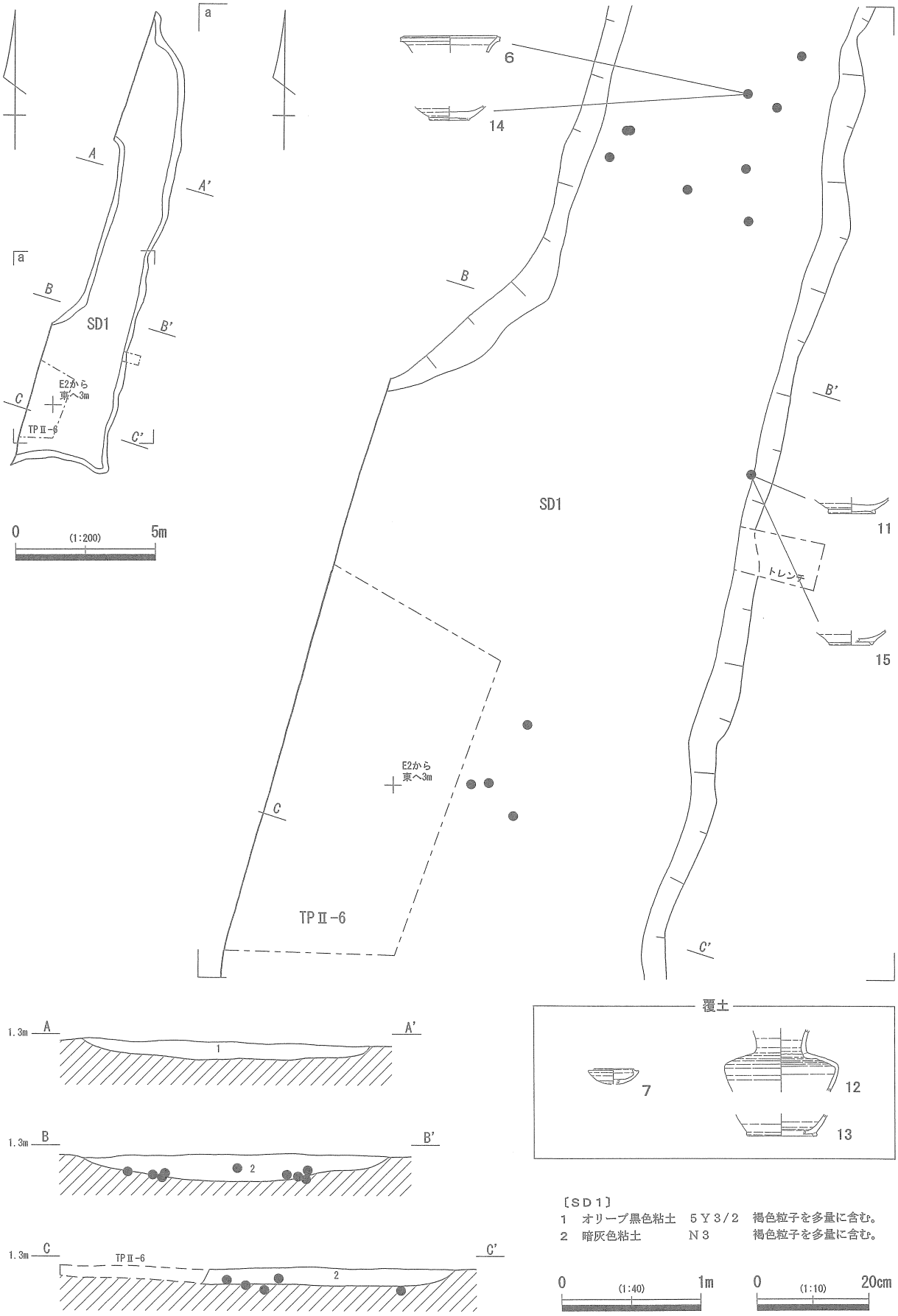


〔ＳＤ２〕

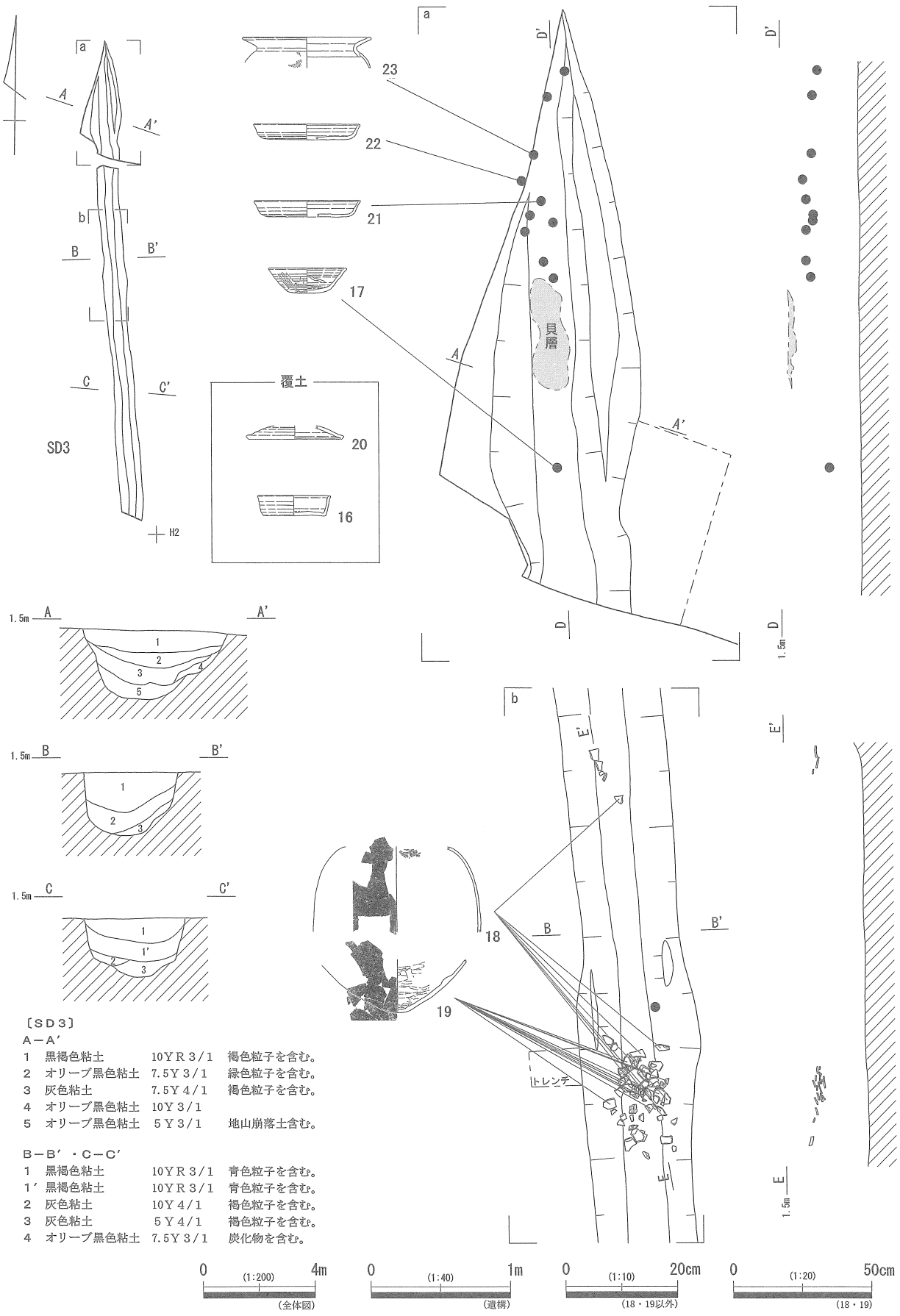
1	灰色粘土	7.5Ｙ４／１	褐色粒子を含む。
2	オリーブ黒色粘土	10Ｙ３／１	炭化物・褐色粒子を含む。

0　(1:40)　1m　　0　(1:10)　20cm

第12図　SB1・SK1・SD2実測図


a
A
A'
B
B'
C
C'
SD1
E2から
東へ3m
TPⅡ-6
0
(1:200)
5m
6
14
11
15
トレンチ
覆土
7
12
13
1.3m
1
2
〔ＳＤ１〕
1　オリーブ黒色粘土　５Ｙ３/２　褐色粒子を多量に含む。
2　暗灰色粘土　Ｎ３　褐色粒子を多量に含む。
0
(1:40)
1m
0
(1:10)
20cm

第13図　SD1実測図



〔ＳＤ３〕

Ａ－Ａ′

1	黒褐色粘土	10ＹＲ３/１	褐色粒子を含む。
2	オリーブ黒色粘土	7.5Ｙ３/１	緑色粒子を含む。
3	灰色粘土	7.5Ｙ４/１	褐色粒子を含む。
4	オリーブ黒色粘土	10Ｙ３/１	
5	オリーブ黒色粘土	５Ｙ３/１	地山崩落土含む。

Ｂ－Ｂ′・Ｃ－Ｃ′

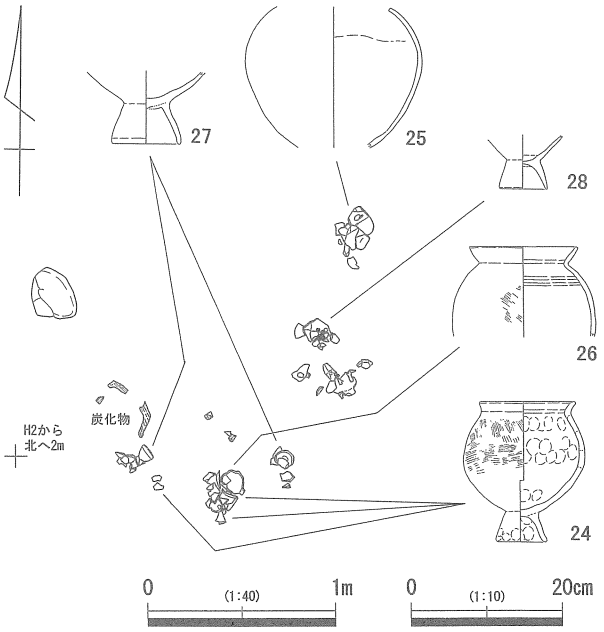
1	黒褐色粘土	10ＹＲ３/１	青色粒子を含む。
1′	黒褐色粘土	10ＹＲ３/１	青色粒子を含む。
2	灰色粘土	10Ｙ４/１	褐色粒子を含む。
3	灰色粘土	５Ｙ４/１	褐色粒子を含む。
4	オリーブ黒色粘土	7.5Ｙ３/１	炭化物を含む。

第14図　SD3実測図

にスノコ状圧痕が残る。器高・高台の特徴から12世紀中葉に位置付けられる。

１号溝状遺構出土遺物（第16図６・７・11～15）

６・７・12・13は須恵器、11・14・15は山茶碗で覆土下層から出土した。６は甕である。口縁部は矩形を呈し、口唇部は上方へ向かって突出する。内外面に自然釉が認められる。７は坏身で、胎土・器形から湖西窯の製品であると考えられる。Ⅳ期前葉に位置付けられる。11は碗である。底部内面に使用痕が、外面に糸切り痕が認められる。胎土からみて東遠型山茶碗であろう。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。12は須恵器長頸壺で、覆土上層・下層や包含層から出土した個体と接合関係にある。胎土から湖西市湖西窯跡群（以下、湖西窯と略称）で生産されたと考えられる。Ⅴ期後葉（古段階）に比定でき（鈴木 1998）、８世紀後半に位置付けられる。13は12と同一個体と考えられるが、直接接合はしない。14は碗である。高台に籾痕が認められる。底部内面・破面に煤が付着する。破砕後、被熱したものと考えられる。胎土からみて東遠型山茶碗である。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。15は底部内面に使用痕が認められる。高台はやや丁寧なつくりだが、わずかに籾痕が認められる。尾張型山茶碗であるが、胎土から常滑古窯群の製品である可能性がある。口縁部が欠損しているため判然としないが、３～４型式であろう。



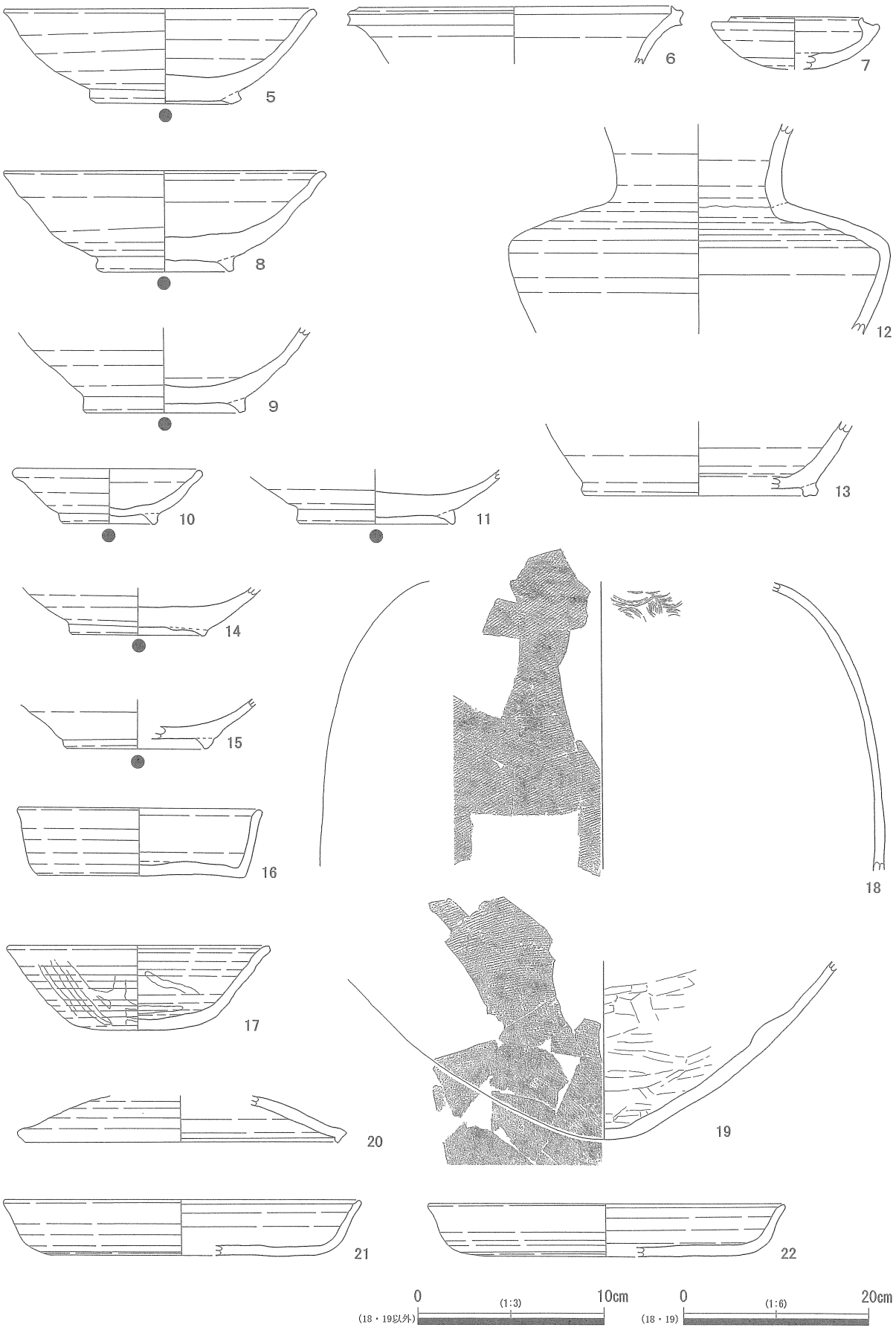
第15図　土器集中１実測図

３号溝状遺構出土遺物（第16図16～22・第17図23、写真図版11－17・21・23）

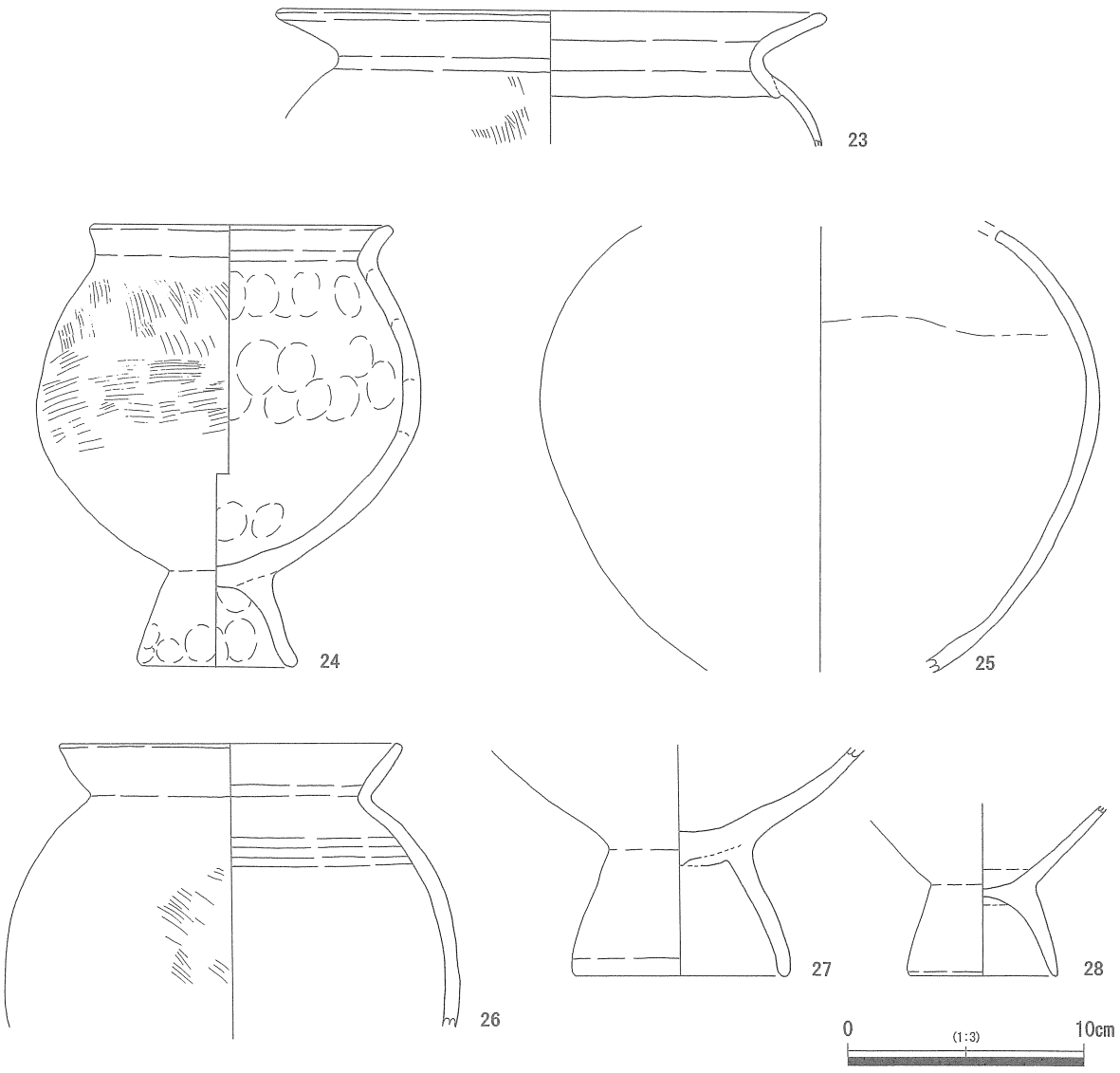
16～22は須恵器、23は土師器で覆土上層から出土した。16は坏身である。いわゆる箱坏であり、底部は上げ底状となる。湖西窯の製品と考えられる。Ⅴ期後葉（新段階）に位置付けられる。17は坏身である。ロクロ目が顕著で、内外面に火襷が認められる。Ⅴ期前葉に位置付けられる。18・19は須恵器甕である。肩部内面に当て具痕がわずかに残るがナデ消される。底部内面にもナデ調整がみられる。18・19は同一個体であると考えられるが、直接接合はしなかった。胎土から湖西窯の製品であると考えられる。20は坏蓋である。内外面に重ね焼痕が認められる。Ⅴ期前葉（古段階）に比定できる。21・22は皿である。底部外縁にヘラ削りが施され、口唇部に浅い沈線が残る。Ⅴ期前葉（新段階）に位置付けられる。23は長胴甕である。肩部内面に粘土帯を貼り付けて、口縁部を接合している。Ⅳ期後葉に位置付けられよう。

土器集中１出土遺物（第17図24～28、写真図版12－24・26・27）

24～28は土師器台付甕で、25は上・下位を欠損しているが丸底甕ないし台付甕であろう。いずれも基本土層Ⅹ層上面から出土した。台付甕は小型（24・28）と大型（25～27）の一群がある。27の接合方法が特徴的で、台部と甕底部の間に粘土を充填し、その周囲に粘土を貼り付けて接合している。古墳時代前半期Ⅲ～Ⅳ－１期（松井 1995）に比定でき、５世紀後半頃に位置づけられるであろう。



第16図　SP1・SD1・3・SK1出土遺物実測図



第17図　SD3・土器集中１出土遺物実測図

⑵　第２遺構面の遺構と遺物

第２遺構面の遺構（第18～26図、写真図版７－１）

掘立柱建物跡３棟、柱穴・小穴38基、土坑７基、溝状遺構18条、性格不明遺構３基を検出した。第２遺構面直上に堆積していた包含層（基本土層Ｘ層）では古墳時代土師器や須恵器、灰釉陶器、少量の山茶碗が混在し、包含層（基本土層XI層）からは土師器のみが出土した。第２遺構面では遺構に伴う遺物が少なく、直接時期比定を行えなかった。包含層や遺構覆土中にも山茶碗が含まれており、包含層は二次堆積層であると判断できる。

第１遺構面では主に12世紀後半を主体とし８世紀中頃までの遺物が出土した。第１遺構面での遺物出土状況と包含層出土遺物から当該遺構面は４世紀末～７世紀中頃であると推定しておきたい。以下、各遺構の詳細を記述していく。

２号掘立柱建物跡〔SB2〕（第19図、写真図版７－２）

Ｄ－４・５、Ｅ－４・５グリッドに位置し、３号掘立柱建物跡を切っている。桁行4.60m、梁行3.88mを測る３間×２間の東西棟建物跡である。柱穴はすべて不整円形で、直径0.2～0.5mを測る。主軸方向はＮ－85°－Ｅである。柱間寸法は、桁行は1.37～1.73m、梁行は1.70～2.18mで、一定していない。柱穴の深さは最深部で、0.1～0.56mである。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

３号掘立柱建物跡〔SB3〕（第19図、写真図版７－２）

Ｄ－４・５、Ｅ－４・５グリッドに位置する。２号掘立柱建物跡に切られていたが、柱穴５基が残存していた。２号掘立柱建物跡と並行するように位置していたと考えられる。柱穴の深さは最深部で、0.10～0.20mである。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

４号掘立柱建物跡〔SB4〕（第20図、写真図版８－１）

Ｆ－３・４グリッドに位置する。桁行2.92m、梁行2.80mを測る１間×２間の東西棟建物跡である。柱穴はすべて円形で、直径0.22～0.30mを測る。主軸方向は、Ｎ－84°－Ｗである。柱間寸法は桁行2.82～2.92m、梁行1.34～1.48mで、ほぼ等間隔に柱穴が並んでいる。柱穴の深さは最深部で、0.18～0.4mである。柱穴の多くが、上部がすり鉢状で、下部は円柱状に延びており、柱材を据え付けていたと考えられる。また17号溝状遺構を切っていた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

２号土坑〔SK2〕

Ｄ－２グリッドに位置する。長軸1.10m、短軸0.56mを測り、楕円形を呈する。最深部までの深さは0.08mである。遺構覆土は単一土層であり、自然堆積したと考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

３号土坑〔SK3〕（第21図）

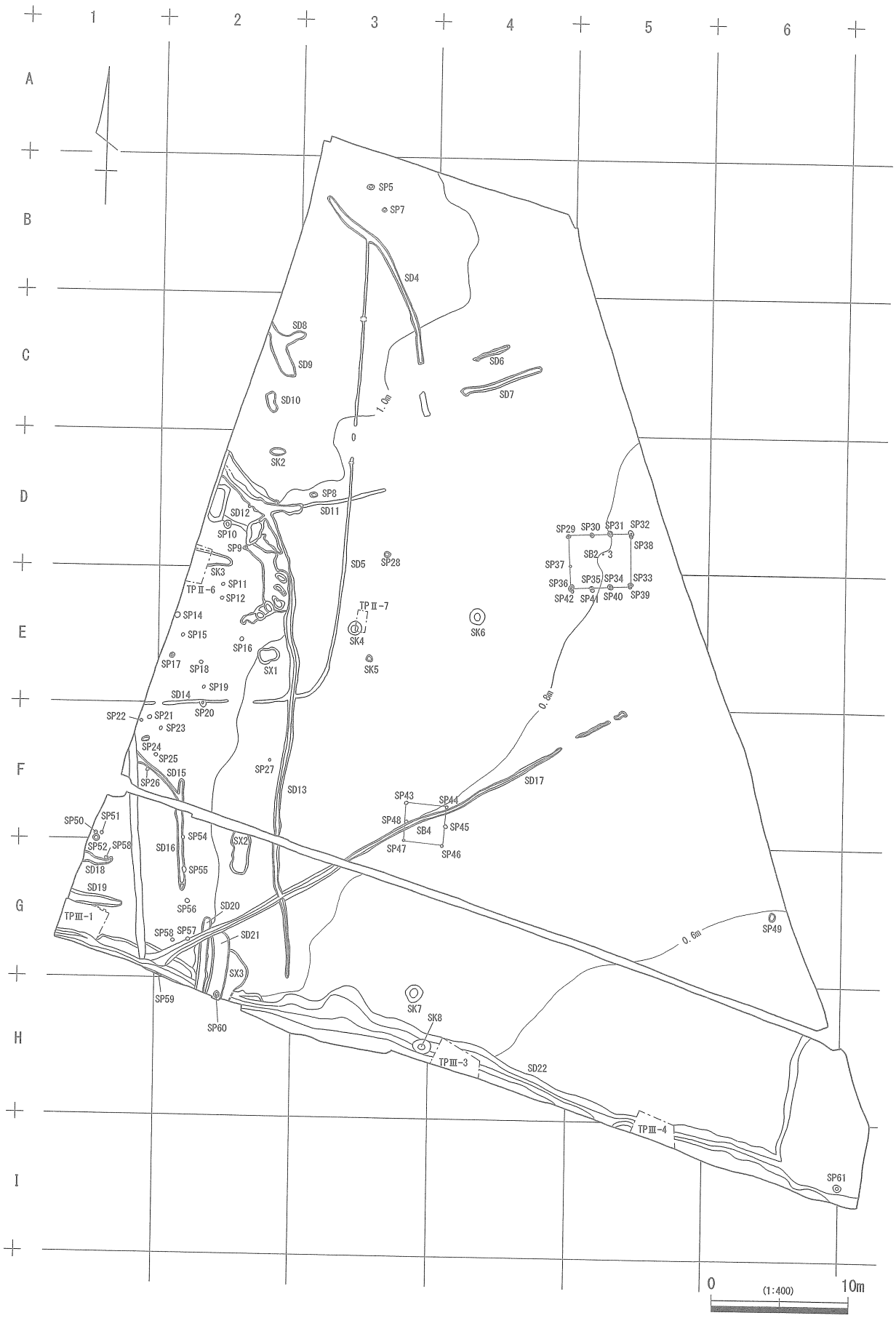
Ｄ－２グリッドに位置し、調査区西縁と接する。また試掘坑（１区TPⅡ－６）に西半部を切られている。長軸3.00m、短軸0.90mを測り、楕円形を呈する。最深部までの深さは、0.08mである。出土遺物は土器細片のみのため、帰属時期は不明である。なお、TPⅡ－６からは５世紀後半の土師器高坏が出土している。

４号土坑〔SK4〕（第21図、写真図版９－１）

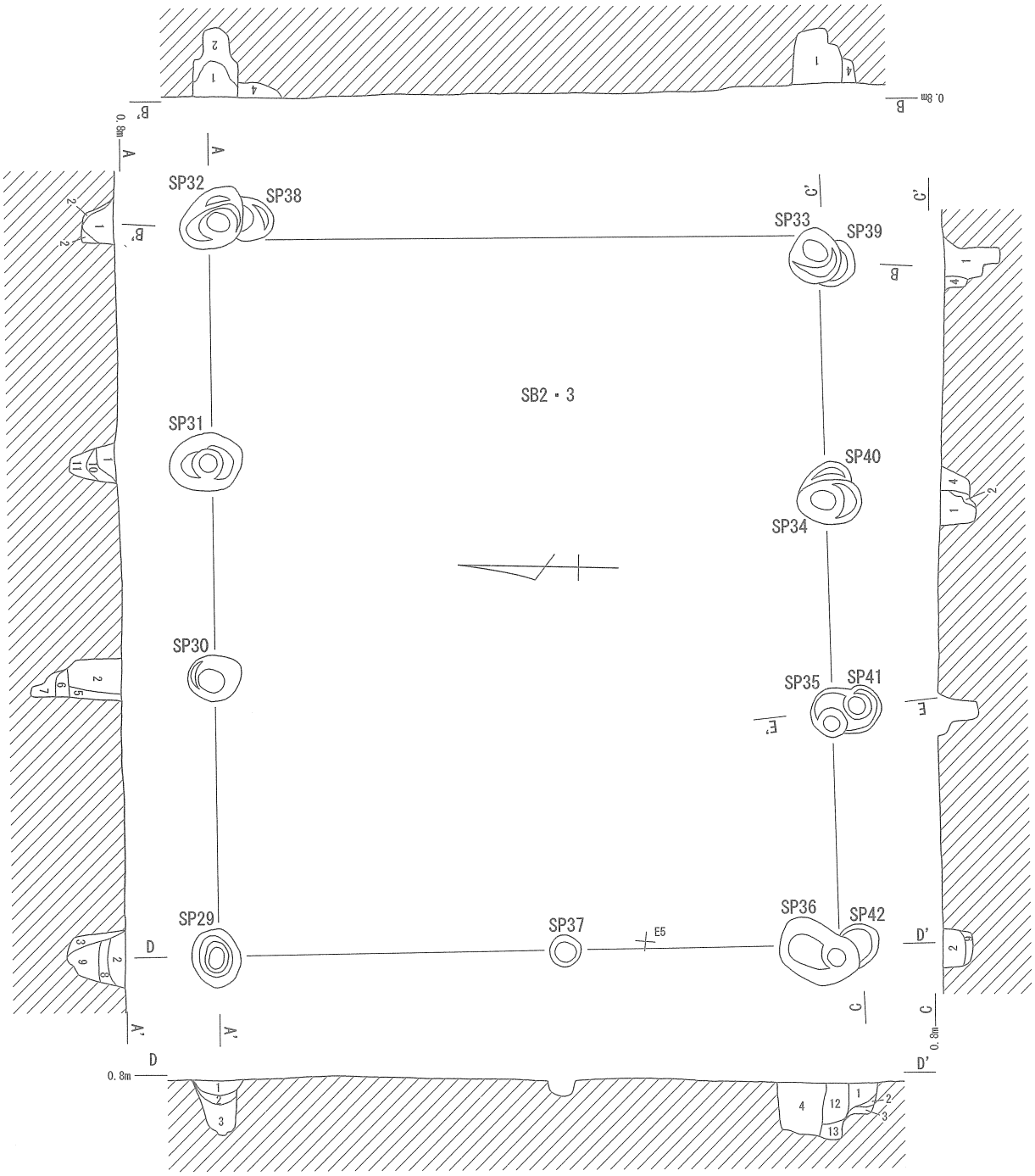
Ｅ－３グリッドに位置する。最大長0.98mを測り、円形を呈する。最深部までの深さは、0.88mである。遺構覆土は自然堆積で、下層には砂質土を含んでいた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

５号土坑〔SK5〕（写真図版９－２）

Ｅ－３グリッドに位置する。長軸0.54m、短軸0.46mを測り、不整円形を呈する。最深部までの深さは0.20mである。遺構覆土は自然堆積で、下層には地山崩落土を含んでいた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

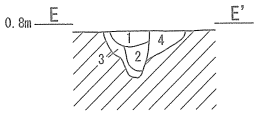


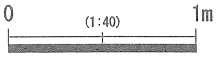
第18図　第２遺構面調査区全体図



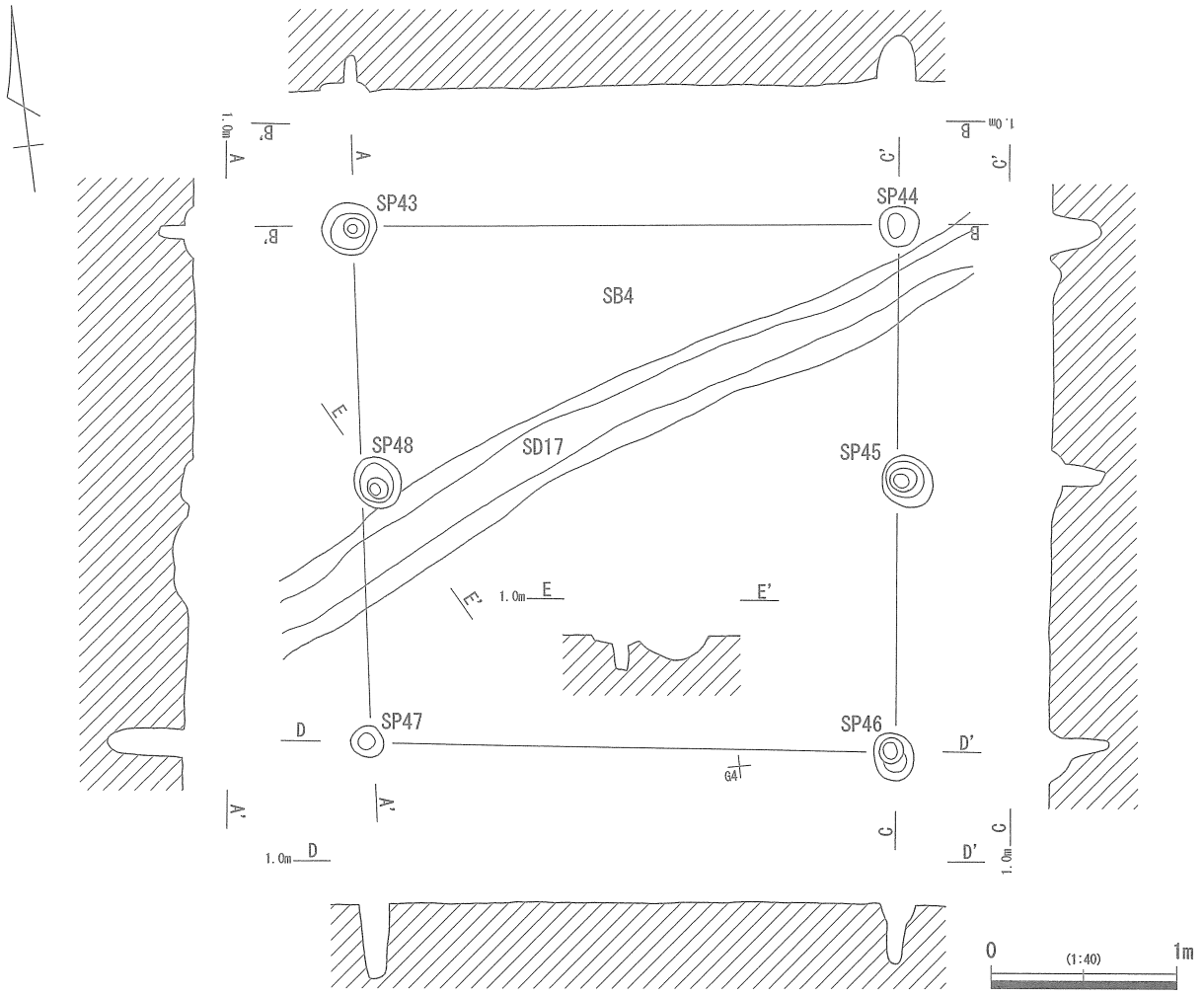
〔ＳＢ２・３〕

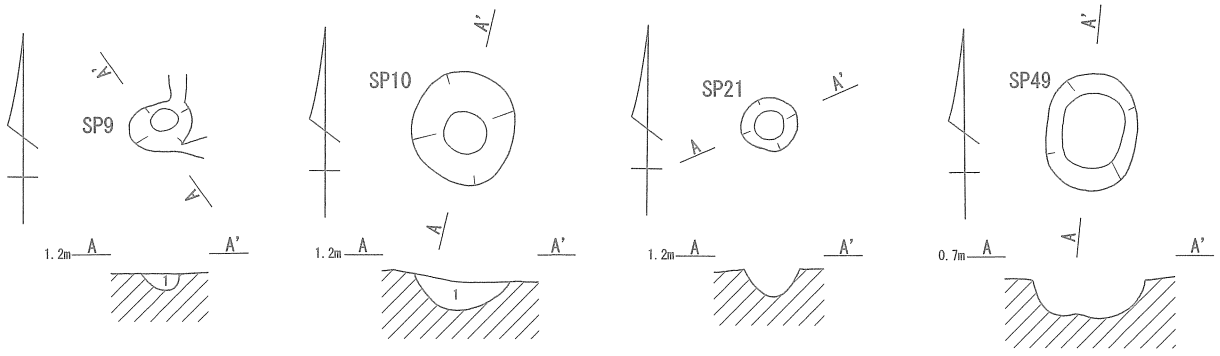
1	オリーブ黒色粘土	５Ｙ３/１	白色ブロックを含む。
2	灰色粘土	５Ｙ４/１	白色ブロックを少量含む。
3	灰色粘土	10Ｙ５/１	白色ブロックを多量に含む。
4	灰色粘土	５Ｙ４/１	白色ブロックを含む。
5	灰色粘土	10Ｙ４/１	白色ブロックを少量含む。
6	灰色粘土	10Ｙ５/１	白色ブロックを含む。
7	灰色粘土	５Ｙ４/１	白色ブロックを含む。
8	灰色粘土	10Ｙ４/１	白色・黒色ブロックを含む。
9	灰色粘土	５Ｙ４/１	白色ブロックを含む。
10	灰色粘土	10Ｙ４/１	白色ブロックを少量含む。
11	暗緑灰色粘土	10ＧＹ３/１	白色ブロックを多量に含む。
12	黄灰色粘土	2.5Ｙ４/１	白色ブロックを少量含む。
13	オリーブ黒色粘土	7.5Ｙ３/１	

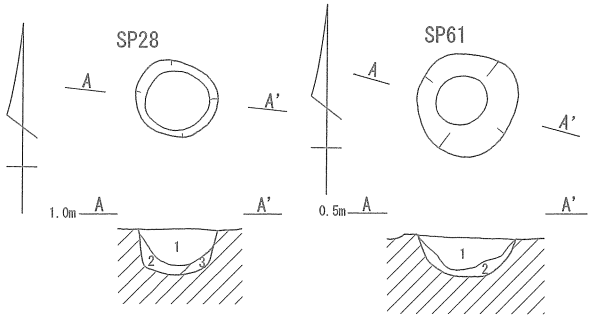




第19図　SB2・３実測図







〔ＳＰ９〕
1　灰色粘土　10ＹＲ４/１　褐色粒子を含む。

〔ＳＰ10〕
1　褐灰色粘土　10ＹＲ４/１　褐色粒子を含む。

〔ＳＰ28〕
1　オリーブ黒色粘土　7.5Ｙ３/１　褐色粒子を含む。
2　灰色粘土　7.5Ｙ４/１　白色粒子を含む。
3　灰色粘土　7.5Ｙ４/１　白色粒子を多量に含む。

〔ＳＰ61〕
1　黒色粘土　7.5Ｙ２/１
2　オリーブ黒色粘土　５Ｙ３/１　白色ブロックを多量に含む。

第20図　SB4・ピット実測図

６号土坑〔SK6〕(第21図、写真図版９－３～５)

Ｅ－４グリッドに位置する。最大長1.20mを測り、円形を呈する。最深部の深さは0.7mである。遺構覆土は自然堆積で、下層には砂質土を含んでいた。また、底面付近を覆うように炭化物が残存していた。炭化物はアシ類で、火を伴う何らかの行為が行われたと考えられるが、遺構底面や覆土には被熱の痕跡はみられなかった。覆土上層から古墳時代中期末から後期前葉に位置付けられる土師器台付甕１点が出土した。遺構に伴わないため帰属時期は不明である。

７号土坑〔SK7〕(第21図、写真図版９－６)

Ｈ－３グリッドに位置する。最大長1.22mを測り、円形を呈する。最深部までの深さは0.81mである。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

８号土坑〔SK8〕(第21図、写真図版９－７)

Ｈ－３グリッドに位置する。最大長0.98mを測り、円形を呈する。最深部までの深さは0.76mである。22号溝状遺構を切っている。覆土中層から土師器坏１点が出土した。古墳時代後期に位置づけられる可能性があるが、遺構に伴わないため帰属時期は不明である。

４号溝状遺構〔SD4〕

Ｂ・Ｃ－３グリッドに位置する。全長17.90m、最大幅0.60m、最深部までの深さは0.06mを測る。覆土は自然堆積で、地山である黄灰白色粘土を含んでいた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

５号溝状遺構〔SD5〕

Ｂ～Ｅ－３、Ｅ－２グリッドに位置する。全長34.3m、最大幅0.20m、最深部までの深さは0.11mを測る。４号溝状遺構と覆土が同一であったことから、同時期の遺構と考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

６号溝状遺構〔SD6〕

Ｃ－４グリッドに位置する。全長2.90m、最大幅0.44m、最深部までの深さは0.11mを測る。７号溝状遺構と平行して位置することから、同時期の遺構と考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

７号溝状遺構〔SD7〕

Ｃ－４グリッドに位置する。全長6.20m、最大幅0.46m、最深部までの深さは0.06mを測る。６号溝状遺構と平行して位置する。出土遺物は土器細片のみで、帰属時期は不明である。

８号溝状遺構〔SD8〕

Ｃ－２・３グリッドに位置する。全長1.70m、最大幅0.62m、最深部までの深さは0.04mを測る。９号溝状遺構と切り合い関係にあるが、遺構覆土は同一であり同時期の遺構と考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

９号溝状遺構〔SD9〕

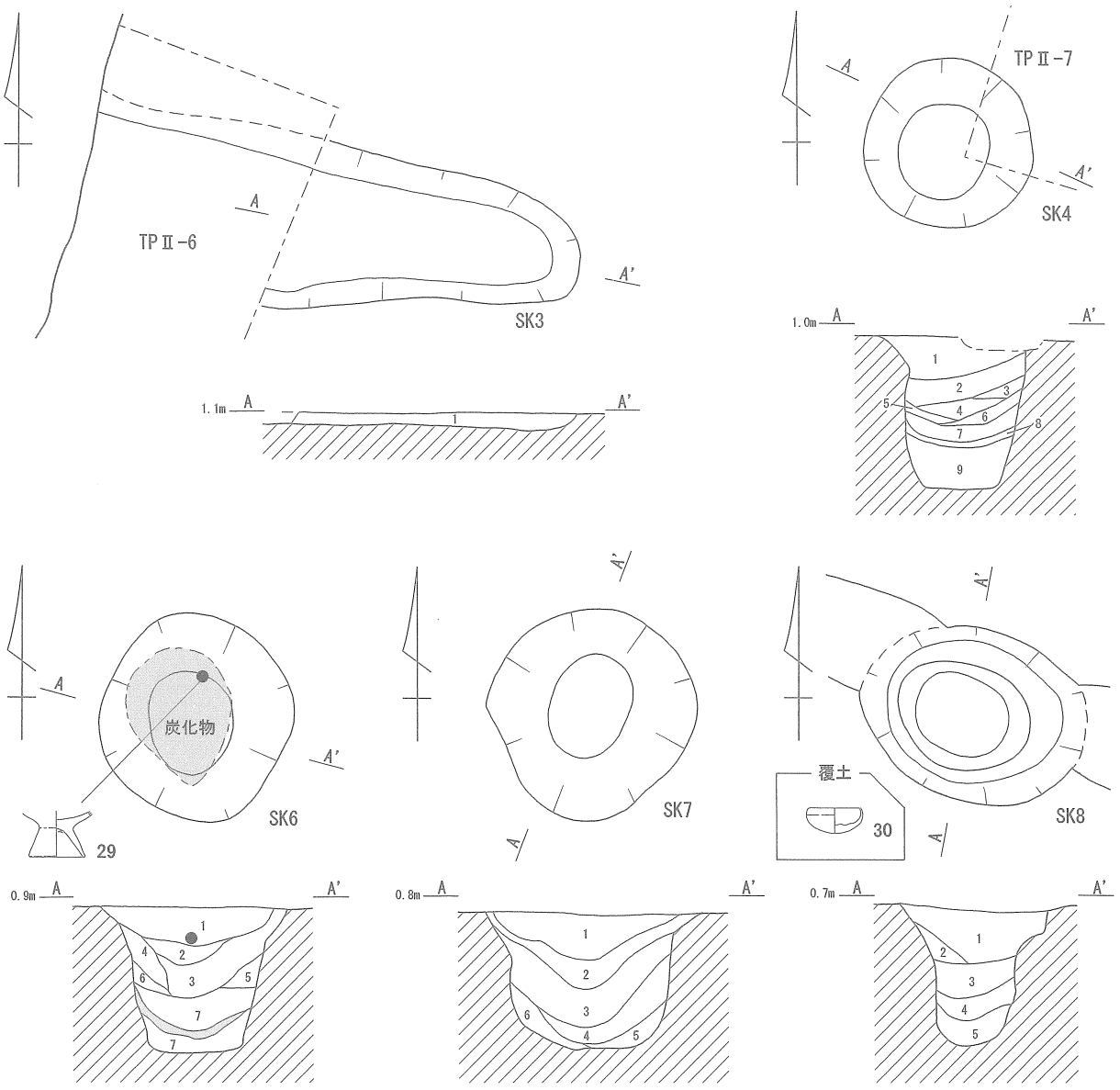
Ｃ－２グリッドに位置する。全長4.40m、最大幅1.06m、最深部までの深さは0.06mを測る。８号溝状遺構と遺構覆土は同一である。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

10号溝状遺構〔SD10〕

Ｃ－２グリッドに位置する。全長1.48m、最大幅0.72m、最深部までの深さは0.05mを測る。８・９号溝状遺構と遺構覆土は同一である。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

11号溝状遺構〔SD11〕

Ｄ－２・３グリッドに位置する。全長8.45m、最大幅0.28m、最深部までの深さは0.06mを測る。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。



〔ＳＫ３〕
1　灰色粘土　7.5Ｙ４/１　褐色粒子を含む。

〔ＳＫ４〕
1　灰色粘土　7.5Ｙ４/１　褐色粒子を含む。
2　灰色粘土　7.5Ｙ４/１　褐色粒子を多量に含む。
3　灰色粘土　10Ｙ５/１　白色ブロックを含む。
4　灰色粘土　10Ｙ４/１　白色ブロックを含む。
5　灰色粘土　7.5Ｙ５/１　橙色粒子を含む。
6　灰色粘土　10Ｙ４/１　白色粒子を多量に含む。
7　灰色粘土　10Ｙ４/１　黒色ブロックを含む。
8　灰色粘土　7.5Ｙ４/１　細砂を含む。
9　灰色粘土　7.5Ｙ４/１　細砂・黄色粒子を含む。

〔ＳＫ６〕
1　オリーブ黒色粘土　7.5Ｙ３/１　褐色粒子を含む。
2　黒色粘土　7.5Ｙ２/１　白色ブロックを含む。
3　灰色粘土　５Ｙ４/１　白色ブロックを含む。
4　暗黄灰色粘土　2.5Ｙ４/１　白色ブロックを含む。
5　灰オリーブ色粘土　５Ｙ４/２　白色ブロックを含む。
6　黄灰色粘土　2.5Ｙ４/１　白色ブロックを多量に含む。
7　褐灰色粘土　10ＹＲ４/１　白色粘土、炭化物を多量に含む。

〔ＳＫ７〕
1　黒色粘土　7.5Ｙ２/１　白色ブロックを含む。
2　オリーブ黒色粘土　7.5Ｙ３/１　白色ブロックを含む。
3　灰色粘土　7.5Ｙ４/１　白色・黒色ブロックを含む。
4　灰色粘土　7.5Ｙ４/１　白色ブロックを多量に含む。
5　灰色粘土　10Ｙ４/１　白色ブロックを多量に含む。
6　灰色粘土　５Ｙ４/１　白色ブロックを多量に含む。

〔ＳＫ８〕
1　オリーブ黒色粘土　５Ｙ３/１　白色ブロックを含む。
2　オリーブ黒色粘土　５Ｙ３/１　白色ブロックを多量に含む。
3　灰色粘土　５Ｙ４/１　白色ブロックを含む。
4　灰色粘土　５Ｙ５/１　白色ブロックを含む。
5　オリーブ黒色粘土　10Ｙ３/１　白色ブロックを多量に含む。

0　(1:40)　1m　　0　(1:10)　20cm

第21図　SK3・４・６～８実測図

12号溝状遺構〔SD12〕(第22図、写真図版10－１・２)

Ｄ・Ｅ－２グリッドに位置する。全長13.30m、最大幅5.08m、最深部までの深さは0.16mを測る。13号溝状遺構に切られているが、13号溝状遺構は12号溝状遺構側壁に沿うように掘削されている。覆土は攪拌され、暗灰色粘土と青灰色粘土が混在していた。覆土下層から灰釉陶器が出土したが、自然堆積ではなく、正確な時期は不明である。

13号溝状遺構〔SD13〕(第23図)

Ｄ～Ｇ－２グリッドに位置する。全長38.30m、最大幅0.28m、最深部までの深さは0.08mを測る。12・17号溝状遺構を切っていた。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

14号溝状遺構〔SD14〕

Ｅ－２グリッドに位置する。全長10.60m、最大幅0.20m、最深部までの深さは0.07mを測る。13号溝状遺構と覆土が同一であり、同時期の遺構と考えられる。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

15号溝状遺構〔SD15〕

Ｆ－１・２グリッドに位置する。全長4.45m、最大幅0.34m、最深部までの深さは0.05mを測る。16号溝状遺構と覆土が同一であり、同時期の遺構と考えられる。出土遺物は土器細片のみで、帰属時期は不明である。

16号溝状遺構〔SD16〕(第25図)

Ｆ・Ｇ－２グリッドに位置する。全長8.15m、最大幅0.57m、最深部までの深さは0.05mを測る。SP54・55と切り合い関係にあるが、覆土は同一で、溝をやや掘り下げた段階でピットの覆土が確認できたため同時期の遺構と考えられる。このような遺構は北ハサマ遺跡Ⅱでも確認されている。ピット（SP54・55・56・57）は柱筋が通り、柵列である可能性もあるが、明確な柱痕は確認できなかった。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

17号溝状遺構〔SD17〕(第23図)

Ｇ－２・３、Ｆ－３・４・５グリッドに位置する。全長37.48m、最大幅0.80m、最深部までの深さは0.06mを測る。４号掘立柱建物跡に切られている。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

18号溝状遺構〔SD18〕

Ｇ－１グリッドに位置する。全長2.15m、最大幅0.8m、最深部までの深さは0.06mを測る。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

19号溝状遺構〔SD19〕(第25図)

Ｇ－１グリッドに位置する。全長3.88m、最大幅0.8m、最深部までの深さは0.12mを測る。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

20号溝状遺構〔SD20〕(第25図、写真図版10－３)

Ｇ－２グリッドに位置する。全長4.61m、最大幅0.68m、最深部までの深さは0.11mを測る。土師器壺が出土したが、底部片のみであったため帰属時期は不明である。

21号溝状遺構〔SD21〕(第25図、写真図版10－３)

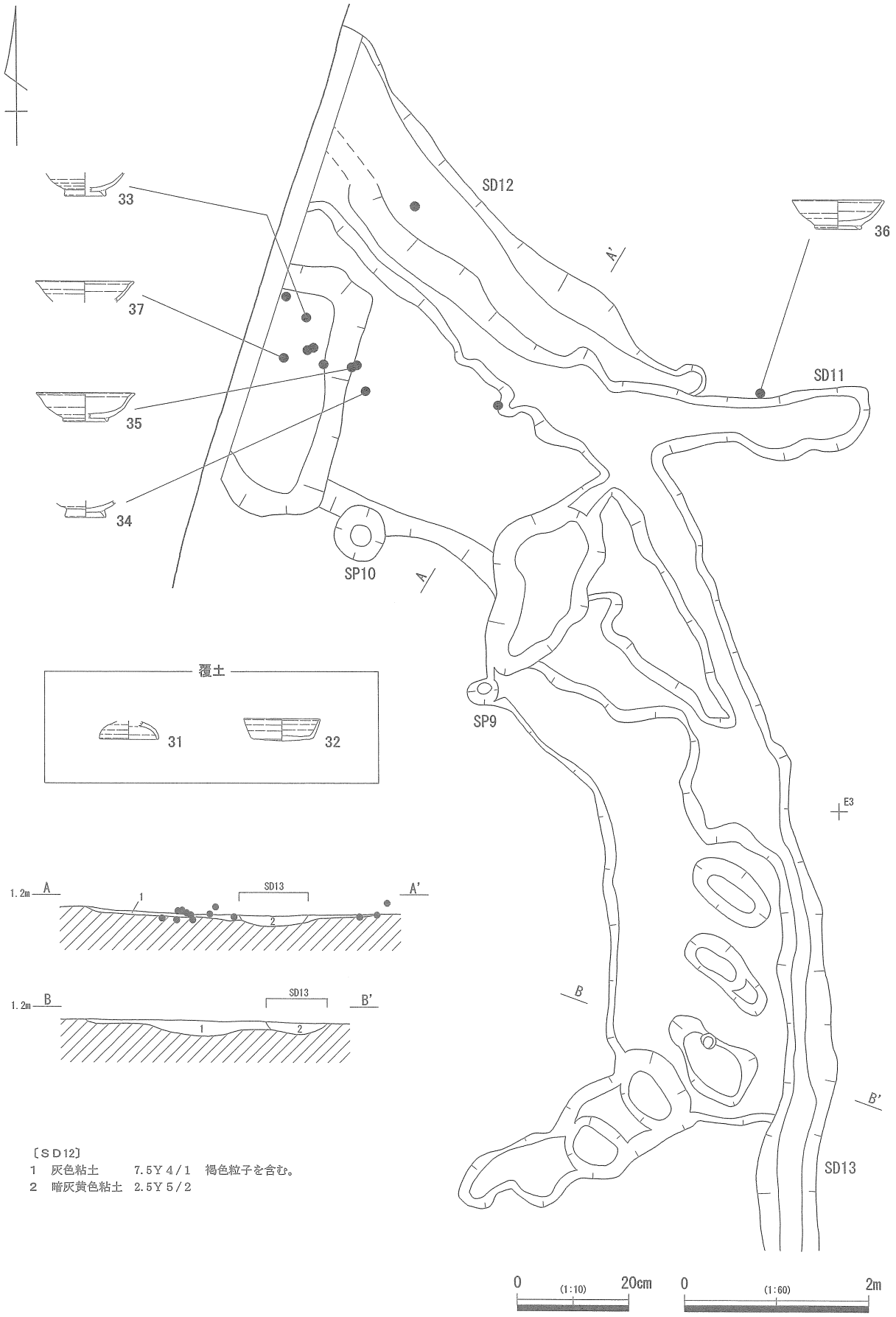
Ｇ・Ｈ－２グリッドに位置する。全長4.15m、最大幅1.16m、最深部までの深さは0.11mを測る。出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

22号溝状遺構〔SD22〕(第26図、写真図版10－４)

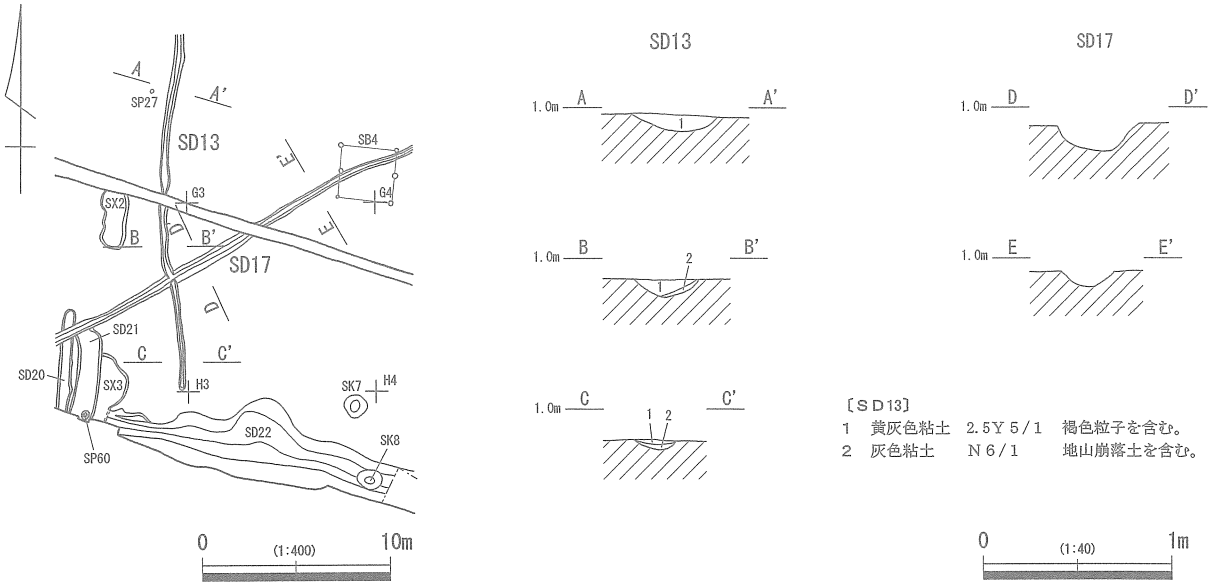
Ｇ－１・２、Ｈ－２～５、Ｉ－５・６グリッドに位置する。全長59.20m、最大幅2.84mを測る。覆土上層から土師器高坏が、下層からは山茶碗小片が出土した。

１号性格不明遺構〔SX1〕(第26図、写真図版10－５)

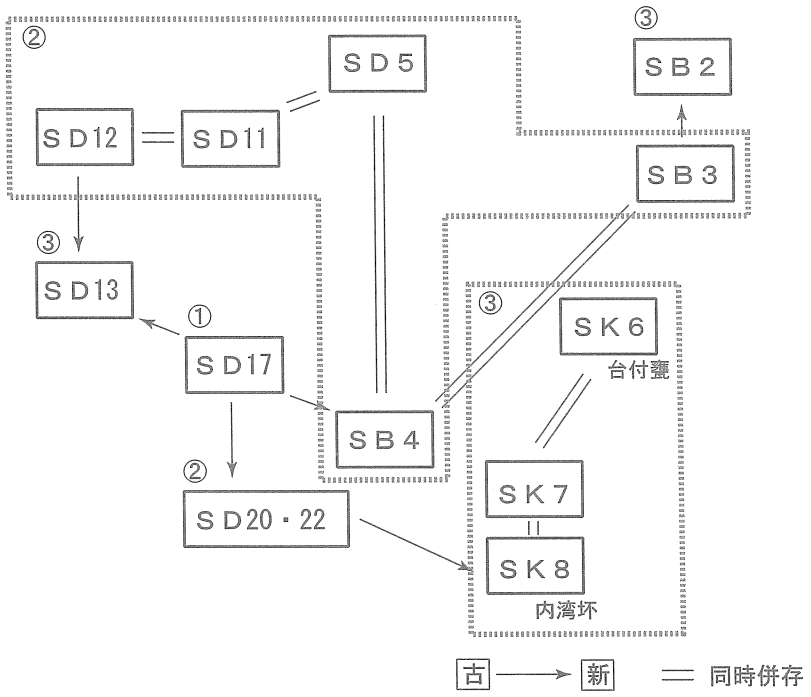
Ｅ－２グリッドに位置する。不定形で非常に浅く、窪地状である。底面から土師器甕が出土した。前



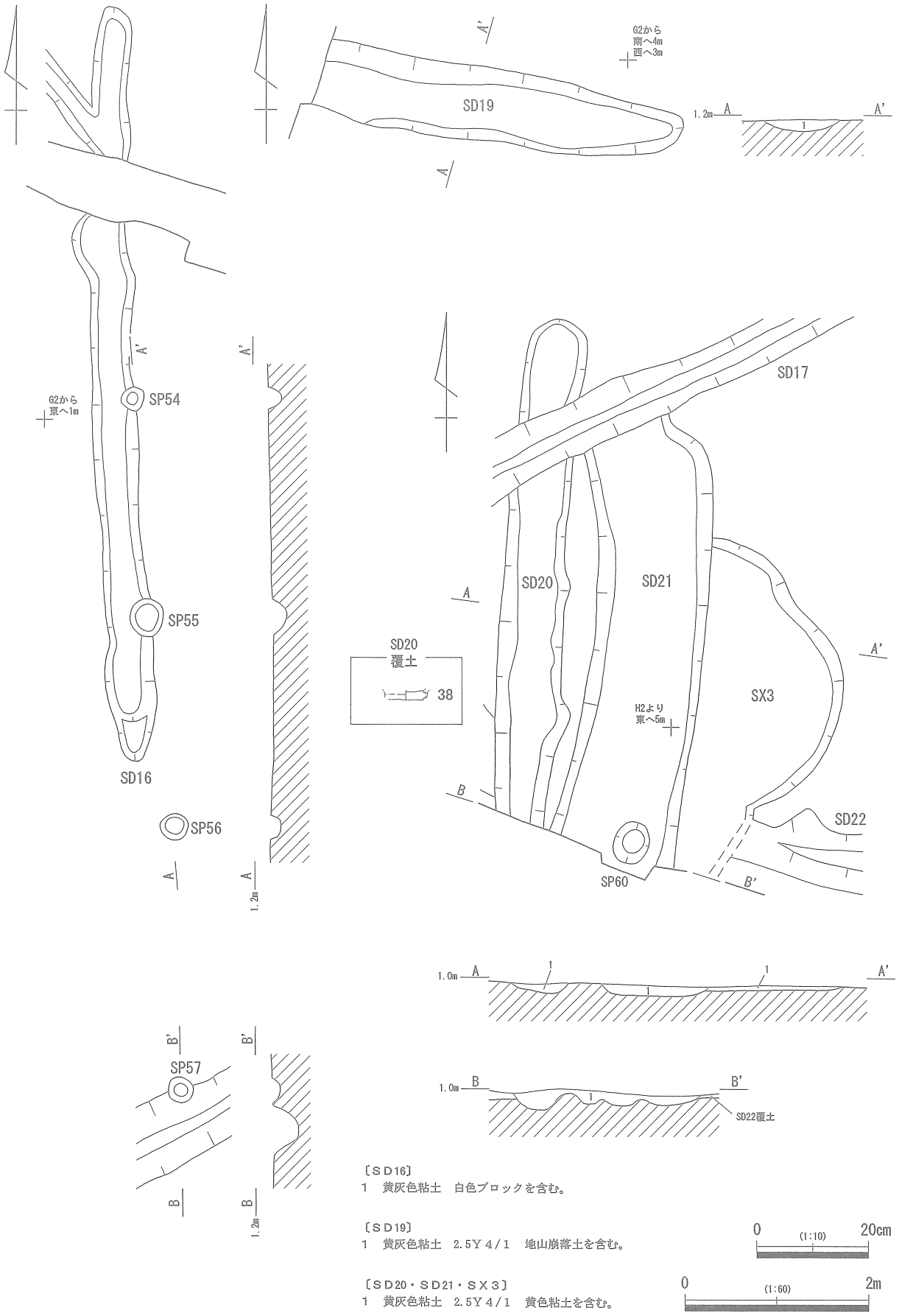
第22図　SD12実測図



第23図　SD13・17実測図



第24図　第２遺構面検出遺構の切り合い関係



〔ＳＤ16〕
1　黄灰色粘土　白色ブロックを含む。

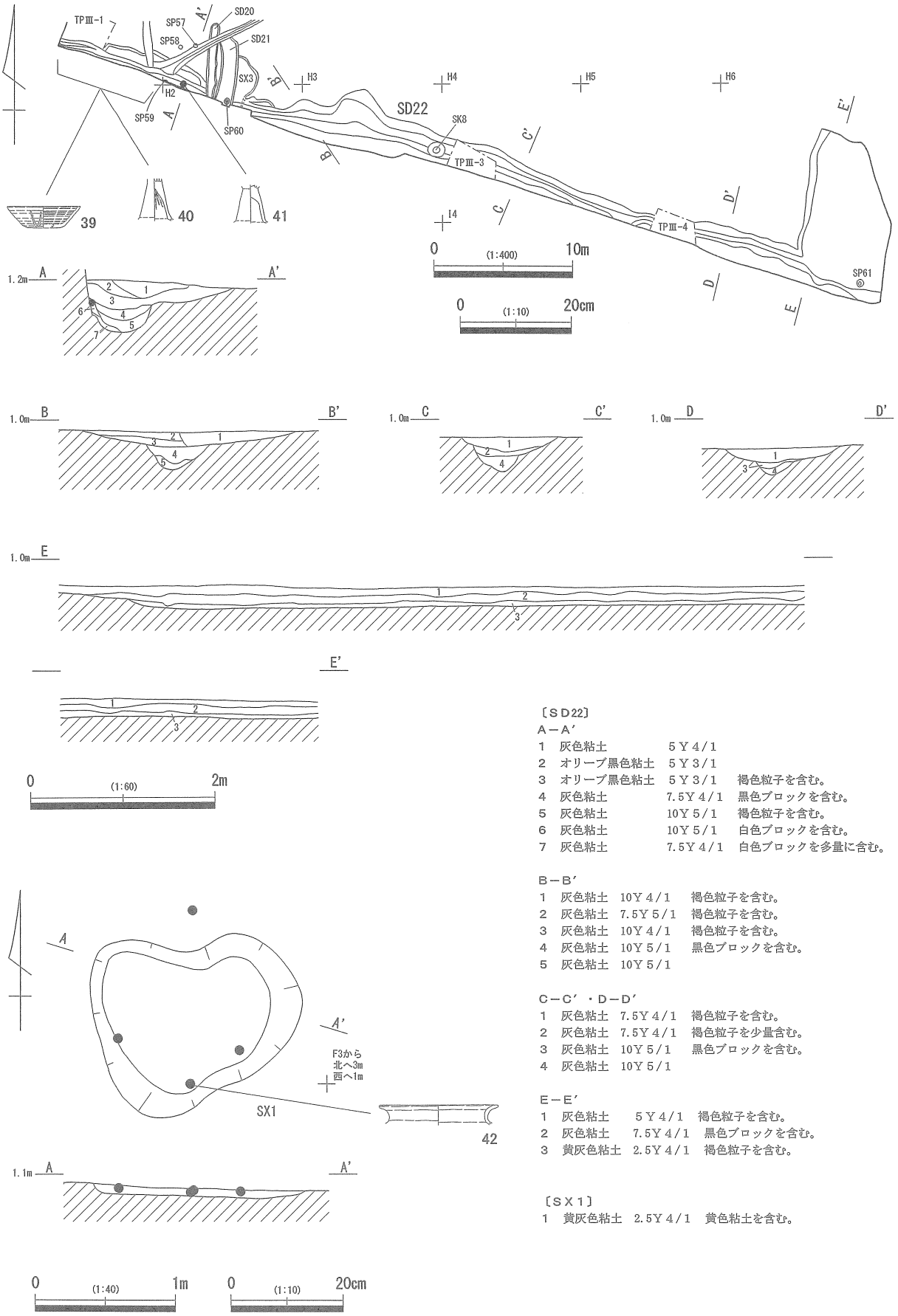
〔ＳＤ19〕
1　黄灰色粘土　2.5Ｙ４/１　地山崩落土を含む。

〔ＳＤ20・ＳＤ21・ＳＸ３〕
1　黄灰色粘土　2.5Ｙ４/１　黄色粘土を含む。

0　(1:10)　20cm

0　(1:60)　2m

第25図　SD16・19・20・21・SX3実測図



〔ＳＤ22〕

Ａ－Ａ′

1	灰色粘土	５Ｙ４/１	
2	オリーブ黒色粘土	５Ｙ３/１	
3	オリーブ黒色粘土	５Ｙ３/１	褐色粒子を含む。
4	灰色粘土	7.5Ｙ４/１	黒色ブロックを含む。
5	灰色粘土	10Ｙ５/１	褐色粒子を含む。
6	灰色粘土	10Ｙ５/１	白色ブロックを含む。
7	灰色粘土	7.5Ｙ４/１	白色ブロックを多量に含む。

Ｂ－Ｂ′

1	灰色粘土	10Ｙ４/１	褐色粒子を含む。
2	灰色粘土	7.5Ｙ５/１	褐色粒子を含む。
3	灰色粘土	10Ｙ４/１	褐色粒子を含む。
4	灰色粘土	10Ｙ５/１	黒色ブロックを含む。
5	灰色粘土	10Ｙ５/１	

Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′

1	灰色粘土	7.5Ｙ４/１	褐色粒子を含む。
2	灰色粘土	7.5Ｙ４/１	褐色粒子を少量含む。
3	灰色粘土	10Ｙ５/１	黒色ブロックを含む。
4	灰色粘土	10Ｙ５/１	

Ｅ－Ｅ′

1	灰色粘土	５Ｙ４/１	褐色粒子を含む。
2	灰色粘土	7.5Ｙ４/１	黒色ブロックを含む。
3	黄灰色粘土	2.5Ｙ４/１	褐色粒子を含む。

〔ＳＸ１〕

1	黄灰色粘土	2.5Ｙ４/１	黄色粘土を含む。

第26図　SD22・SX1実測図

半期Ⅱ期－４～Ⅲ期－１に比定でき、７世紀前半～中頃に位置付けられる。

小結（第24図）　多くの遺構で遺物が伴わず、その帰属時期が確定できなかったため、遺構間の関係や遺構覆土の状況から帰属時期を推定しておきたい。第１遺構面の遺物出土状況と包含層出土遺物から考えると、第２遺構面は４世紀末～８世紀前半の遺構面であると考えられる。ただ、包含層出土土器の中には、７世紀後半～８世紀前半の資料は含まれていないため、空白期間となる可能性が高く、当該面は４世紀末から７世紀中頃に絞られる可能性が高い。以下、遺構間の関係を示す。

まず、４号掘立柱建物跡は５号溝状遺構とほぼ直行することから、同時期に機能していたと考える。５号溝状遺構と11・13号溝状遺構には覆土に差異が認められず、同時期に埋没したものと考える。13号溝状遺構は12号溝状遺構覆土を切り、12号溝状遺構と沿うように掘削されていることから、13号溝状遺構が埋没し、時を経ずに掘削し直したことが推定できる。13号溝状遺構が17号溝状遺構を切っており、さらに17号溝状遺構は20・22号溝状遺構を切っていた。また、３号掘立柱建物跡と４号掘立柱建物跡は覆土が類似することから同時期の遺構と考えられ、切り合い関係から３号掘立柱建物跡より２号掘立柱建物跡が新しい。

土坑については詳細が不明であるが、６～８号土坑は形態・深さ・遺構覆土が類似しており、同時期の遺構である可能性が高い。６・８号土坑からは土師器台付甕脚部や小型の坏が出土しており、新しい土器が混ざっていることはなかった。また、８号土坑は22号溝状遺構を切っていた。このことから多くの遺構が古墳時代中期末頃かそれをやや遡る時期に比定できる可能性があるが、明確でない。

第２遺構面の遺物（第27図、写真図版12）

図化した遺物は計14点で、第27図に示した。遺構ごとに詳細を記述していく。

６号土坑出土遺物（第27図29）

29は土師器台付甕で覆土上層から出土した。脚部内面の一部にハケ目が残る。古墳時代中期末～後期前葉に位置付けられよう。

８号土坑出土遺物（第27図30、写真図版12－30）

30は土師器ミニチュア土器で、覆土中層から出土した。底部内面に指頭痕が認められる。古墳時代後期の内湾坏を小型化したような器形だが、正確な時期比定は困難である。

12号溝状遺構出土遺物（第27図31～37）

31・32は須恵器で覆土上位から、33・34は灰釉陶器、35～37は山茶碗で覆土下位から出土した。31は坏蓋である。胎土・器形から湖西窯の製品と考えられる。Ⅳ期前葉に比定できる。32は坏身である。底部と体部の境と底部周囲に回転ヘラ削りが施される。Ⅴ期後葉に位置付けられる。33は碗である。内面に自然釉が認められるが、施釉の有無は不明である。青灰色を呈し、砂礫を含んでいることから東遠諸窯の製品であると考えられる。11世紀代の所産であろう。34は碗である。高台が高いことが特徴で、深碗ないし大型碗であると考えられる。胎土から宮口古窯群で生産されたものと推定できる。灰釉陶器Ⅳ期－２に位置づけられるであろう。35は碗である。底部内面に使用痕が、外面には糸切り痕が僅かに確認できる。胎土から尾張型山茶碗であると考えられ、常滑古窯群産である可能性がある。４型式に位置づけられよう。36は碗である。底部内面に使用痕・墨痕が認められる。高台には籾痕が認められる。山茶碗Ⅰ期－２に比定できる。37は碗である。胎土から東遠型山茶碗であると考えられる。

20号溝状遺構出土遺物（第27図38）

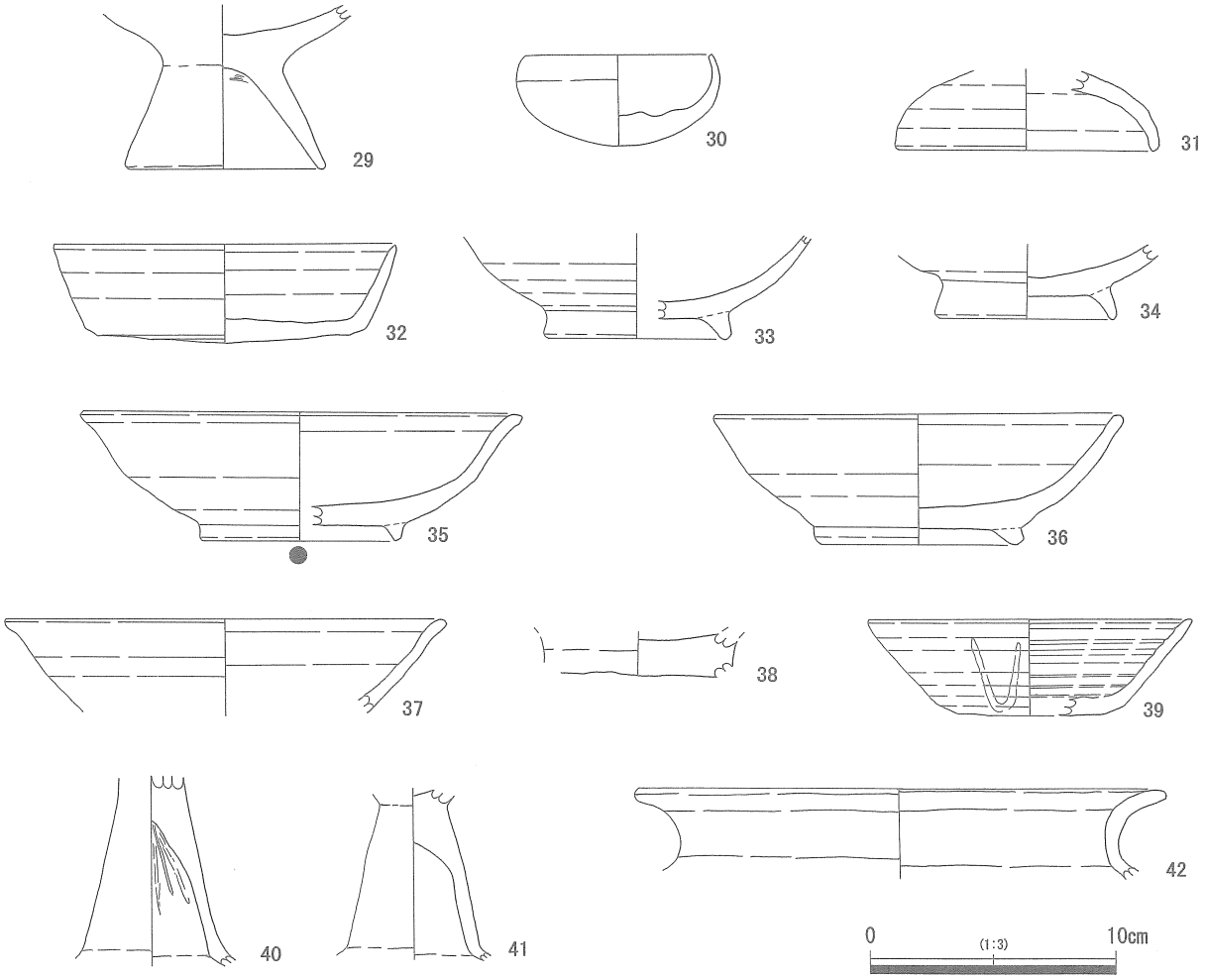
38は土師器壺または甕と考えられる。底部と体部の境に粘土紐を充填している。古墳時代の壺・甕の底部片である可能性もあるが、明確にできない。

22号溝状遺構出土遺物（第27図39～41）

39は須恵器坏身で覆土上層から出土した。内外面に火襷がみられ、ロクロ目が明瞭である。Ⅴ期後葉（古段階）に比定でき、８世紀後半に位置付けられる。40・41は土師器高坏で、覆土上層から出土した。40は器面全面が磨滅しているが、脚部内面に絞りの痕跡が認められる。41よりやや細く、脚部も長い。このことからやや古く、前半期Ⅲ期に比定できる。41も、外面調整痕は磨滅しているが、脚部内面の一部にケズリが施されている。前半期Ⅳ－１期に比定でき、５世紀後半に位置付けられる。

１号性格不明遺構出土遺物（第27図42）

42は土師器長胴甕で、底面から出土した。口縁部のみ残存し、調整痕は磨滅している。平底になるのか不明であるが、口縁部の形態から７世紀前半～中頃に位置付けられるであろう。



第27図　SK6・８・SD12・20・22・SX1出土遺物実測図

第４節　包含層・遺構外出土遺物

包含層や調査区周囲に掘削した排水溝出土遺物をここで報告する。

⑴　古墳時代の遺物（第28図43～62、写真図版12－50・51・61・63）

須恵器　43は平瓶である。口径は大きく、体部も大型であると推測できる。肩部に粘土粒が貼り付けられる。胎土から湖西窯の製品であると考えられる。７世紀中頃に位置付けられよう。44は坏蓋である。天井部の約１／２に回転ヘラ削りが施され、口唇部を平坦面とする。古い要素をもつが、稜部の突出は弱いことからⅢ期前葉に位置付けられる。45は坏身である。底部外面の１／２以上にヘラ削りが施されているが、体部はやや扁平である。立ち上がりがすべて欠損しているため、判然としないがⅢ期中葉に位置づけられる。46は坏身である。胎土から湖西窯の製品であると考えられる。Ⅳ期前葉に比定できる。47は坏身である。Ⅳ期末葉に位置付けられる。48は坏身である。立ち上がりは短いが、口唇部は平坦状となる。また、受け部直下が沈線状にやや窪んでいる。Ⅲ期末葉に位置付けられよう。

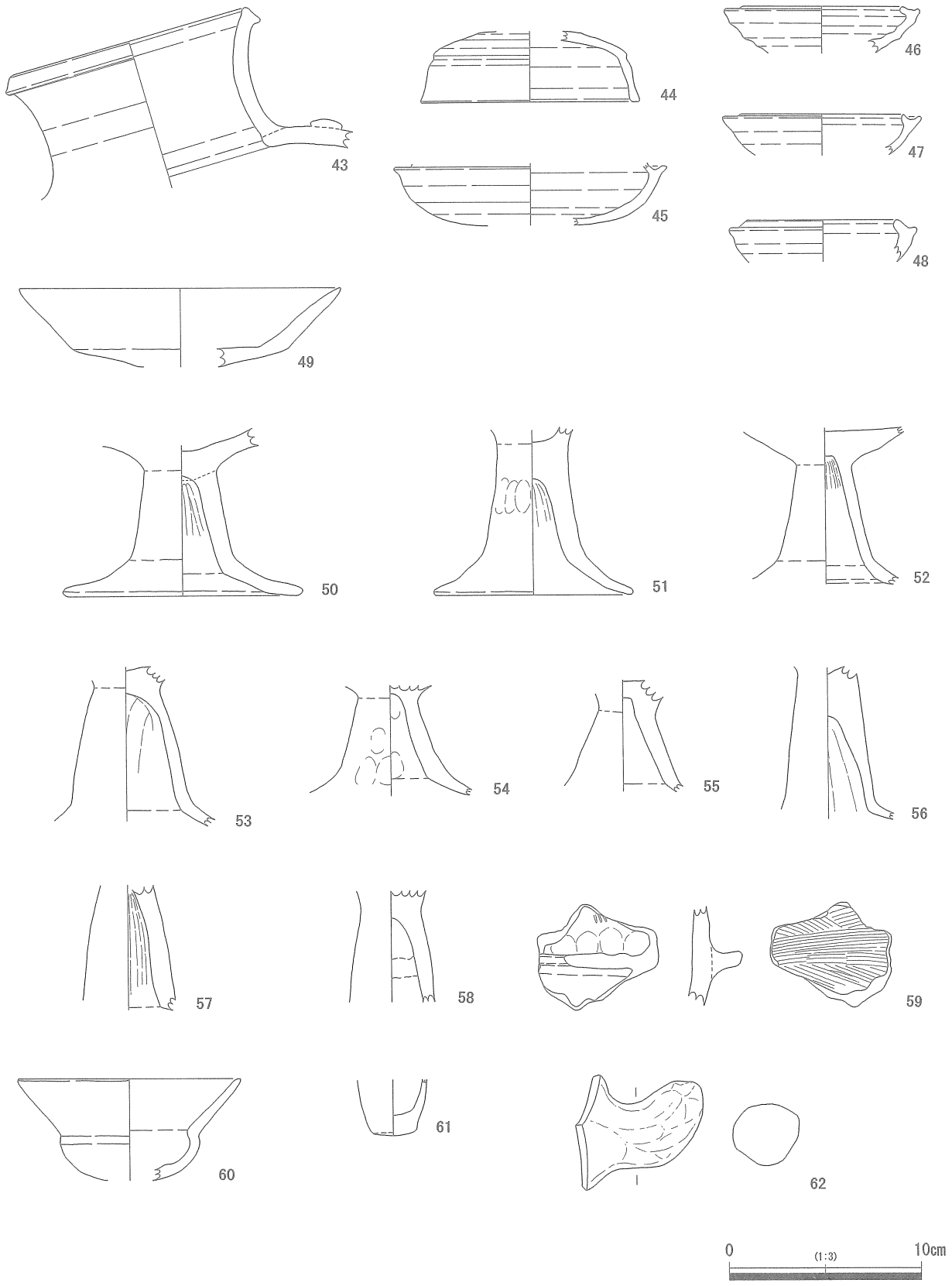
土師器　49～58は高坏である。50は裾部と脚部上半部で剥離しており、成形時に裾部を別段階に成形したと考えられる。また、坏部内面にナデ調整がみられ、粘土を充填し、脚部と接合している。前半期Ⅲ期に位置付けられよう。51は脚部と坏部の接合部が大きく窪み、50・52などと異なり、脚上部が柱実となる。この脚部上面に粘土を充填し、坏部を接合したと考えられる。52は坏部内面が窪まず、坏底部が厚い。前半期Ⅲ期に比定できよう。53は脚部内面に坏部へ向かってナデが施される。前半期Ⅳ期－１に比定できる。54は脚部内面に粘土を充填し、坏部と接合している。前半期Ⅳ期－２に位置付けられる。55は脚部外面上位に黒斑がみられる。他の土師器と異なり、器面が荒れず焼成は良好である。57はあまり中膨らみせず、斜め下へ脚部が延びる。58は脚部内面に粘土紐の痕跡が残る。前半期Ⅳ期－２に比定できる。

埴輪　59は残存部上位がやや内湾することから朝顔型埴輪の可能性があるが明確でない。突帯の特徴から川西宏幸氏の円筒埴輪編年Ⅱ期（川西 1978）に比定できる可能性が高いが、器壁が薄いことが同時期に位置づけられる松林山古墳出土例と異なっている。遺跡周辺で埴輪をもつ古墳は、磐田原台地南部の松林山古墳・稲荷山古墳（連城寺６号墳）・高根山古墳などがあるが、いうまでもなくいずれの古墳も本遺跡と近接していない。周辺遺跡から流出したものと推測される。

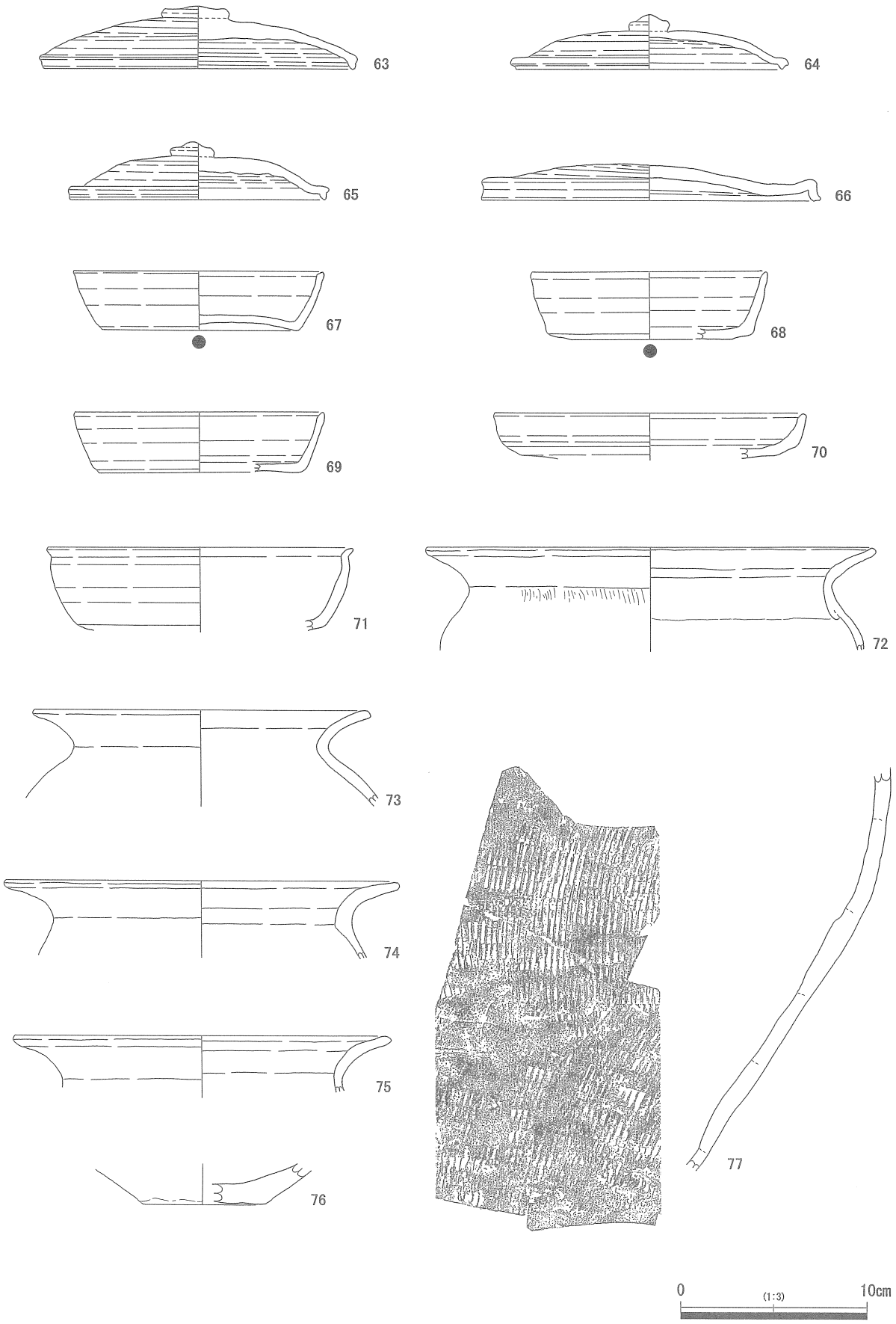
その他の遺物　60は土師器坩である。器面全面が磨滅しており、調整等は不明である。前半期Ⅱ－１～２期に位置付けられよう。61は土師器ミニチュア土器である。器面全面が磨滅している。62は土師器甑である。器面に粘土塊を貼り付けて接合している。正確な時期は不明であるが、形態的特徴から古墳時代に比定できよう。

⑵　奈良時代の遺物（第29図63～76、写真図版13－64・66・68）

須恵器　63は坏蓋である。天井部に濃緑色の自然釉を被り、内面には重ね焼き痕が認められる。Ⅴ期前葉（古段階）に比定でき、８世紀前半に位置付けられよう。64は坏蓋である。摘みは小さく、器高は低い。胎土からみて湖西窯の製品であろう。Ⅴ期前葉（新段階）に比定できる。65は坏蓋である。天井部にヘラ削り、天井部内面に重ね焼き痕が認められる。Ⅴ期前葉（新段階）に位置付けられる。66は坏蓋で、いわゆる平頂蓋である。天井部外面にヘラ削り、天井部内面に当て具痕が残る。Ⅴ期後葉（新段階）に位置づけられる。67は坏身である。重ね焼きによる焼け歪みがみられる。底部中央部以外はヘラ削りが施され、中央部に糸切り痕が残る。68は坏身である。底部と体部の境は当てによって底部中央部が突出し、糸切り痕が残る。Ⅴ期後葉（古段階）に比定できよう。69は坏身である。67・68と異なり、底部と体部の境に回転ヘラ削りが施される。67～69はいわゆる箱坏である。70は皿である。71は埦である。



第28図　包含層出土遺物(1)



第29図　包含層出土遺物(2)

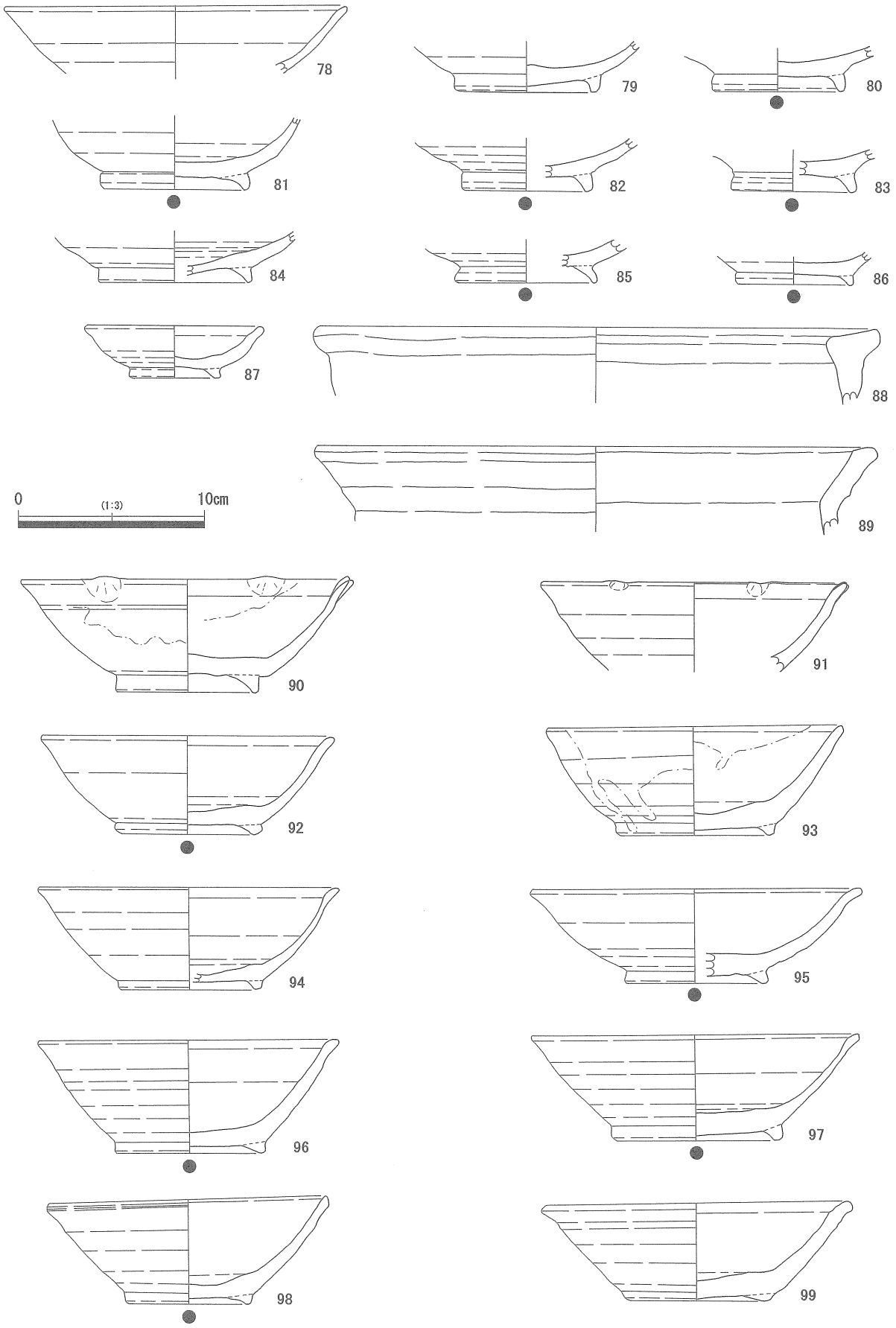
口端部がくの字状に屈曲することが特徴で、金属器模倣の埦であると考えられる。口縁端部のみに使用痕が認められ、倒置の状態で転用されていたと推測できる。８世紀前半頃に位置付けられるであろう。
土師器　72～76は長胴甕であり、口縁部の形態からⅣ期末葉～Ⅴ期前葉に位置付けられる。72は口縁部と肩部の境に粘土紐を貼り付けた痕跡が明瞭に残る。75は口縁部内面に浅い沈線状の段をもつことが特徴である。

⑶　平安時代の遺物（第29図77・第30図78～89、写真図版15－１）

須恵器　77は甕である。内外面ともに褐色を呈す。内面に粘土紐痕が残る。
灰釉陶器　78は碗である。外面にハケ塗りで施釉されている。内面は自然釉を被る。79は碗である。高台を棒状工具による回転ナデによって貼り付けている。施釉の有無は不明である。O53号窯期並行期に位置付けられよう。80は碗である。底部外面の中心にのみ糸切り痕を残す。施釉の有無は不明である。灰釉陶器Ⅲ期－２に比定できる。82・83は碗である。82は底部外面に糸切り痕を残す。いずれも東遠諸窯で生産されたもので10世紀前半に位置付けられる。83は高台がやや内湾しながら下方へ延びる。底部外面に糸切り痕が残る。10世紀後半代に位置付けられよう。84は碗である。腰が張り、高台の断面は三角形を呈す。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。胎土からみて遠江諸窯の製品であろう。85は碗である。底部外面に糸切り痕が残る。胎土から東遠諸窯で生産されたものと考えられる。10世紀後半代に位置づけられよう。86は碗である。底部外面中央部に糸切り痕を残す。焼成不良で器面全面が灰白色を呈す。11世紀前半に位置付けられよう。87は小碗である。腰が張り、高台は丁寧なつくりで底部外面はナデ調整が施されている。百代寺窯期並行期に位置付けられ、胎土からみて東遠諸窯の製品の可能性がある。
土師器甕　88はいわゆる清郷型甕である。口縁部と体部の境に粘土紐の痕跡がみられる。11世紀前半に位置付けられよう（北村 2001）。89は三河型甕である。口唇部は平坦に仕上げられ、口縁部外面に沈線状の窪みが巡る。10世紀前半代に位置付けられる。

⑷　中世の遺物（第30～33図90～157、写真図版13・14）

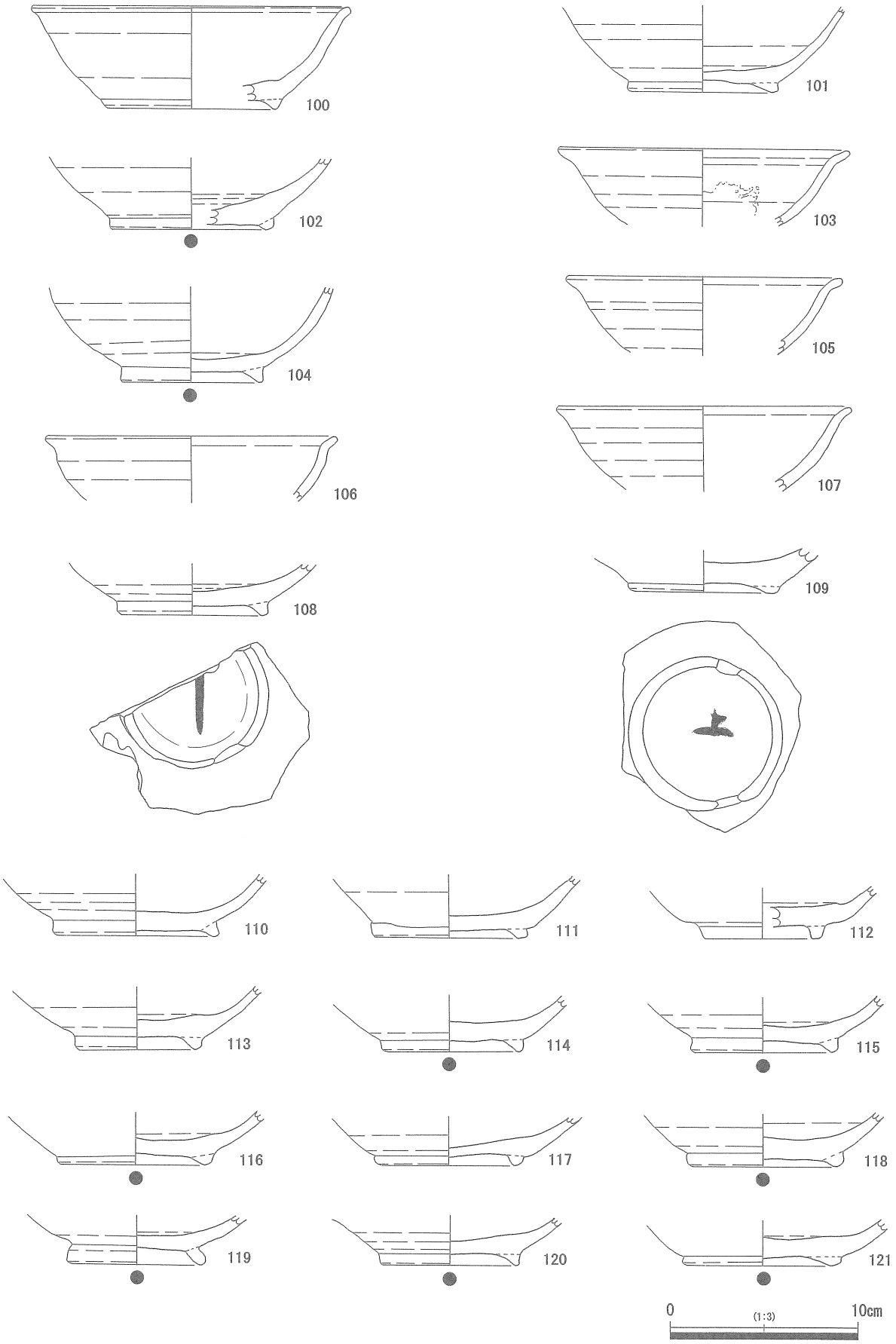
山茶碗（第30～33図）　90～131は碗、132～143は小碗、144～155は小皿、156は子持器台である。90～97・99～102・104・108～112・114～118・121・123・128～132・136・141・145・147～153は渥美・湖西型山茶碗、98はいわゆる北部系の山茶碗で、胎土は泥質で砂礫をほとんど含んでいない。138・146・155は尾張型山茶碗であるが、胎土から常滑古窯群で生産された可能性がある。103・113・119・122・124～126・133～135・137・142・144・154は東遠型山茶碗である。以下、個別に詳細を記す。
碗（第30～32図）　90は輪花碗で、漬け掛けにより施釉されている。漬け掛け施釉の範囲に、輪花が指オサエによって付けられる。漬け掛けが３カ所にみられることから、輪花の数も同数であると考えられる。底部内面には煤が付着する。山茶碗Ⅰ期－１に比定できよう。91は輪花碗で、口端部にわずかに指オサエによる輪花が認められる。92は底部内面に使用痕、高台に籾痕が認められる。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。93は高台に圧痕は認められない。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。口縁部内外面上位に煤が付着する。山茶碗Ⅱ期－１に比定できよう。94は高台にはスノコ状圧痕が認められ、底部外面の糸切り痕をナデ消している。底部内面中央部と口縁部内面にわずかに煤が付着する。95は底部外面に糸切り痕が残るが、高台には圧痕は認められない。山茶碗Ⅲ期－１に比定できる。96は内面に煤が付着し、また破面の一部にも同様に煤が確認できる。破砕後に被熱したと考えられる。山茶碗Ⅲ期－１に比定できる。97は高台に籾痕、底部内面に使用痕が認められる。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。98は高台には多くの籾痕が認められる。底部外面の糸切り痕はナデ消されるが、僅かに残る。胎土は砂礫をほとんど



第30図　包含層出土遺物(3)

含まない精良であることから、いわゆる北部系の山茶碗であると考えられ、本遺跡唯一の出土例である。藤沢良祐氏の瀬戸古窯群の山茶碗編年第５型式に比定できよう（藤沢 2008）。99は底部外面の糸切り痕はナデ消されているが、高台には籾痕が認められる。また、口唇部内面に回転ナデによる段をもつ。山茶碗Ⅲ期－１に比定できる。100は高台に籾痕が残る。Ⅲ期－１に比定できよう。101は体部上位の器壁は薄く丁寧なつくりで、高台には圧痕が認められない。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。山茶碗Ⅲ期－１に比定できる。102は高台が扁平で、籾痕が認められる。底部内面には煤が付着している。山茶碗Ⅲ期－２に比定できよう。103は体部内面に漆と考えられる光沢をもつ固体が付着している。口縁部が弱く外反する。104は高台に圧痕は認められず、丁寧なつくりである。底部外面にはわずかに糸切り痕が残る。山茶碗Ⅰ期－１に比定できる。105～107は施釉が認められず、内面に自然釉を被る。口縁部が外反することが特徴である。産地は不明である。108は底部外面の糸切り痕はナデ消され、その上に「｜」墨書が認められる。山茶碗Ⅱ期－１に比定できよう。109は高台に籾痕が認められ、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。底部外面中央部に「上」が墨書されている。山茶碗Ⅲ期－１に比定できよう。110は底部内面に使用痕が認められる。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。体部中央と口縁部内面に煤が付着する。111は底部内面に使用痕が認められる。高台はやや潰れ扁平となるが、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。山茶碗Ⅲ期－１に比定できる。112は高台が厚く、台形を呈する。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。113は高台には籾痕が認められ、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。高台外面と底部内面に煤が付着する。山茶碗Ⅱ期－１に比定できよう。114は高台には籾痕が、底部内面には使用痕が認められる。底部外面中央部にのみ糸切り痕が残る。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。115は高台には籾痕が、底部内面に使用痕が認められる。山茶碗Ⅱ期－１に比定できよう。116は高台には籾痕が、底部外面には糸切り痕が残る。内・外面ともに煤が付着している。山茶碗Ⅲ期－１に比定できよう。117は高台には籾痕が認められず、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。Ⅲ期－１に比定できよう。118は底部外面中央部には糸切り痕を残し、高台には籾痕が認められる。山茶碗Ⅲ期－１に比定できよう。119は高台には圧痕が認められず、丁寧なつくりである。底部内面には煤が付着する。山茶碗Ⅰ期－１に比定できよう。120は高台に圧痕は認められない。山茶碗Ⅰ期－２に比定できる。121は高台が低く扁平で、籾痕が認められる。底部外面の糸切り痕は未調整である。122は高台が比較的丁寧なつくりで、籾痕は認められない。底部外面中央部にのみ糸切り痕が残る。山茶碗Ⅱ期－１に比定できよう。123は底部内面全面と破面に煤が付着している。破砕した後に被熱したと考えられる。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。124は底部内面に使用痕が認められる。底部外面に糸切り痕が残る。山茶碗Ⅱ期－１に比定できよう。125は底部内面に使用痕が残る。山茶碗Ⅱ期－１に比定できよう。126は底部外面の糸切り痕がナデ消され、圧痕は認められない。器面は褐色を呈することが特徴で、宮口古窯群で生産されたと考えられる。山茶碗Ⅰ期－２に位置づけられる。128は底部中央に薄く煤が付着する。山茶碗Ⅲ期－１に比定できる。129は高台には籾痕がみられ、底部外面中央には糸切り痕が認められる。底部内面は生焼けで褐色を呈する。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。130は底部に籾痕を残す。山茶碗Ⅲ期－１に比定できる。131は底部内面に使用痕が認められ、外面の糸切り痕はナデ消されている。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。

小碗（第32図）　132は高台が扁平であるが、圧痕は認められない。山茶碗Ⅰ期－２に比定できる。133は底部外面に糸切り痕が残り、施釉は認められない。胎土・色調からみて東遠型山茶碗であるが、掛川市清ヶ谷古窯群の製品であると推測される。134は高台にスノコ状圧痕が認められ、底部外面の糸切り痕はナデ消されている。胎土からみて浜松市宮口古窯群で生産されたものと考えられる。山茶碗Ⅰ期－１に位置付けられよう。135は底部内面に使用痕が認められ、外面の糸切り痕はナデ消されている。胎土からみて東遠型山茶碗の可能性が高い。12世紀後半代に位置づけられよう。136は底部内面に使用痕が認めら



第31図　包含層出土遺物(4)

れる。底部外面の糸切り痕はナデ消されている。胎土からみて渥美・湖西型山茶碗である。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。137は高台が長方形状に角をもち、底部内面には使用痕が認められる。胎土からみて東遠型山茶碗であると考えられる。山茶碗Ⅰ期－１に比定できる。138は底部外面の糸切り痕はナデ消され、内面には使用痕が認められる。胎土からみて尾張型山茶碗であるが、渥美古窯群で生産されたものと考えられる。1b型式に比定できよう。139は高台が一部変形し、いびつな形を呈する。高台の糸切り痕はナデ消され、底部内面には全面に自然釉が被る。焼成時に一番上に重ね焼きされていたと考えられる。山茶碗Ⅰ期－１に比定できる。140は底部外面の糸切り痕はナデ消され、底部内面に使用痕が認められる。焼成不良で褐色を呈す。山茶碗Ⅰ期－２に比定できよう。141は低く扁平な高台に籾痕が認められ、底部内面には使用痕がみられる。山茶碗Ⅰ期－２に比定できよう。143は底部内面に使用痕が認められる。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。

小皿（第32図）　144は底部に糸切り痕を残し、また体部から底部にかけて煤が付着する。山茶碗Ⅱ期－１に比定できよう。145は底部内面全面に自然釉が被る。器高は高く、底部外面に糸切り痕が僅かに残る。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。146はわずかに高台が残る。２型式に比定できよう。147は体部中位に屈曲点をもち、底部内面にナデ調整が認められる。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。149は底部外面の糸切り痕はナデ消されているが、わずかに痕跡が残る。山茶碗Ⅱ期－１に比定できよう。150は底部内面に使用痕が、外面に糸切り痕が認められる。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。151は口縁部内面に僅かに段が認められる。底部外面には糸切り痕が残る。山茶碗Ⅲ期－１に比定できよう。152は底部外面に明瞭に右回転の糸切り痕が残る。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。153は体部内外面に墨書が施されている。内面には中央部から口縁部に向かって書かれ、止めや払いもみられることから識字層によるものと考えられる。これらは文字としては判読できず、内容を明確にできない（註１）。山茶碗Ⅱ期－１に比定できる。154は底部の一部に糸切り痕が残り、口唇部に僅かに煤が付着している。山茶碗Ⅲ期－１に比定できよう。155は底部外面に糸切り痕を残し、底部内面にナデが施される。6a型式に位置付けられる。156は子持器台の坏部である。内面全面に自然釉を被る。

鉢（第33図）　157は大平鉢ないし片口鉢であると考えられる。やや丸味をもって直線的に立ち上がり、体部上位までヘラ削りが認められる。胎土からみて渥美・湖西型山茶碗であろう。

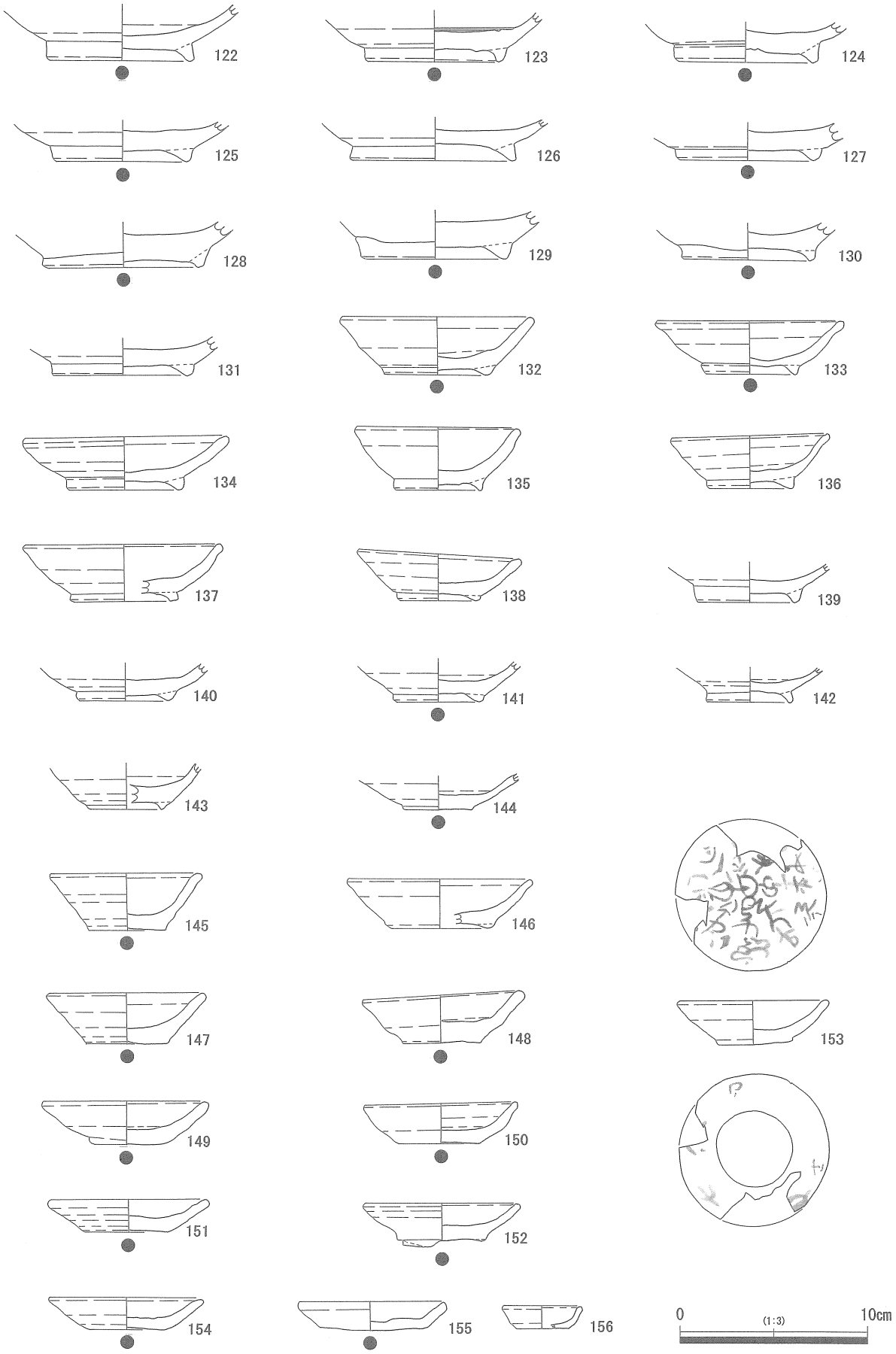
⑸　その他の遺物（第33・34図158～175、写真図版15－２・３）

青磁　158は青磁椀である。目の粗い櫛歯状工具で、左から右へ器面を削り、施文している。内面は無文だが、口縁部上位に浅い沈線が巡っている。

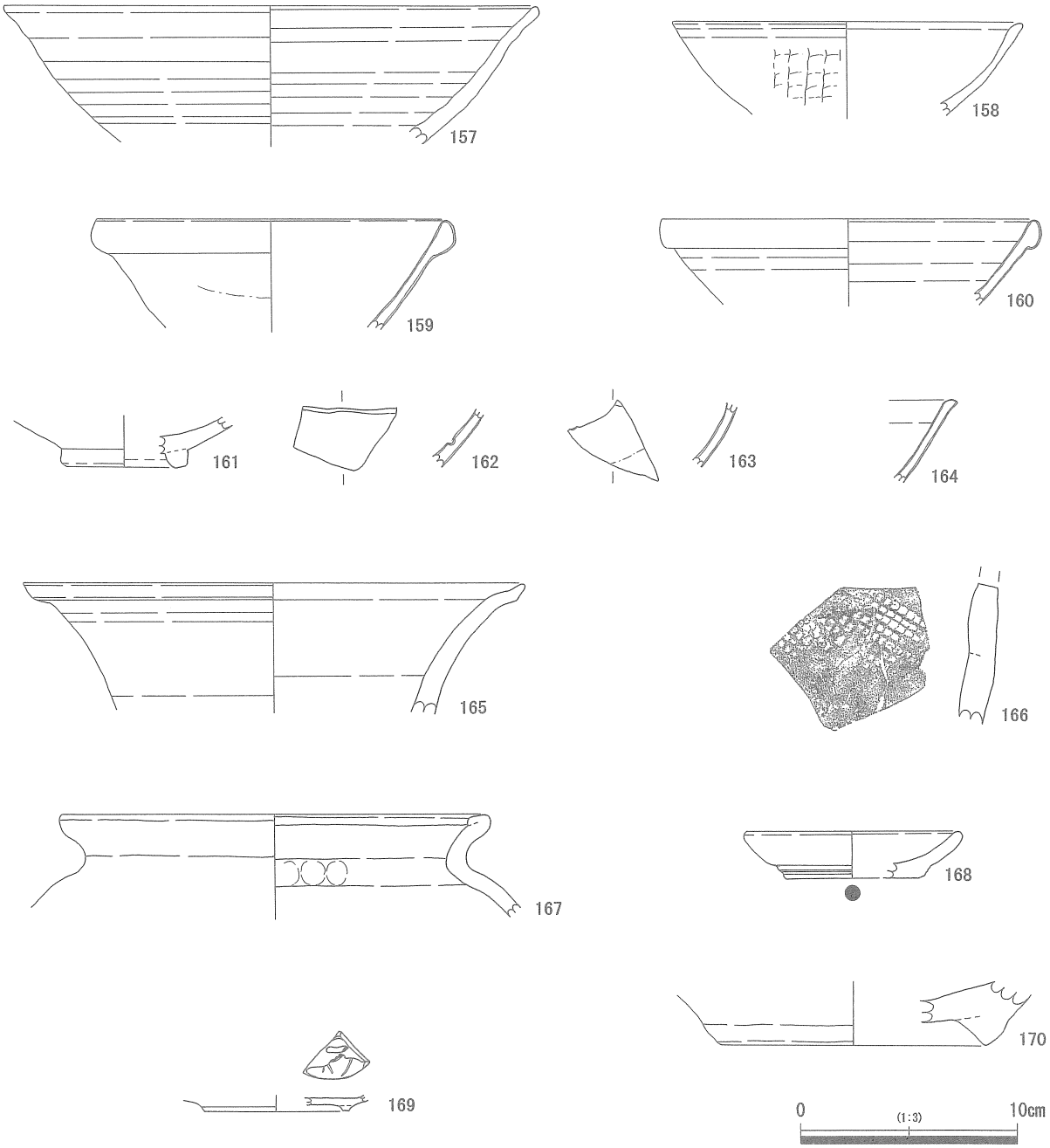
白磁（159～164）　159・160は椀Ⅳ類、163は椀Ⅴ類である（山本 1995）。161は高台のみ残存しているため、器種が判然としない。高台はヘラ削りによって整えられ、厚く仕上げられている。体部が外へ向かって延びているため、山本信夫氏の貿易陶磁分類（山本 1995）椀Ⅷ類であると考えられる。いずれの資料も12世紀代に位置づけられる。

その他（165～170）　165は広口長頸瓶で、渥美古窯群ないし在地産の可能性があるが明確でない。破断面は灰色だが、外面は黒色を呈し、器面に黄土を塗布している可能性がある。166は渥美古窯群産の甕である。体部に格子目状の叩き目が認められる。167は土師質土器鍋である。いわゆる伊勢型鍋で、口縁部は比較的丁寧につくられている。11世紀後半から12世紀前葉に位置付けられる。168は土師質土器皿である。ロクロ成型品で、底部に糸切り痕を残す。169は瓦器椀である。小破片で詳細は不明であるが、低く薄い高台が貼り付けられ、底部内面にはわずかに暗文が施される。畿内からの搬入品であろう。

土製品（171～173）　171・172は管状土錘、173は鞴羽口である。171は大型であり、172は小型でいずれも土師質である。173は先端部に向かってややすぼまる形態で、スサ入りの粘土により成形されている。



第32図　包含層出土遺物(5)

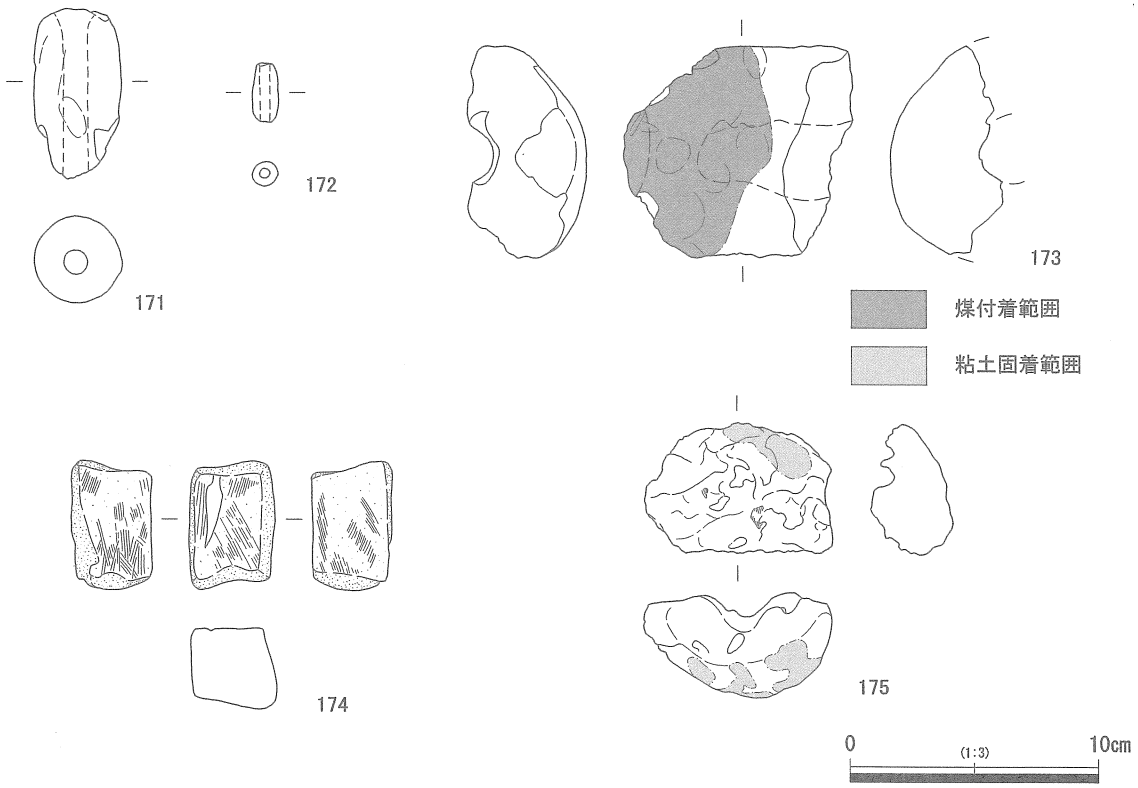


第33図　包含層出土遺物(6)

内面には僅かに繊維痕跡が確認でき、芯棒に巻き付けて成形している。先端部外面には煤が付着する。復元送風口径2.6㎝、外径9.2㎝、残存長9.0㎝で、重量感、厚みがある。７世紀以降に先端部がすぼまる形態に規格化されるようである（安間 2008）。羽口の送風口径や形態から古代に位置づけられる可能性があるが、明確でない。

砥石　174は淡黄色を呈する砂岩で、３面を砥面としている。砥面は平坦またはやや外へ向かって膨らんでいる。

鉄滓　175は椀型鍛冶滓で、表面には凹凸がみられる。また、一部に木炭が認められ、底部には灰白色を呈する炉床土が固着する。長さ5.15㎝、幅7.95㎝、重さ135ｇを測り、磁着度は弱い。



第34図　包含層出土遺物(7)

第４章　まとめ

本書には、試掘・確認調査と本調査の成果を収録した。その成果をまとめ、結語とする。

試掘・確認調査　太田川両岸の約55,000㎡を対象に試掘・確認調査を行った。１区（右岸）では、従来西向遺跡と考えられていた範囲よりやや南に広がることを確認した。３区（左岸）は、西向遺跡包蔵地の隣接地にあたるが、遺跡としては認知されていなかった。今回の調査で改めて遺跡が存在することが明らかとなり、西向遺跡とは別に「富里遺跡」として遺跡登録された。この遺跡も西向遺跡とほぼ同時期の古墳時代から中世に位置づけられる。太田川や原野谷川が江戸期に改修される以前には同じ集落を形成していたとも考えられよう。

古代～中世　第１遺構面では掘立柱建物跡１棟、土坑１基、溝状遺構３条、土器集中１カ所を検出した。今回の調査で遺物については最も多く出土しているが、それに比較して遺構はわずかであった。しかし、土器類は生活痕跡を示す使用痕や煤が付着している例が多く、集落域が広がることを予想させる。また山茶碗は湖西・渥美産が主体的で、その他の産地のものは客体的であった。この傾向は本遺跡だけでなく、他の遺跡でもみられるようで（藤沢 2008)、一定の流通圏が存在していただろう。

３号溝状遺構のみ古代（８世紀中頃）に比定でき、須恵器坏・皿・甕、土師器甕が覆土上層からまとまって出土した。特に須恵器甕は故意に口縁部を欠き、破砕された状態で出土し、何らかの儀礼的行為が行われたと考えられる。

古墳時代　第２遺構面では、掘立柱建物跡３棟、柱穴・小穴38基、土坑７基、溝状遺構18条、性格不明遺構３基を検出した。時期を限定できなかったが、古墳時代中期から終末期の遺構面と想定した。西向遺跡１次調査では、弥生時代後期の遺物が出土しているが、今回の調査では確認していない。

古墳時代中期末葉から終末期には、福田・浅羽地域では周辺に元島遺跡、古新田遺跡、北野遺跡があるが、いずれの遺跡でも須恵器の出土量が多く、土師器も貯蔵具・供膳具などを揃えている。本遺跡の状況とは対照的である。本遺跡は階層下位の集落で、生活域からやや離れていることが考えられる。

遺跡の広がりと性格　今回の調査は、太田川の河川改修工事に伴い行われており、調査対象となった範囲は南北に長く、限定的である。包含層出土遺物や遺構の検出地点も調査区西側に集中して確認できた。このことから本遺跡の中心域は調査対象に含まれなかった調査区外西方に存在することが予想される。

また、出土遺物からは鞴羽口・砥石・鉄滓、埴輪が特出でき、遺跡の評価と関わる。鞴羽口は、包含層出土のため時期を限定できなかったが、その形態から古代以降で、中世までは下らないと考えられる。周辺に奈良・平安時代の鍛冶炉が存在する可能性がある。砥石はこの羽口、鍛冶炉に関連するのかは不明である。

埴輪に関しては遺跡内や周辺に古墳がなく、周囲から流出したものと考えた。推測の域を出ないが、近接して古墳やそれに類する墳墓が存在した可能性もある。そう考えると、古墳時代前期には近接地に墓域が広がっていたことが推測される。磐田原台地南部に分布する古墳・古墳群との関係も興味深い。

本遺跡は４世紀後半頃から始まり、まず墓域が形成され、その後古墳時代中期末葉から本格的に集落が形成され、古代には鍛冶炉・集落、中世にも集落が広がり、13世紀後半には集落が衰退していくと考えられる。西向遺跡は今回の試掘・確認調査を行った範囲だけでも約30,000㎡を遺跡範囲として確認しており、さらに西側へ遺跡が広がることは確実である。今回はその一部を調査したに過ぎない。今後の調査により、西向遺跡の実態がさらに把握されることを期待したい。

報告書作成に際して、以下の方々・団体機関から御指導・御助言を賜りました。末筆ですが、記して感謝申し上げます。
河合　修　鈴木一有　鈴木敏則　田村隆太郎　坪井俊三　日吉康浩　浜松市立内山真龍資料館　（五十音順・敬称略）

第２表　出土遺物一覧表

番号	遺構	出土地点	グリッド	種類	器種	部位	残存率（%）	法量（cm）				色調（外面）
								口径	器高	底径	高台径（脚部）	
1	TPⅡ－6	包含層		土師器	高坏	口縁～脚部	30%	15.0	14.8	－	11.2	にぶい黄橙（10YR7/4）
2	TPⅢ－2	包含層		山茶碗	碗	体～底部	50%	－	(4.3)	－	8.0	灰白（2.5Y7/1）
3	TPⅡ－6	包含層		山茶碗	碗	体～底部	30%	－	(3.5)	－	7.5	灰白（2.5Y7/1）
4	TPⅢ－1	包含層		土師器	長胴甕	口縁～頸部	－	(24.0)	(5.55)	－	－	にぶい黄橙（10YR7/3）
5	SP1	覆土中層		山茶碗	碗	口縁～底部	70%	16.4	5.1	－	7.2	灰白（5Y7/1）
6	SD1	覆土下層・包含層	D・G－2	須恵器	甕	口縁部	(15%)	3.0	－	－	－	灰（N6）
7	SD1	覆土・包含層		須恵器	坏身	口縁～底部	20%	(7.0)	2.75	－	－	灰（N6）
8	SK1	覆土下層		山茶碗	碗	口縁～底部	70%	(16.9)	5.35	－	6.6	褐灰（10YR6/1）
9	SK1	覆土層		山茶碗	碗	体～底部	60%	－	(4.3)	－	8.0	灰白（2.5Y7/1）
10	SK1	覆土下層		山茶碗	小碗	口縁～底部	70%	9.75	2.9	－	4.7	灰白（5Y7/1）
11	SD1	覆土下層		山茶碗	碗	体～底部	40%	－	(2.5)	－	8.15	灰白（2.5Y7/1）
12	SD1	排水溝・包含層		須恵器	長頸壺	頸～肩部	(30%)	－	11.0	－	－	灰白（N7）
13	SD1	覆土・包含層	D－2・3	須恵器	長頸壺	体～底部	(30%)	－	(3.8)	－	(12.4)	黄灰（2.5Y6/1）
14	SD1	覆土下層		山茶碗	碗	体～底部	40%	－	(2.55)	－	7.0	灰白（2.5Y7/1）
15	SD1	覆土		山茶碗	碗	体～底部	(40%)	－	(2.3)	－	(7.2)	灰白（N8）
16	SD3	排水溝(西)・覆土		須恵器	坏身	口縁～底部	40%	(12.8)	3.6	11.0	－	灰（N5）
17	SD3	覆土上層		須恵器	坏身	口縁～底部	50%	(13.8)	4.5	－	－	灰白（5Y7/1）
18	SD3	覆土上層		須恵器	甕	肩～体部	(40%)	－	(31.5)	－	－	褐灰（10YR6/1）
19	SD3	覆土上層		須恵器	甕	体～底部	(60%)	－	(20.5)	－	－	灰白（N7）
20	SD3	覆土上層		須恵器	坏蓋	体～底部	10%	(16.5)	(2.5)	－	－	黄灰（2.5Y6/1）
21	SD3	覆土上層		須恵器	皿	口縁～底部	25%	(18.8)	2.95	(13.8)	－	黄灰（2.5Y6/1）
22	SD3	覆土上層		須恵器	皿	口縁～底部	15%	(18.8)	2.8	(14.0)	－	黄灰（2.5Y6/1）
23	SD3	覆土上層		土師器	長胴甕	口縁～頸部	(10%)	(22.2)	(5.6)	－	－	にぶい褐（7.5YR5/3）
24	土器集中1			土師器	台付甕	口縁～脚部	60%	12.2	18.4	－	6.25	灰黄褐（10YR6/2）
25	土器集中1			土師器	台付甕？	体部	(20%)	－	(18.4)	－	－	にぶい黄橙（10YR6/3）
26	土器集中1			土師器	台付甕	口縁～体部	(30%)	14.0	(11.8)	－	－	灰黄褐（10YR6/2）
27	土器集中1			土師器	台付甕	台部	(80%)	－	(9.3)	－	(8.9)	にぶい橙（2.5YR6/4）
28	土器集中1			土師器	台付甕	台部	(100%)	－	(7.0)	－	6.0	にぶい黄橙（10YR7/3）
29	SK6	覆土上層		土師器	台付甕	台部	20%	－	8.5	7.9	－	にぶい黄橙（10YR6/3）
30	SK8	覆土中層		土師器	ミニチュア土器	体部	40%	(7.4)	3.6	(1.2)	－	浅黄（2.5Y7/3）
31	SD12	覆土		須恵器	坏蓋	口縁～体部	20%	(10.3)	(3.1)	－	－	灰（N6）
32	SD12	覆土		須恵器	坏身	口縁～底部	30%	(13.6)	－	(11.1)	－	黄灰（2.5Y6/1）
33	SD12	覆土下層		灰釉陶器	碗	体～底部	15%	－	(4.5)	－	(7.1)	灰白（2.5Y7/1）
34	SD12	覆土下層		灰釉陶器	碗	体～底部	30%	－	(2.5)	－	6.85	灰黄（2.5Y7/2）
35	SD12	覆土下層		山茶碗	碗	口縁～底部	30%	(17.2)	5.1	－	(7.6)	灰白（2.5Y7/1）
36	SD12	覆土下層		山茶碗	碗	口縁～底部	40%	(16.5)	5.1	－	－	灰白（2.5Y7/1）
37	SD12	覆土下層		山茶碗	碗	口縁～体部	10%	(17.4)	(3.7)	－	－	灰白（2.5Y7/1）
38	SD20	覆土上層		土師器	壺？甕？	底部	(90%)	－	(1.5)	－	－	にぶい黄橙（10YR7/3）
39	SD22	覆土	G－1	須恵器	坏身	口縁～底部	25%	(12.8)	3.8	－	－	灰（5Y6/1）
40	SD22	覆土	G－1	土師器	高坏	脚部	－	－	(7.2)	－	－	橙（7.5Y7/6）
41	SD22	覆土上層		土師器	高坏	脚部	－	－	(6.4)	－	－	鈍い黄橙（10YR6/3）
42	SX1	覆土下層		土師器	長胴甕	口縁部	(25%)	(20.9)	(3.5)	－	－	にぶい黄橙（10YR7/4）
43		包含層	C－5	須恵器	平瓶	口縁部	(25%)	(12.3)	(6.4)	－	－	灰白（5Y7/1）
44		包含層	G－1	須恵器	坏蓋	体～口縁部	10%	(11.0)	(3.6)	－	－	灰（N5）
45		包含層	G－1	須恵器	坏身	口縁～体部	15%		(3.2)	－	－	灰（5Y6/1）
46		包含層	D－3	須恵器	坏身	口縁～体部	15%	(8.2)	(2.4)	－	－	灰（5Y6/1）
47		包含層	F－1	須恵器	坏身	口縁～体部	5%	8.4	(2.0)	－	－	灰（N5）
48		包含層	E－2	須恵器	坏身	口縁部	5%	(7.5)	(1.6)	－	－	灰（N6）
49		包含層	G－1	土師器	高坏	口縁～底部	－	(16.3)	(4.0)	－	－	にぶい橙（7.5YR6/4）
50		包含層		土師器	高坏	脚部	(30%)	－	(7.6)	－	(11.7)	にぶい黄橙（10YR6/4）
51		排水溝(西)		土師器	高坏	脚部	(40%)	－	(8.5)	－	(9.8)	にぶい橙（7.5YR7/4）

番号	遺構	出土地点	グリッド	種類	器種	部位	残存率（%）	法量（cm）				色調（外面）
								口径	器高	底径	高台径（脚部）	
52		包含層		土師器	高坏	底～脚部	(20%)	－	(7.5)	－	－	にぶい橙（2.5YR6/3）
53		包含層		土師器	高坏	脚部	(50%)	－	(8.1)	－	－	にぶい黄橙（2.5YR6/6）
54		包含層	F－1	土師器	高坏	脚部	(60%)	－	(5.6)	－	－	橙（5YR6/6）
55		包含層	H－5	土師器	高坏	脚部	(50%)	－	(5.6)	－	－	にぶい黄橙（10YR6/4）
56		包含層		土師器	高坏	脚部	(90%)	－	(7.8)	－	－	灰白（10YR7/1）
57		包含層	G－1・2	土師器	高坏	脚部	－	－	(5.9)	－	－	にぶい赤橙（2.5YR5/4）
58		包含層	G－2	土師器	高坏	脚部	(30%)	－	(5.7)	－	(4.2)	にぶい黄橙（10YR7/3）
59		包含層	F－2	埴輪	朝顔型埴輪？	突帯部	－	－	－	－	－	にぶい黄橙（10YR7/3）
60		包含層	G－2	土師器	坩	口縁～体部	15%	(11.2)	－	(4.0)	－	にぶい黄橙（10YR7/2）
61		包含層	G－2	土師器	ミニチュア土器	体～底部	70%	－	(2.9)	2.2	－	にぶい黄褐（10YR6/3）
62		包含層		土師器	甑	把手	－	－	(5.9)	－	－	橙（5YR7/6）
63		排水溝(西)		須恵器	坏蓋	天井～口縁部	60%	(16.8)	3.3	－	－	灰（10Y6/1）
64		包含層	F－1	須恵器	坏蓋	天井～口縁部	70%	14.1	2.8	－	－	灰（5Y6/1）
65		表土		須恵器	坏蓋	天井～口縁部	30%	(13.4)	3.0	－	－	灰白（5Y7/1）
66		包含層	表土・F－1	須恵器	坏蓋	天井～口縁部	95%	17.9	1.9	－	－	灰白（5Y7/1）
67		包含層	D－3	須恵器	坏身	口縁～底部	20%	(13.2)	(3.1)	10.1	－	灰（N6）
68		排水溝(西)		須恵器	坏身	口縁～底部	40%	(12.4)	3.6	(8.4)	－	灰（N6）
69		包含層		須恵器	坏身	口縁～底部	15%	(13.2)	3.2	(10.6)	－	灰（N6）
70		包含層	E－2	須恵器	皿	口縁～底部	5%	(16.4)	(2.3)	(13.7)	－	灰（2Y6/1）
71		包含層	C－3	須恵器	埦	口縁～体部	10%	(16.0)	(4.4)	－	－	灰（5Y6/1）
72		排水溝(西)		土師器	長胴甕	口縁～頸部	－	(23.6)	(5.5)	－	－	明赤褐（5YR5/6）
73		包含層		土師器	長胴甕	口縁～頸部	－	(17.5)	(4.7)	－	－	にぶい黄橙（10YR7/3）
74		法面		土師器	長胴甕	口縁部	(10%)	(20.7)	(4.0)	－	－	にぶい橙（7.5YR6/4）
75		包含層		土師器	長胴甕	口縁～頸部	－	(19.5)	(2.8)	－	－	灰黄褐（10YR5/2）
76		包含層	F－2	土師器	長胴甕	底部	－	－	(1.85)	6.6	－	にぶい黄橙（10YR6/3）
77		包含層	F－2～4	須恵器	甕	体部～底部	－	－	(21.4)	－	－	黒褐（7.5Y3/1）
78		包含層		灰釉陶器	碗	口縁部	(10%)	(18.0)	(3.5)	－	－	灰白（N7）
79		包含層	E－3	灰釉陶器	碗	体～底部	20%	－	(2.4)	－	(6.8)	灰白（2.5Y7/1）
80		包含層	D－2	灰釉陶器	碗	体～底部	10%	－	(1.9)	－	(6.6)	灰白（5Y7/1）
81		包含層	D－2	灰釉陶器	碗	体～底部	30%	－	(4.7)	－	7.5	灰（5Y6/1）
82		包含層	H－2	灰釉陶器	碗	体～底部	10%	－	(2.5)	－	(6.4)	灰（5Y6/1）
83		掘削土		灰釉陶器	碗	体～底部	10%	－	(1.8)	－	(6.0)	灰（5Y6/1）
84		包含層		灰釉陶器	碗	体～底部	25%	－	(2.7)	－	(7.8)	灰白（N7）
85		包含層	F－2	灰釉陶器	碗	体～底部	10%	－	(1.8)	－	(7.2)	灰（5Y6/1）
86		包含層	F－2	灰釉陶器	碗	体～底部	40%	－	(1.5)	－	6.0	灰白（2.5Y7/1）
87		包含層	G－3	灰釉陶器	小碗	口縁～底部	30%	(9.3)	2.75	－	(4.3)	灰白（2.5Y7/1）
88		包含層	E－2・F－3	土師器	清郷型甕	口縁部	(10%)	(34.4)	(3.7)	－		灰黄褐（10YR6/2）
89		包含層	F－2	土師器	三河型甕	口縁～頸部	－	(29.6)	(4.1)	－		にぶい黄橙（10YR6/3）
90		包含層	F－3	山茶碗	輪花碗	口縁～底部	60%	(17.2)	6.2	－	7.3	灰白（2.5Y7/1）
91		包含層	D－2	山茶碗	輪花碗	口縁～体部	15%	(15.95)	(4.7)	－		灰白（2.5Y7/1）
92		包含層	D・E－2	山茶碗	碗	口縁～底部	30%	(15.4)	5.2	－	(7.0)	灰白（2.5Y7/1）
93		包含層	E－2	山茶碗	碗	口縁～底部	80%	15.45	5.8	－	7.8	灰白（2.5Y7/1）
94		包含層		山茶碗	碗	口縁～底部	40%	(15.8)	－	－	(7.2)	灰白（N7）
95		包含層		山茶碗	碗	口縁～底部	20%	(17.1)	5.0	－	(7.4)	灰白（2.5YR7/1）
96		包含層	G－2	山茶碗	碗	口縁～底部	15%	(15.6)	6.0	－	(7.6)	灰白（2.5Y7/1）
97		包含層		山茶碗	碗	体～底部	30%	－	(3.0)	－	7.4	灰白（10YR7/1）
98		包含層	F－2・3	山茶碗	碗	口縁～底部	75%	14.5	5.7	－	6.3	灰黄（2.5Y7/2）
99		包含層	E－2	山茶碗	碗	口縁～底部	60%	16.0	5.3	－	7.0	灰白（2.5Y7/1）
100		排水溝(西)		山茶碗	碗	口縁～底部	20%	(16.4)	5.4	－	(8.8)	灰白（2.5Y7/1）
101		包含層		山茶碗	碗	体～底部	40%	－	(4.5)	－	(7.6)	灰白（2.5Y7/1）
102		包含層	D－3	山茶碗	碗	体～底部	20%	－	(3.9)	－	(8.1)	灰白（2.5Y7/1）
103		包含層	F－2	山茶碗	碗	口縁～体部	10%	(15.0)	(4.0)	－		黄灰（2.5Y6/1）
104		包含層		山茶碗	碗	体～底部	40%	－	(5.0)	－	7.15	灰白（2.5YR7/1）
105		包含層	F－1	山茶碗	碗	体～底部	50%	－	(1.9)	－	4.4	灰白（2.5Y7/1）
106		包含層	F－3	山茶碗	碗	口縁～体部	5%	(15.0)	(3.4)	－		灰白（2.5Y7/1）
107		包含層		山茶碗	碗	体～底部	5%	(15.4)	(4.4)	－		灰白（2.5Y7/1）
108		包含層	D－3	山茶碗	碗	体～底部	30%	－	(2.7)	－	(7.3)	灰白（2.5Y7/1）
109		包含層	C－3	山茶碗	碗	体～底部	20%	－	(1.8)	－	7.1	灰白（2.5Y7/1）
110		包含層	F－2・3	山茶碗	碗	体～底部	60%	－	3.0	－	8.25	灰白（5Y6/2）
111		包含層	H－4	山茶碗	碗	体～底部	(50%)	－	(3.1)	－	7.9	灰白（2.5Y7/1）

番号	遺構	出土地点	グリッド	種類	器種	部位	残存率(%)	法量(cm) 口径	器高	底径	高台径(脚部)	色調(外面)
112		包含層		山茶碗	碗	体～底部	15%	−	(2.8)	−	(6.0)	灰白 (N8)
113		包含層		山茶碗	碗	体～底部	30%	−	(3.4)	−	6.1	灰白 (N8)
114		包含層		山茶碗	碗	体～底部	30%	−	(3.0)	−	7.2	灰白 (5Y7/2)
115		包含層		山茶碗	碗	体～底部	30%	−	(2.9)	−	6.7	灰白 (10YR7/1)
116		包含層		山茶碗	碗	体～底部	35%	−	(2.9)	−	7.8	灰白 (5YR7/1)
117		包含層	F−2	山茶碗	碗	体～底部	50%	−	(2.6)	−	7.0	灰白 (2.5Y7/1)
118		包含層		山茶碗	碗	体～底部	40%	−	(2.7)	−	7.5	灰白 (2.5YR8/1)
119		包含層		山茶碗	碗	体～底部	30%	−	(2.6)	−	6.8	灰白 (5Y7/1)
120		排水溝(西)		山茶碗	碗	体～底部	40%	−	(2.4)	−	7.0	灰白 (2.5Y7/1)
121		包含層		山茶碗	碗	体～底部	30%	−	(2.5)	−	7.5	灰白 (10YR7/1)
122		包含層		山茶碗	碗	口縁～底部	45%	(17.3)	5.7	−	8.3	灰白 (N7)
123		包含層	G−2	山茶碗	碗	体～底部	50%	−	(2.2)	−	(6.9)	灰白 (2.5Y7/1)
124		包含層	F−3	山茶碗	碗	体～底部	40%	−	(1.8)	−	7.05	灰白 (5Y7/1)
125		排水溝(西)		山茶碗	碗	体～底部	40%	−	(1.9)	−	6.8	灰白 (N7)
126		包含層		山茶碗	碗	体～底部	35%	−	(2.2)	−	(8.0)	にぶい黄橙 (10YR7/2)
127		包含層	F−2	山茶碗	碗	口縁～底部	15%	(10.1)	3.0	−	(4.8)	灰白 (2.5Y7/1)
128		包含層	G−3	山茶碗	碗	体～底部	40%	−	(1.7)	−	7.75	灰白 (2.5Y7/1)
129		包含層		山茶碗	碗	体～底部	30%	−	(2.2)	−	7.2	灰白 (2.5YR7/1)
130		包含層	E−2	山茶碗	碗	底部	30%	−	(1.6)	−	6.65	灰白 (2.5Y7/1)
131		包含層	F−2	山茶碗	碗	体～底部	50%	−	(1.4)	−	7.05	灰白 (2.5Y7/1)
132		包含層	D−2・3・E−2・G−6	山茶碗	小碗	口縁～底部	60%	(9.8)	3.0	−	5.2	灰白 (2.5Y7/1)
133		包含層	C−3・4	山茶碗	小碗	口縁～底部	75%	9.75	2.8	−	4.7	灰白 (5Y7/1)
134		包含層	G−1	山茶碗	小碗	口縁～底部	85%	10.4	2.8	−	5.5	灰黄 (2.5Y7/2)
135		包含層	E−2	山茶碗	小碗	口縁～底部	30%	(8.4)	3.3	−	4.4	灰白 (2.5Y7/1)
136		包含層		山茶碗	小碗	体～底部	40%	−	(2.0)	−	4.3	灰白 (N7)
137		包含層	F−2	山茶碗	小碗	体～底部	30%	−	(1.1)	−	(7.1)	灰白 (2.5Y7/1)
138		包含層	G−4	山茶碗	小碗	口縁～底部	70%	8.45	2.7	−	4.0	灰白 (2.5Y7/1)
139		包含層		山茶碗	小碗	体～底部	30%	−	(1.9)	−	5.0	灰白 (2.5YR7/1)
140		包含層	F−4	山茶碗	小碗	体～底部	50%	−	(1.7)	−	4.6	灰白 (2.5Y7/1)
141		包含層	F−1	山茶碗	小碗	口縁～体部	10%	14.2	(3.9)	−	−	灰白 (2.5Y7/1)
142		包含層		山茶碗	小碗	口縁～底部	80%	(8.4)	2.8	−	4.3	灰白 (5Y7/1)
143		包含層	G−2	山茶碗	小碗	体～底部	20%	−	(2.2)	−	(4.3)	灰白 (2.5Y7/1)
144		包含層		山茶碗	小皿	体～底部	50%	−	(1.8)	3.4	−	灰白 (N7)
145		包含層	G−2・H−3	山茶碗	小皿	口縁～底部	40%	(7.6)	3.0	−	−	灰白 (2.5Y7/1)
146		包含層	E−2	山茶碗	小皿	口縁～底部	40%	(9.5)	2.6	−	(5.0)	白灰 (2.5Y7/1)
147		包含層	H−6	山茶碗	小皿	口縁～底部	30%	(8.0)	−	−	(4.4)	灰白 (2.5Y7/1)
148		包含層	F−2	山茶碗	小皿	口縁～底部	70%	8.3	2.7	4.1	−	灰白 (2.5Y7/1)
149		包含層	G−5	山茶碗	小皿	口縁～底部	60%	8.6	2.3	3.8	−	灰白 (10YR7/1)
150		包含層表土		山茶碗	小皿	口縁～底部	90%	8.0	2.1	4.1	−	灰白 (N7)
151		包含層	E−3	山茶碗	小皿	口縁～底部	60%	(8.1)	1.7	4.3	−	灰白 (2.5Y7/1)
152		包含層	C−3	山茶碗	小皿	口縁～底部	50%	(8.1)	2.3	(4.6)	−	灰白 (2.5Y7/1)
153		包含層		山茶碗	小皿	口縁～底部	80%	7.6	2.2	4.0	−	灰白 (2.5Y7/1)
154		包含層	E−3	山茶碗	小皿	口縁～底部	45%	(8.0)	1.6	(4.0)	−	灰白 (5Y7/1)
155		包含層		山茶碗	小皿	口縁～底部	90%	7.5	1.5	5.4	−	灰白 (5Y7/1)
156		包含層		山茶碗	子持器台	口縁～底部	25%	(4.0)	1.2	(2.8)	−	灰白 (N8)
157		包含層		山茶碗	鉢？	口縁～底部	10%	(24.0)	(6.2)	−	−	灰白 (10YR7/1)
158		包含層	E−2	青磁	椀	口縁～底部	−	(15.7)	(4.3)	−	−	黄灰 (2.5Y6/1)
159		排水溝(西)		白磁	椀	口縁～底部	−	(15.6)	(5.0)	−	−	灰白 (2.5Y7/1)
160		包含層		白磁	椀	口縁部	(15%)	(17.0)	(3.9)	−	−	灰白 (N8)
161		包含層	G−3	白磁	椀	体～底部	−	(2.0)	(2.0)	−	(5.4)	灰白 (2.5Y8/1)
162		包含層	G−2	白磁	椀	体部	−	−	−	−	−	灰白 (5Y7/1)
163		包含層		白磁	椀	体部	(5%)	−	−	−	−	灰白 (2.5Y7/1)
164		包含層	C−3	白磁	椀	口縁～体部	−	−	(3.8)	−	−	灰黄 (2.5Y7/2)
165		包含層	C−3・F−2・3	陶器	長頸瓶	口縁部	(5%)	(22.7)	(5.1)	−	−	黒褐 (2.5Y3/1)
166		包含層	G−2	陶器	甕	胴部	−	−	−	−	−	灰 (5Y5/1)
167		包含層	G−1	土師質土器	鍋	口縁～頸部	−	(19.3)	(4.3)	−	−	にぶい黄橙 (10YR7/2)
168		包含層		土師質土器	皿	口縁～底部	30%	(9.6)	2.1	(6.0)	−	にぶい橙 (7.5YR/4)
169		包含層		瓦器	椀	底部	(15%)	−	(0.7)	−	(6.6)	灰 (N4)
170		包含層	F−1	土師器	甕？	高台	(15%)	−	(2.2)	−	12.0	にぶい黄橙 (2.5Y5/1)

残存率の（　）は残存部位に対しての比率である。口径・底径・高台径の（　）は推定値、器高の（　）は残存値である。

註

1　浜松市立内山真龍資料館　坪井俊三氏より墨書について御教示頂いた。

参考文献

川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古學會
柴田　稔　1986『地蔵山古墳群測量調査報告書』
柴田　稔　1987『北山遺跡』静岡県磐田郡浅羽町教育委員会
柴田　稔　1987『権現山遺跡』静岡県磐田郡浅羽町教育委員会
加藤芳郎　1993「浅羽町新堀遺跡の地学的背景」『新堀遺跡』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
柴田　稔　1993『古新田』Ⅱ 遺物編　静岡県浅羽町教育委員会
赤塚次郎　1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
市原寿文　1994「自然環境の変遷」『静岡県史 通史編１ 原始・古代』静岡県
足立順司　1995「長崎７期土器について」『長崎遺跡』Ⅰ（遺物・考察編）財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
植松章八　1995「静岡県内出土文字資料にみる古代の地名について」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立 10周年記念論文集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
松井一明　1995「第２節遺物について 古墳」『坂尻遺跡』遺物・総括編　袋井市教育委員会
中世土器研究会編　1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
柴田　稔　1997「古墳時代の遺跡」『浅羽町史 資料編１ 考古 古代 中世』浅羽町
加藤理文ほか　1998『元島遺跡』Ⅰ（遺構編 本文）財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木敏則　1998『梶子北遺跡』遺物編（本文）財団法人浜松市文化協会
山本義孝　2000『中島遺跡・浅羽大囲堤』浅羽町教育委員会
山本義孝　2000『北ハサマ遺跡』浅羽町教育委員会
山本義孝　2000『北野遺跡・宮前遺跡』浅羽町教育委員会
赤塚次郎・早野浩二　2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第２号　㈶愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター
北村和宏　2001「古代「三河型甕」考」『研究紀要』第２号　㈶愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター
鈴木敏則　2001「埴輪」『静岡県の前方後円墳』静岡県教育委員会
三河古墳研究会編　2001『東海の後期古墳を考える』
山本義孝　2001『十二所居館』浅羽町教育委員会
松井一明　2002『掛之上遺跡』14・15・19 本文編　静岡県袋井市教育委員会
松井一明　2003『掛之上遺跡』Ⅸ・Ⅹ　静岡県袋井市教育委員会
真鍋成史　2003『考古資料大観』７弥生・古墳時代 鉄・金属製品　小学館
山本義孝　2003『浅羽町内遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　浅羽町教育委員会
鈴木敏則　2004『有玉古窯』浜松市教育委員会
岩本　貴　2005「第１節 弥生・古墳時代土器の様相」『元島遺跡』Ⅱ（遺物編）財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
丸杉俊一郎ほか　2007『井通遺跡』本文編１　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
安間巧巳　2008『日本古代鉄器生産の考古学的研究』渓水社
藤沢良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
田村隆太郎ほか　2008『森町円田丘陵の古墳群』第１分冊　中日本高速道路株式会社横浜支社　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
大谷宏治　2010『合代島丘陵の古墳群』中日本高速道路株式会社東京支社　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

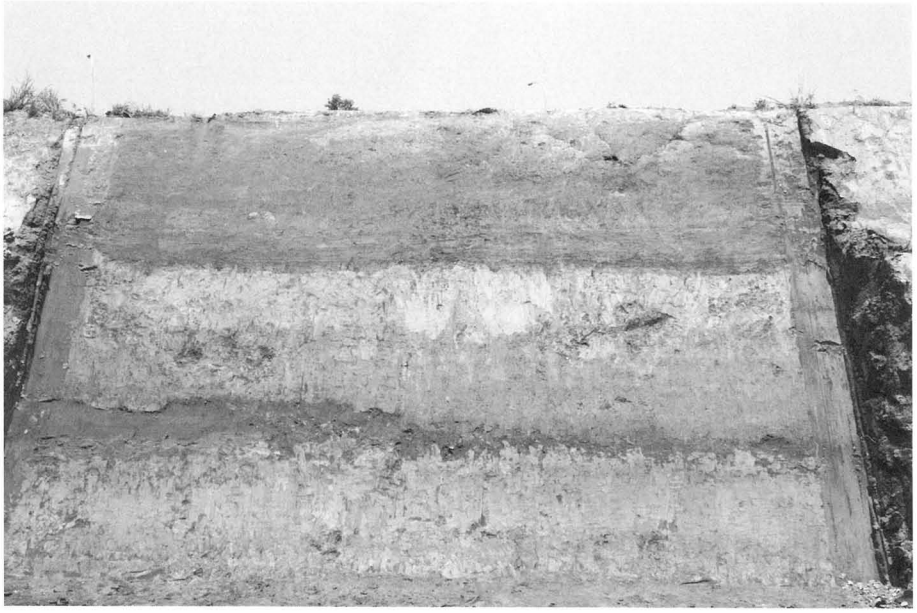
写　真　図　版

1．遺跡遠景（北から）

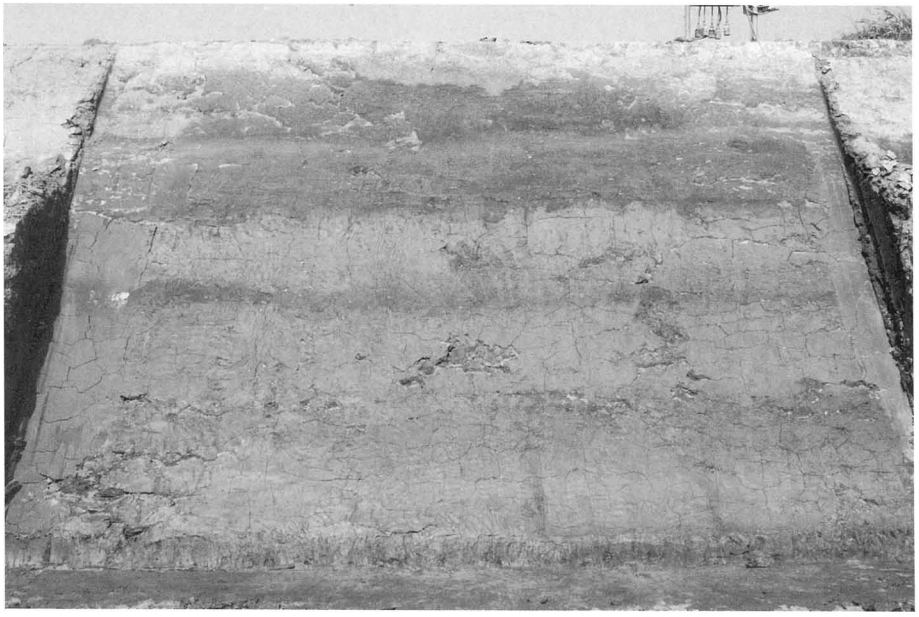
写真図版2

1．遺跡全景（北から）

2．出土遺物集合



1．基本土層（北壁）



2．基本土層（東壁）

3．基本土層（南壁）

写真図版4

1．第１遺構面調査区全景（南から）

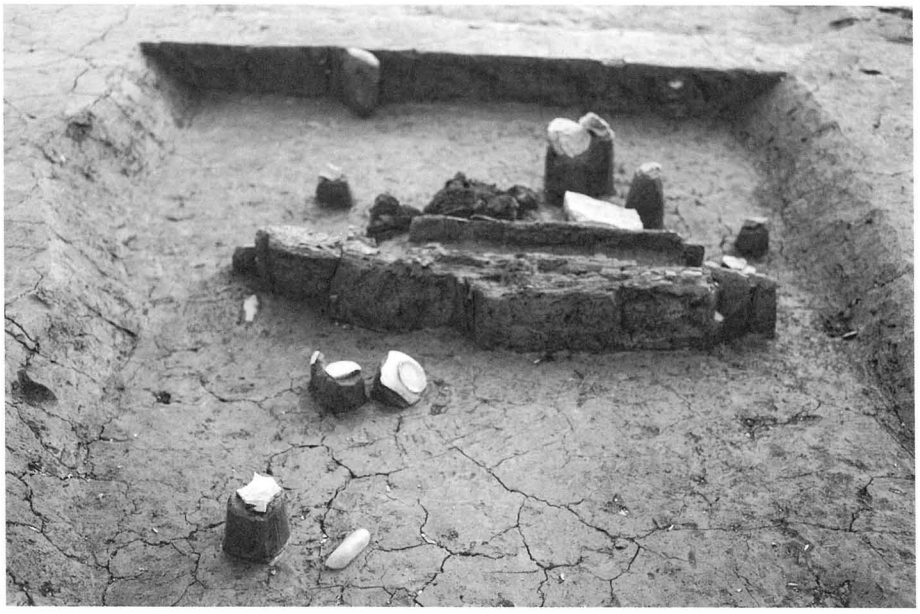
2．１号掘立柱建物跡完掘状況（南から）

3．１号土坑完掘状況（東から）

4．１号土坑遺物出土状況（東から）

5．２号溝状遺構完掘状況（南から）

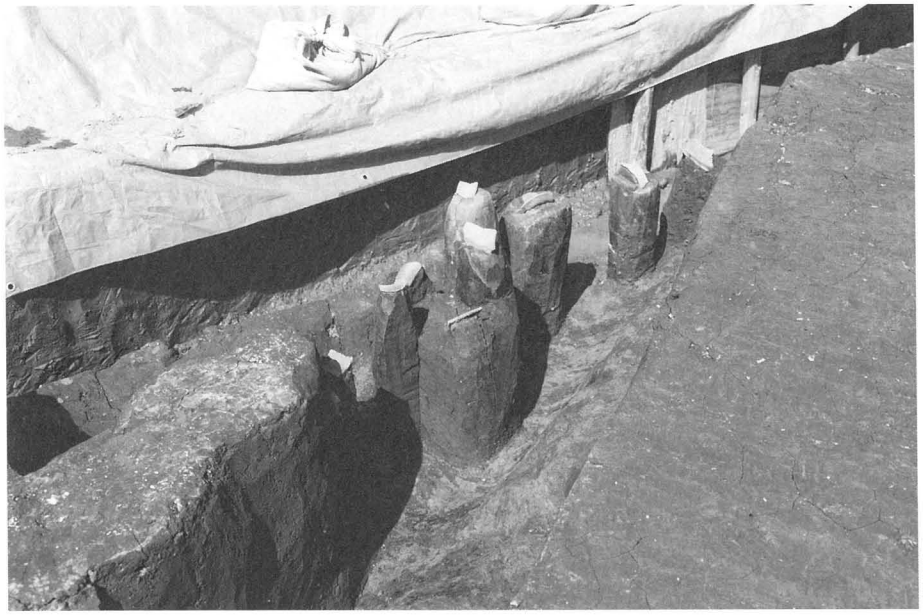
1．１号溝状遺構
完掘状況（南から）



2．１号溝状遺構
遺物出土状況（北から）

3．３号溝状遺構
完掘状況（南から）

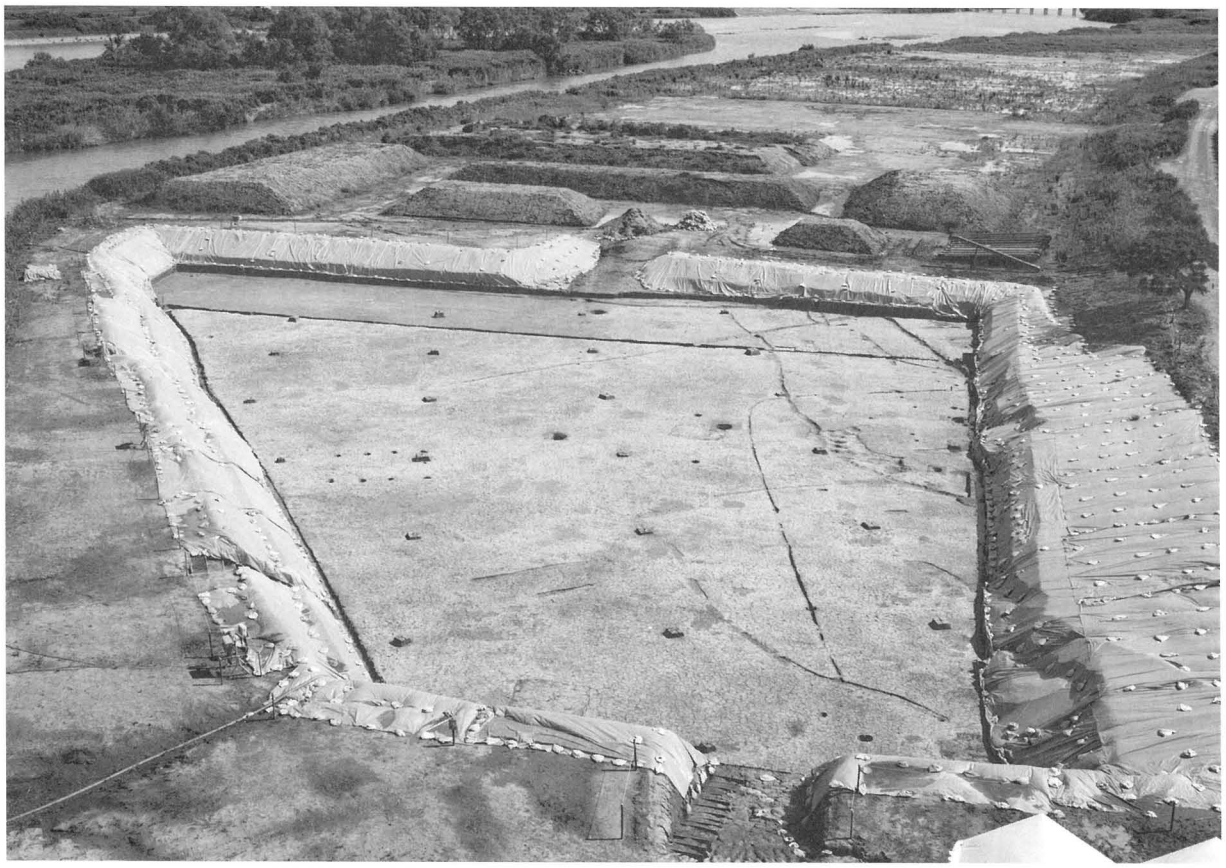
写真図版6



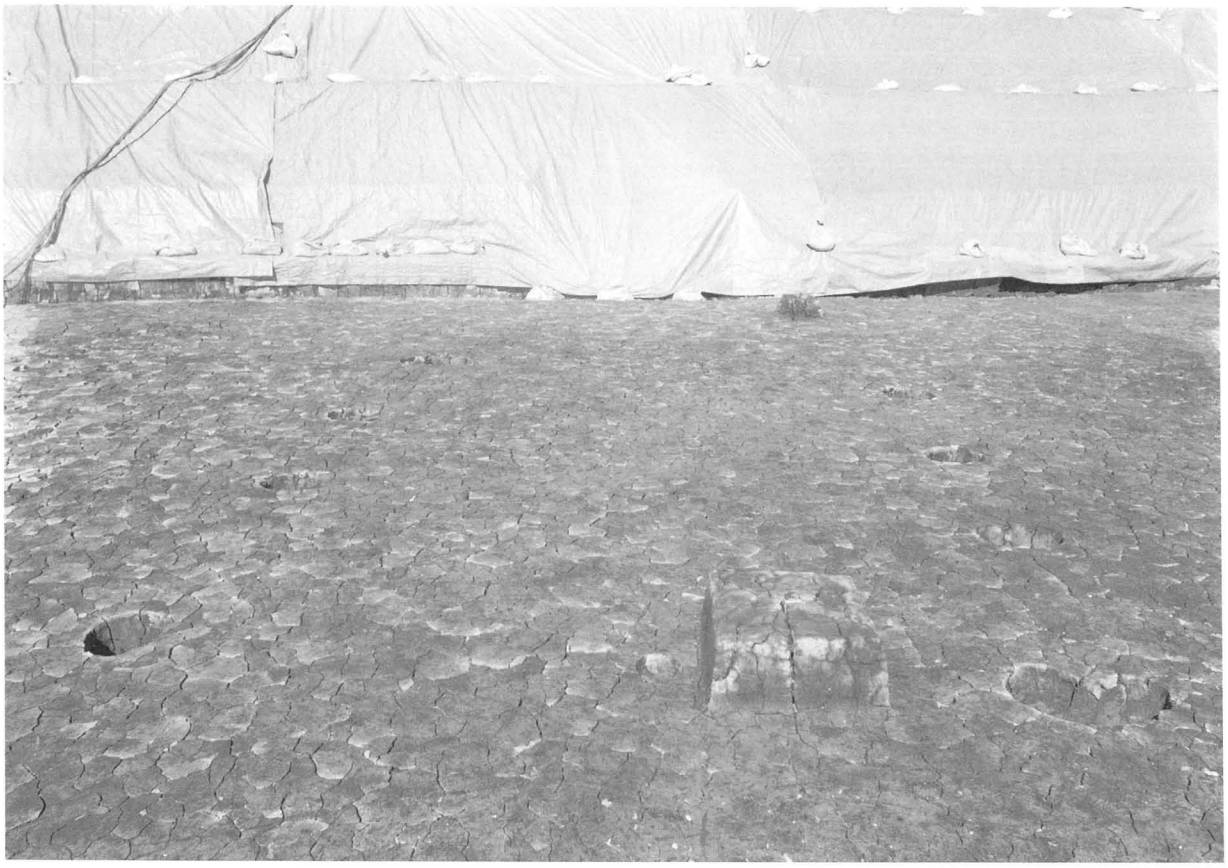
1．３号溝状遺構
遺物出土状況（1）
（南から）

2．３号溝状遺構
遺物出土状況（2）
（南から）

3．土器集中１検出状況
（南から）



1．第２遺構面調査区全景（北から）



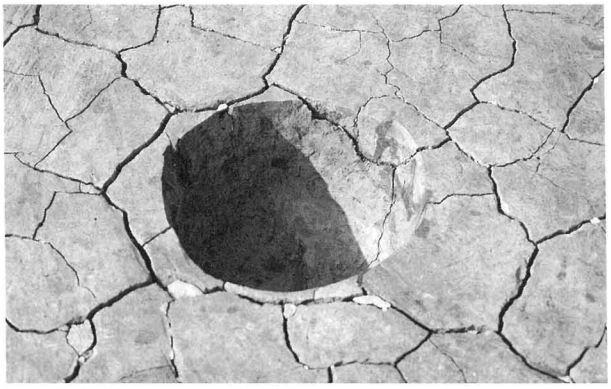
2．２・３号掘立柱建物跡完掘状況（西から）

写真図版8

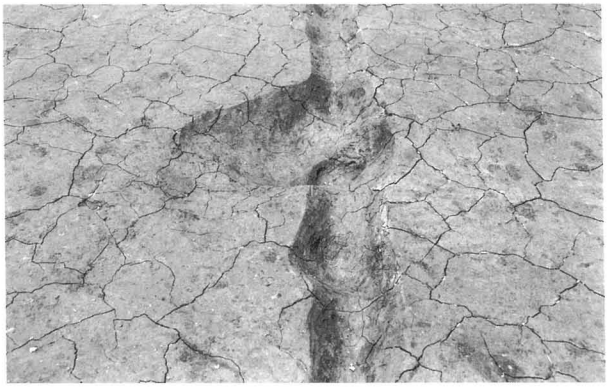
1．４号掘立柱建物跡完掘状況（北から）

2．ピット14・16～19完掘状況（南東から）

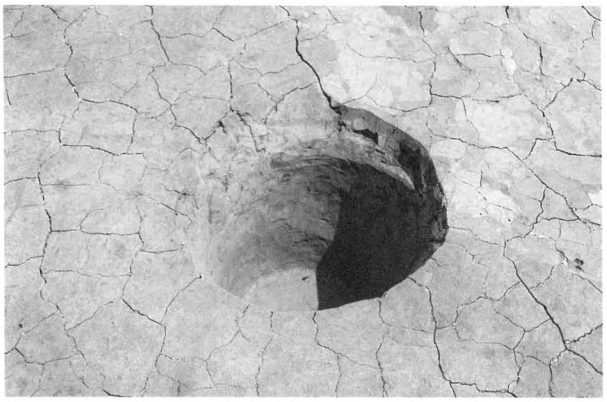
3．ピット21～25完掘状況（南東から）



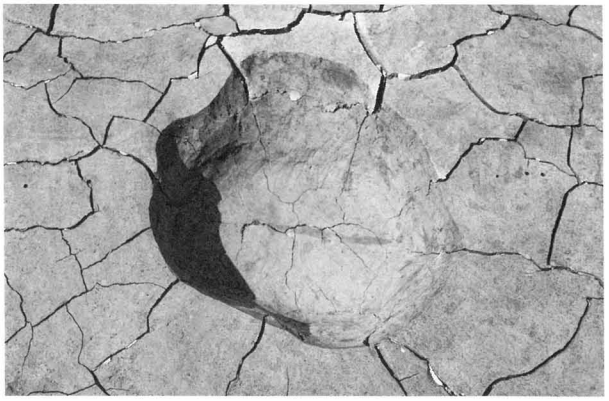
4．ピット28完掘状況（南から）



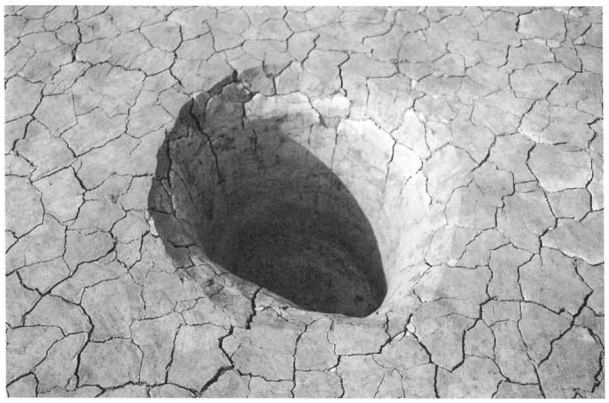
5．ピット20完掘状況（東から）



1．４号土坑完掘状況（南から）

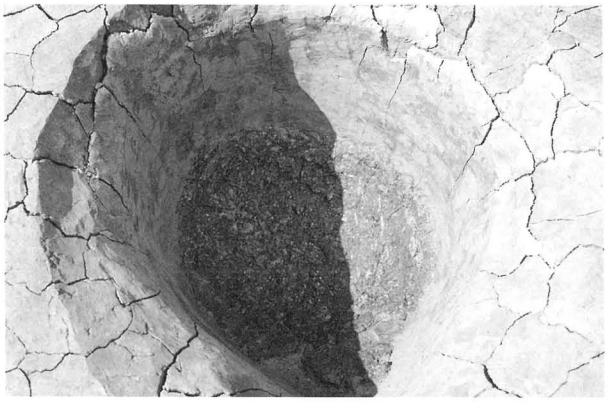


2．５号土坑完掘状況（南から）

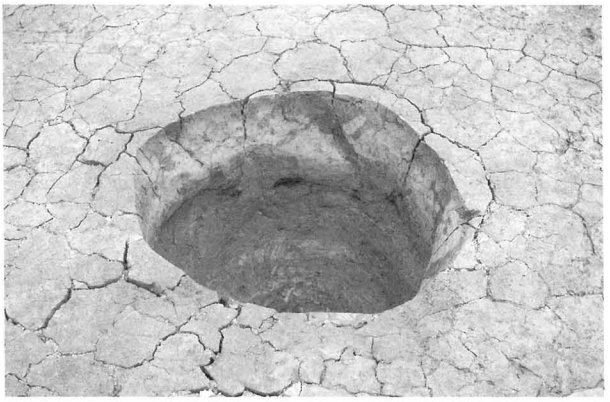


3．６号土坑完掘状況（南から）

4．６号土坑遺物出土状況（南から）



5．６号土坑炭化物検出状況（南から）



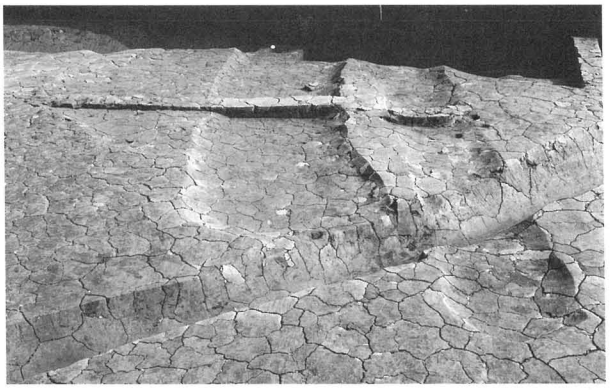
6．７号土坑完掘状況（東から）

7．８号土坑完掘状況（東から）

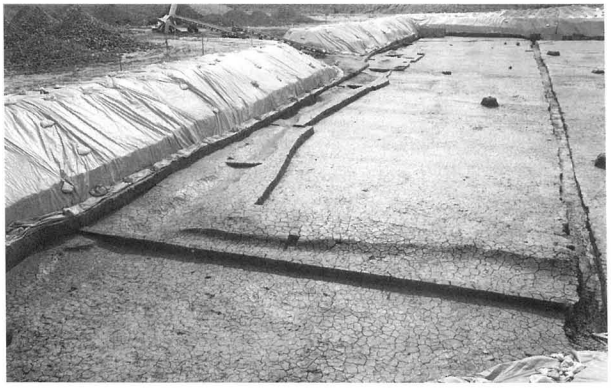
写真図版10

1．12号溝状遺構完掘状況（南から）

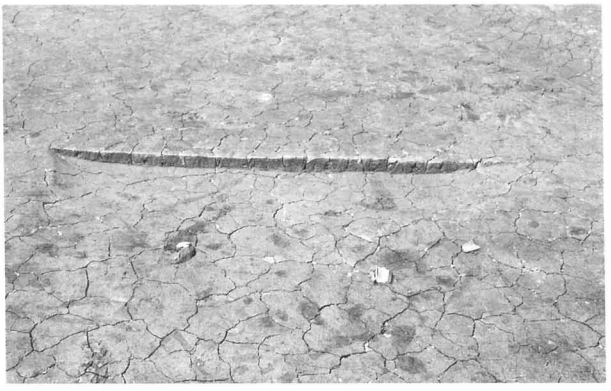
2．12号溝状遺構遺物出土状況（東から）



3．20・21号溝状遺構完掘状況（北から）

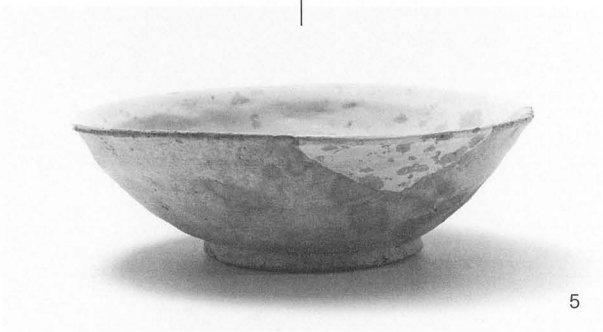


4．22号溝状遺構完掘状況（東から）



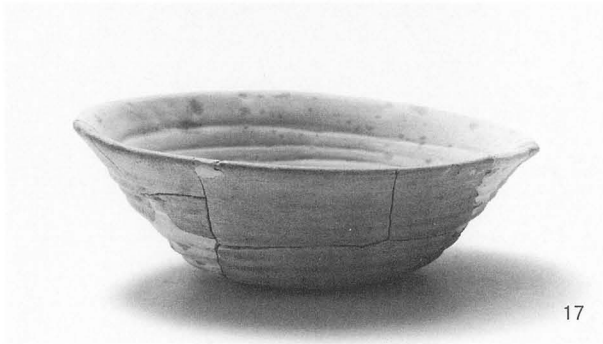
5．1号性格不明遺構遺物出土状況（南から）

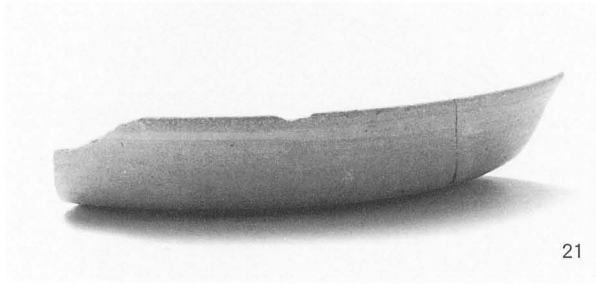
1

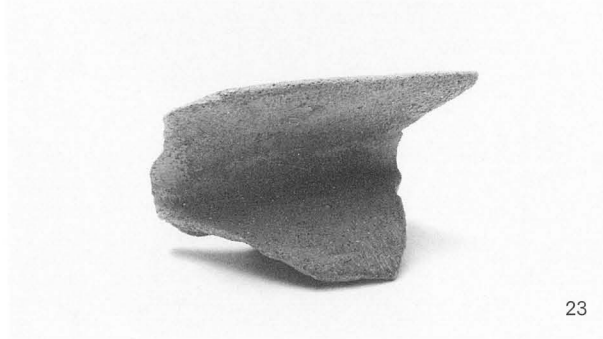

5

10

8


17


21


23

1．出土遺物（1）土器

写真図版12

24

30

50

26

51

61

27

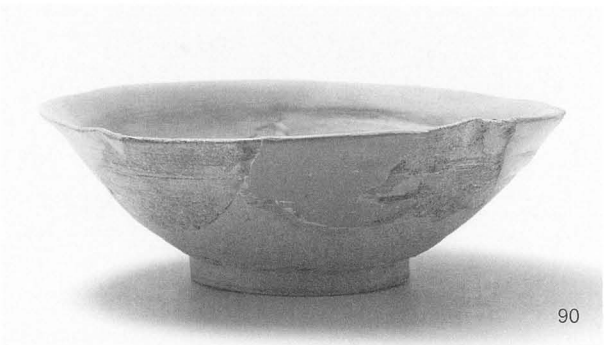
63

1．出土遺物（2）土器

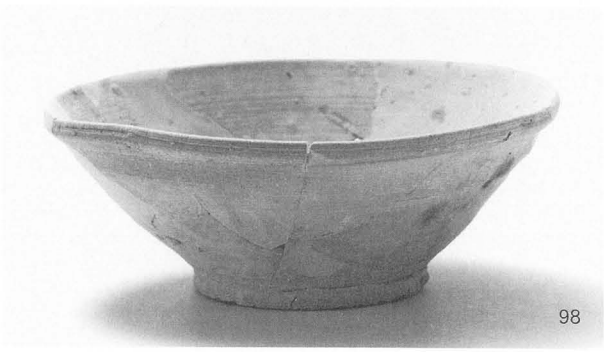
64

66

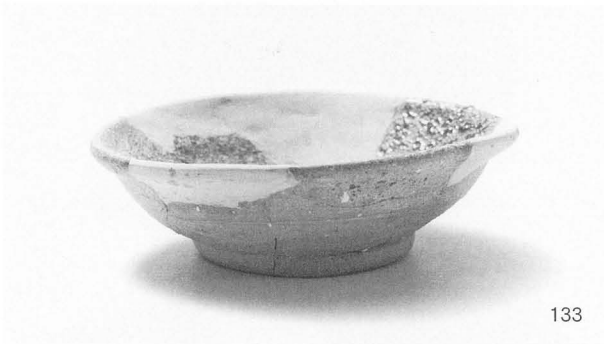
68


90

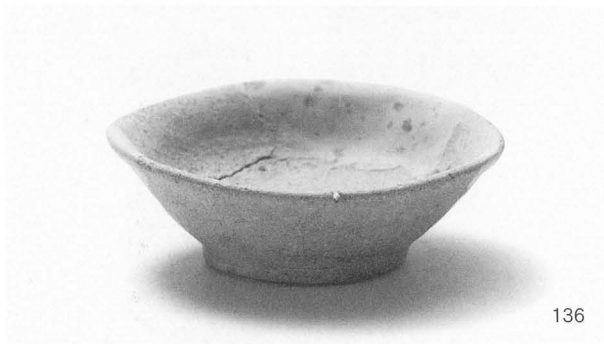
93


98

99

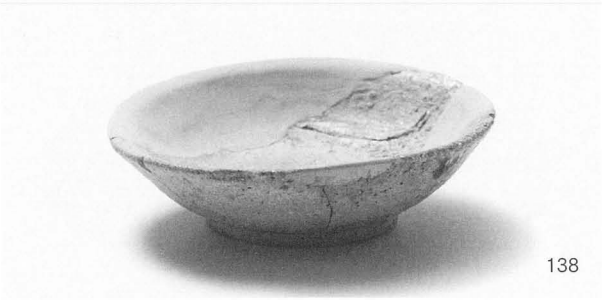

133

134


136

1．出土遺物（3）土器

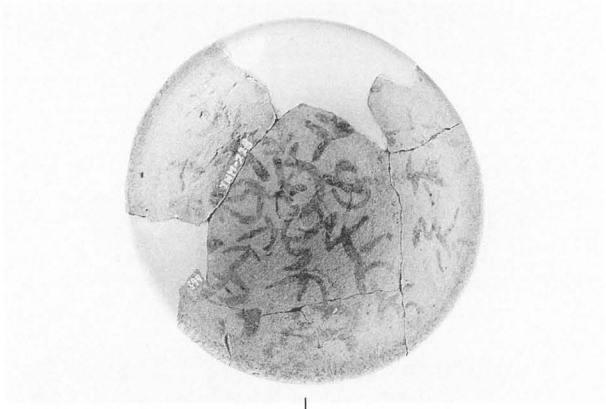
写真図版14


138

148

149

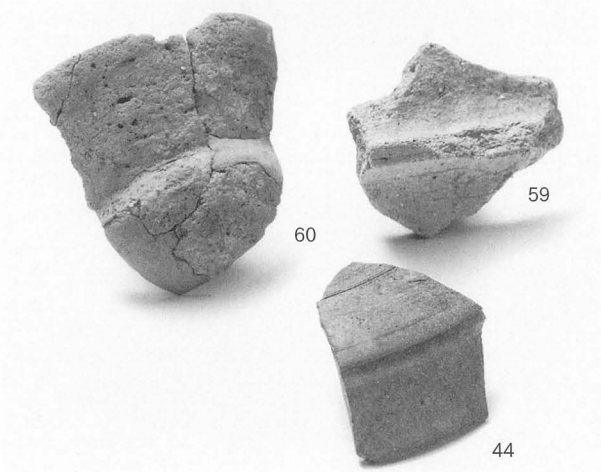
150

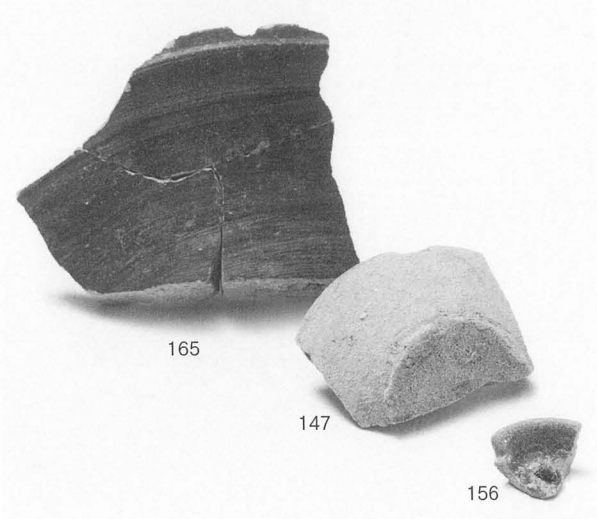


155

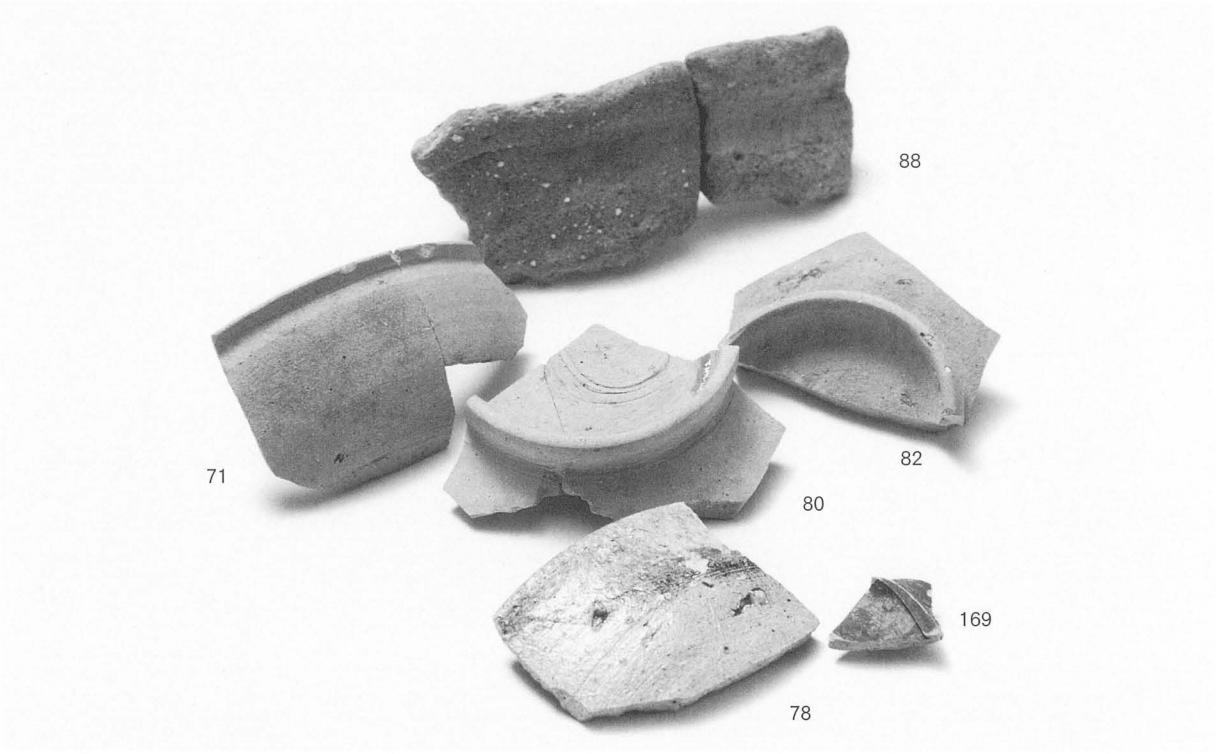
153

167

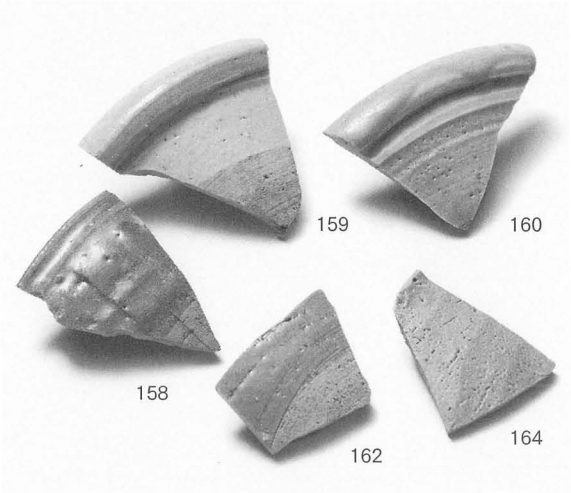




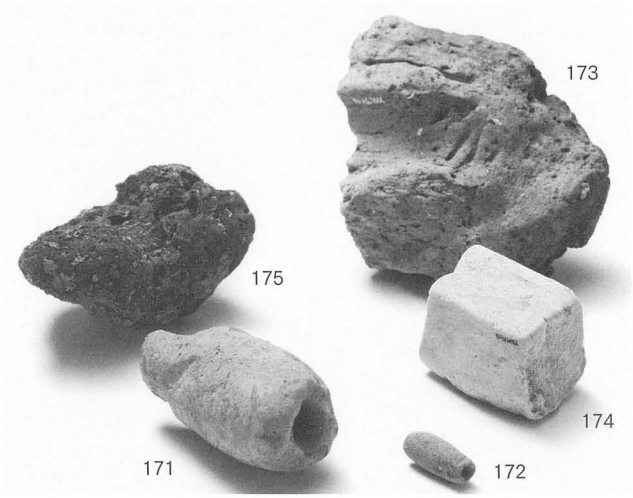
1．出土遺物（4）土器・埴輪



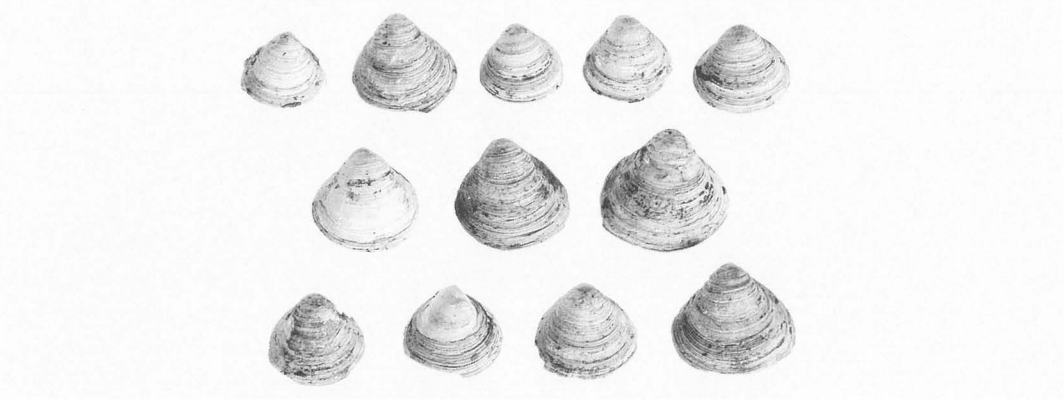
1．出土遺物（5）土器



2．出土遺物（6）青磁・白磁



3．出土遺物（7）砥石・鉄滓・羽口



4．出土遺物（8）SD3出土貝類

報告書抄録

ふりがな	にしむかいいせき
書名	西向遺跡
副書名	平成21年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第236集
編著者名	三原翔吾
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422－8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20　TEL054－262－4261(代表) FAX054－262－4266
発行年月日	西暦2011年2月25日

所収遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
西向遺跡(にしむかいいせき)	静岡県(しずおかけん) 袋井市(ふくろいし) 中(なか) 字西向(あざにしむかい)	222160	—	世界測地系 34° 42′ 15″ 日本測地系 34° 42′ 03″	137° 53′ 57″ 137° 54′ 08″	200911 ～ 201008 (埋め戻し期間を含む)	2550	平成21年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務(試掘・確認調査、記録保存調査)

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西向遺跡	集落	古墳時代 古代 中世	掘立柱建物跡４ 溝跡21 土坑８ 柱穴・小穴38 土器集中１ 性格不明遺構３	土師器台付甕 須恵器坏身・坏蓋 灰釉陶器碗・小碗・小皿 清郷型甕 山茶碗 墨書土器 羽口 鉄滓 埴輪 管状土錘・砥石	羽口・鉄滓・砥石出土。遺跡周辺に製鉄炉が所在か。

要約	袋井市の南西部、太田川右岸に位置する遺跡である。自然堤防が発達し、高乾地に遺跡が占地している。古墳時代中期から鎌倉時代の集落跡を検出した。 出土遺物は山茶碗が主体的、土師器・須恵器・灰釉陶器は客体的である。特出するべき遺物として羽口・鉄滓・砥石・埴輪がある。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第236集

西向遺跡

平成21年度二級河川太田川広域河川改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年2月25日

編集発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20
TEL　054－262－4261㈹
印 刷 所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL　055－921－1839㈹